

附属学校国際教育推進委員会報告書（第 11 集）

～ 2019 年度～

附属学校群の国際教育の推進



2020 年 3 月

筑波大学附属学校教育局

附属学校国際教育推進委員会

目 次

1. はじめに

筑波大学附属学校群における国際教育実践研究の意味

副学長・附属学校教育局教育長

国際教育推進委員会委員長 茂呂雄二 3

2. 附属学校の国際教育 4

3. 共通コンセプトに基づく附属学校の国際教育の取り組み等 6

4. 各附属学校の国際教育活動

(1) 先進的教育技術交流・児童の国際交流をめざして

(附属小学校) 10

(2) 日常の活動の延長線上にある国際教育

(附属中学校) 16

(3) グローバル人材の育成を目指して

(附属高等学校) 21

(4) 2019 年度国際交流プログラムにおける生徒の海外・相互交流での活躍

(附属駒場中・高等学校) 27

(5) WWL 拠点校として Beyond SGH

(附属坂戸高等学校) 34

(6) グローバル社会で活躍する視覚障害当事者の育成を目指して

(附属視覚特別支援学校) 38

(7) 聴覚特別支援学校における国際教育推進事業

(附属聴覚特別支援学校) 44

(8) 附属大塚特別支援学校の国際教育の取り組み

(附属大塚特別支援学校) 48

(9) 国際的視野で物事を捉え、積極的に自己発信する桐が丘

(附属桐が丘特別支援学校) 52

(10) 附属久里浜特別支援学校の国際交流

(附属久里浜特別支援学校) 60

5. 各附属学校のイングリッシュルーム活動

(1) 留学生との交流会

(附属小学校) 64

(2) 附属中学校 イングリッシュルームの活用報告

(附属中学校) 65

(3) 附属学校のイングリッシュルーム活動について

(附属高等学校) 66

(4) English Room：日常活動および海外研究発表とその先の支援

(附属駒場中・高等学校) 67

(5) 楽しい英語活動と WWL 校としての活動の両立を目指して 2019－2020

(附属坂戸高等学校) 68

(6) 附属視覚特別支援学校のイングリッシュルーム活動

(附属視覚特別支援学校) 69

(7) イングリッシュルーム活動

(附属聴覚特別支援学校) 72

(8) 知的障害特別支援学校におけるイングリッシュルーム活動

(附属大塚特別支援学校) 74

(9) 児童生徒の主体的な学習を引き出すイングリッシュルーム

(附属桐が丘特別支援学校) 75

6. おわりに

附属学校の国際教育の目指すものは

附属学校教育局次長

附属学校国際教育推進委員会副委員長 濱本悟志 77

(資料) 附属学校の国際交流協定締結状況 78

報告書発行の記録 83

委員会名簿 84

1. はじめに

筑波大学附属学校群における国際教育実践研究の意味

副学長・附属学校教育局教育長 茂 呂 雄 二

筑波大学附属学校群は、第3期中期計画・中期目標において、次のような国際教育あるいはグローバル人材育成に関する実践研究を進めている。

- ①【中期計画 12】『…スーパーグローバルハイスクール事業（SGH）や国際バカロレア教育システムの構築、附属学校教育、大学教育を通じてグローバル人材を育成する。』
- ②【中期計画 48】『…スーパーグローバルハイスクール事業や国際バカロレア教育による高大連携を通じたグローバル人材育成システムの構築、及び教育系の大学院と組織的に連携し高度な専門性をもつ教師の育成システムの構築を行う。』
- ③【中期計画 49】『先導的教育拠点、教師教育拠点、国際教育拠点の成果を活かし全国の大学・附属学校と「コンソーシアム」を構築し、グローバルな素養を育てるカリキュラムを開発・提案する。…』

このうち、①と③については、重要業績評価指標（KPI）を立てているが、①の KPI『SGH 対象校において、平成 33 年度までに海外での武者修行経験者を SGH 対象生徒の 80% 以上に』と③『平成 30 年度までにグローバルな素養を育てるカリキュラムを開発』については、すでに平成 30 年度に達成された。②については、附属坂戸高校の IBDP プログラムを中核として人材育成システム構築を追求するとともに、本学教育研究科との連携を通じて教師育成にも貢献している。

さて、文部科学省によるスーパーグローバルハイスクール事業（SGH）は平成 30 年度をもって事業終了となり、その後継事業として令和元年度より、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業が開始され、本学も SGH に続き採択されるはこびとなった。さらに管理機関を委託されて WWL 事業によるグローバル人材育成の全国展開において重責を果たすこととなった。


この WWL 事業では、附属坂戸高校を拠点校として、附属高校、附属駒場高校ならびに特別支援学校の高等部も加わり、本学大学教員のリソースを活用した高大連携を果たしながら、国際教育・グローバル人材育成の探究型カリキュラム開発を開始したところである。この事業のコンソーシアムには、国内外の高校や大学ならびに東南アジア教育大臣機構等とも連携する、きわめて大規模で重厚なコンソーシアムが構築できている。このなかで、生徒達が国内外のフィールドワークを通じた、学びと交流を進めて行くというわけである。

ところで、本学附属学校群は、中期目標・中期計画とは独立して、従前から国際教育実践研究を継続してきている。附属学校群には3つの拠点構想に基づく実践研究があり、そのうちのひとつが「国際教育拠点」である（他の2つは「先導的教育拠点」「教師教育拠点」）。これは、「社会の要請に基づく、国際的視野をもった基礎学力の修得や生涯学習体系の基礎モデルとなる先導的な初等・中等教育拠点を形成する」とする中期目標に沿って、『自国や他国の文化を理解し、大切にすることを養い、積極的に外国の人とコミュニケーションを取る態度を養う』ことを目指している。この拠点構想に基づいて、附属各校は日常的に国際教育の実践研究を継続してきている。むしろ今回の WWL 事業の採択の基礎になったのは、このような普段からの不断の「国際化の日常化」の賜物といえる。

最後に国際教育に限らず、今日、教育実践の成果検証が求められる。これは言うは易しいが非常に困難な課題となる。現行の評価は個人単位である。投下した資源に対してどれだけ個人効果が上がったのかの報告を求められることが多い。その方法も、それなりに充実してきているので、適当な方法を見つけて、インプットすれば個人の“伸び”と称するものが出ては来る。学校や学級というグループやコミュニティの成果とはどう測れば良いのだろうか。コンソーシアム全体の成果にどのような物差を当てれば良いのか。教育の意味を理解するためにも、成果とその検証を再考する必要があると思う。

2. 附属学校の国際教育

国際教育の推進の必要性

 なぜ、国際教育は必要なのか？


「ヒト」や「情報」が国境を越えて高速移動している。このため、国際化に対応した能力は、一部の人だけではなく、**誰にでも必要な能力**となってきた。このような社会の中で活躍できる人材を育成することが附属学校の使命。

取引先の担当者が外国人だけど、どう接したらいいの？

海外勤務になったけど、異文化になじめるの？



海外に支店や工場をつくることになったけど、日本とは何が違うの？

 グローバル社会で求められる能力とは？

例えば、異なる国や文化の人々と臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や、相手の文化的・社会的背景を踏まえた上で、相手の意図や考えを的確に理解し、自らの考えに理由や根拠を付け加えて、論理的に説明したり、議論の中で反論したり相手を説得したりできる能力などがあげられる。



要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感、使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

国際社会における筑波大学の使命

- 21世紀において国際社会へ向けて果たすべき本学の役割は、
 - (1)高い研究レベルに裏打ちされた「知の蓄積と発信」
 - (2)国際的リーダーとなる人材の輩出
 - (3)国際的な連携の構築であるとする。

- 筑波大学は、急速にグローバル化が進む世界情勢のなかで、世界をリードする研究型大学としての使命を果たすために、未来を切り拓く知の創造を通じて、地球規模課題に対する解決策を提示することを目指す。

附属学校における取組

「国際化対応能力を培う国際教育拠点」をかがげ、各校の特色を生かした国際教育を推進

国際化対応能力を培う

国際教育拠点

附属の共通コンセプト

- 幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養うとともに、積極的に外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う。
- 教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために出来ることを考える。

各校の特色を生かした人材育成

【小中高】

小中高での全人教育を通して、世界をも視野に入れた多様な社会で活躍できるように、確かな教科教育、多彩な学校行事や児童生徒の諸活動に裏打ちされた自主的・自律的・自由な人材を育成する。

【駒場】

トップリーダー育成の一助として国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材育成を図る。

【坂戸】

総合学科ならではの多角的な国際教育を通し、持続発展可能な社会の実現に向け、地球的課題に対し主体的に考察・行動できる人材を育成する。

【視覚】

国際交流等により国際性を身に付けた人材を育成する。

【聴覚】

国際交流でのコミュニケーションを通し、異文化を理解する人材を育成する。また日本語のみならず、海外の言葉にも興味・関心持つ人材を育成する。

【大塚】

外国の人と共に活動し、仲良く楽しむことができる。外国の人とのふれあいを通してスムーズに交流できる。

【桐が丘】

国際交流の経験を糧に、国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲のある児童・生徒を育成する。

【久里浜】

子どもの興味関心に応じた触れあいから、外国や外国人について親しみをもち、相手を知ろうとする気持ちを育む。

3. 共通コンセプトに基づく 附属学校の国際教育の取り組み等

		小学校	中学校	高校	駒場中・高校	坂戸高校
共通コンセプト		幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養うとともに、積極的に教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために				
各校の国際教育の目標 (国際教育を通じて育成する生徒像)		各校の特色を生かし				
		小中高での全人教育を通して、世界をも視野に入れた多様な社会で活躍できるように、確かな教科教育、多彩な学校行事や児童生徒の諸活動に裏打ちされた自主的・自律的・自由な人材を育成する。		トップリーダー育成の一助として国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材育成を図る。		総合学科ならではの多角的な国際教育を通じ、持続可能な社会の実現に向け、地球的課題に対し、主体的に考察・行動できる人材を育成する。
(国際教育を通じて広がる教師力)		・諸外国の児童・生徒の実態、教育事情を実際に体験することで、世界に誇ることができる日本の教育の特色(長・短を含む)を再認識することができる。 ・プレゼンテーション能力を向上することができる。	・現地の授業・生活を直接体験することで、教師に求められる指導力や指導の方法が国によって異なったり、国を越えて共通していたりすることを理解する。又教師自身が他国との交流を通じて国際社会の現状の一端を実感する。	・教師の語学力向上を図るとともに、他国の文化を尊重できる国際的な感覚を身に付ける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。	・教師の語学力を高めるのみならず、海外との交流を通じて異文化理解を深める。	・教科の枠を超えた協働により、教師それぞれが持つ知見を活かしながら、地球的課題を意識した教育を行う力を身につける。
(国際貢献)		・国内へ発信している教育成果を海外教育技術支援へ活用。	・国内各地へ発信している教育技術や、教師教育の成果を海外の先生方とも共有する。	・国内へ発信している教育成果を、海外へも発信する。	・海外、とりわけアジア諸国の学校の生徒と研究発表を行うことでお互い切磋琢磨することができる。同時に文化的な交流をし、お互いの理解に貢献する。	・本校との協働を通し、アジアの各校に対して本校とともに持続発展可能な社会のあり方について考える機会を与える。
取組 (令和元年度)	幼児児童生徒	・ハワイ大学附属小学校、附属高等学校との児童交流会、親子20組参加 ・同時期にワイキキ小学校との交流会も実施 ・北欧授業交流(デンマーク、リンビートーベック市との提携による授業研究会) ・筑波大学外国人留学生との交流会	・アメリカ短期留学(West-Mont Christian Academy)に36名が参加 ・シンガポール短期留学(Hwa Chong Institution)に1名が参加(附属高校と合同で実施) ・深圳中学、龍崗初級中学が訪問。生徒同士の交流会も実施。	・国際学術シンポジウム(HAS)に生徒派遣3名、韓国。 ・アジア太平洋青少年リーダーズサミット(APYLS)に生徒派遣3名、シンガポール。 ・プリンスエドワード島大学へ生徒派遣16名、カナダ。 ・国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム、生徒派遣2名、フランス。 ・日中高校生交流(北京)生徒派遣9名、ホームステイ受け入れ10名。中国北京市。 ・Hwa Chong校との交換留学、生徒派遣9名、ホームステイ受け入れ9名、シンガポール(生徒派遣については、コロナウイルスの影響で延期予定) ・各種国内会議(高校生国際ESDシンポジウム、全国高校生合同フォーラム、クーベルタン嘉納ユースフォーラム、模擬国連など)において生徒発表。	・筑波大学外国人留学生との交流(文化祭訪問) ・さくらサイエンス・ハイスクールプログラム「大隅博士特別講演」4月23日(火)インド他の高校生と引率者、合計112名が来校。 ・台中一中の本校訪問(5月28日(火)) ・台中一中訪問2019年12月10日(火)～15(日)(高1・4名、高2・12名) 理数を中心とした研究発表交流 ・国際学生科学フェア2020(ISSF)、2020年1月15-20日(Thailand)(2名) ・釜山国際高校、本校訪問1月16日(高校生16名) ・釜山国際高校訪問3月24日～28日(高1・6名、高2・6名)発表活動・文化交流他	・AIMS留学生33名と交流 ・JSTさくらサイエンスプログラム タイ・インド・ブルネイから高校生団体55名受け入れ ・台湾・新竹縣立湖口高級中學生徒28名教員2名受入 ・「国際フィールドワーク」実施、生徒7名 ・姉妹校、コルニタ高校訪問 ・インドネシア 姉妹校へ2名1年間留学 ・オーストラリア夏季研修プログラム 生徒18名、教員3名参加 ・WWL事業「高校生国際シンポジウム・The 1st SDGs Global Engagement Conference @ Tokyo」本校生徒による企画・運営実施 ・フィリピン大学附属ルーラル高校スタディツアー 生徒2名教員1名受け入れ ・卒研支援プログラムで韓国へ生徒1名渡航 ・台湾臣民高級中学校に1名1年間留学

視覚特別支援学校	聴覚特別支援学校	大塚特別支援学校	桐が丘特別支援学校	久里浜特別支援学校
外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う。 出来ることを考える。				
た国際教育の取組				
国際交流により国際性を身に付けた人材を育成する。	国際交流でのコミュニケーションを通じ、異文化を理解する人材を育成する。	外国の人と共に活動し、仲良く楽しむことができる。 外国の人とのふれあいを通じてスムーズに交流できる。	国際交流の経験を基に国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲。また、その実践の場を校外にも求める主体性のある児童生徒を育成する。	子どもの興味関心に応じた触れ合いから、外国や外国の人について親しみをもち、相手を知ろうとする気持ちを育む。
・外国文化の研鑽を深める機会となる。 ・国際教育を通じて、グローバルな視野、コミュニケーション能力を身につける。	・教師自身の視野を広め、語学力の向上を図る。そして聴覚障害教育の国際教育拠点の学校として、海外に発信できる力を身に付ける。	・外国文化の研鑽を深める機会となる。 ・国際教育を通じて、グローバルな視野、コミュニケーション能力を身につける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。	・国際教育を推進する過程を通して、他国教師らとの間に信頼関係を築き、人的ネットワークを広げていくとする。 ・国際感覚・国際コミュニケーション能力を身につける。	・教師のコミュニケーション能力を向上させ、新しい知識や技能を身に付けるきっかけとする。
・アジア諸国の視覚障害教育発展に寄与。 ・アジア諸国の視覚障害者職業自立推進に寄与。	・聴覚障害教育における指導法や教材教具の有効活用を具体的に国外の教育現場に提供する。特にフランスやアジア諸国に発信する。	・知的障害児教育に関する指導法や教材教具の紹介。 ・海外からの研修生の受け入れおよび授業研究の協力。	・我が国の肢体不自由教育が培ってきた知見・技術等を他国の教育関係機関に向けて発信する。	・自閉症児教育に関わる海外の特別支援学校関係への成果発信。
・ダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業で高等部生徒2名がイギリスで研修、インクルーシブ教育で学ぶ視覚障害生徒やパラリンピック金メダリストとの交流、英国盲人協会訪問など ・トビタテ！留学JAPANのプログラムでタイ視覚障害者支援クリスチャン財団の盲学校で留学、交流とホームステイなど 高等部生徒1名	・フランス国立バリ聾学校とのスカイク交流 ・フランス国立バリ聾学校へ高等部普通科生徒9名と教員を派遣し、交流 ・高等部専攻科造形芸術科の臺北市立啟聰學校と國立臺南大學附屬啟聰學校との作品交流 ・韓国ソウル聾学校とのスカイク交流	・台湾国立屏東特別支援学校高等部の生徒8名と本校高等部の生徒23名が、ライフキャリア学習（作業学習）での授業交流 ・給食で海外の料理を体験：「オリパラ給食デー」の実施 ・中学部および小学部におけるALTの教員による英語の授業の実施	・台湾 国立南投特殊教育学校、国立和美実験学校へ訪問 生徒1名 ・韓国 広州セロム学校へ訪問 生徒1名 ・海外渡航した生徒代表による台湾・韓国国際交流報告会 ・台湾 国立和美実験学校とのネットワーク回線を用いた授業交流 ・韓国 広州セロム学校とのネットワーク回線を用いた授業交流 ・IOC Youth Summitへの参加 生徒2名 ・筑波大学外国人教員研修留学生7名（インド1名、モンゴル1名、ブラジル1名、ペルー1名、クロアチア1名、マラウィ1名、ナイジェリア1名）と高等部生徒との国際交流	・海外からの見学者との交流（タイ教育関係者見学（33名）、中国障害児インクルーシブ教育特別研修（23名）、日系協会日系日本語学校（7名、ブラジル、ベネズエラ、パラグアイ、アルゼンチン）、中国長沙市特殊教育学校教員研修（5名）、韓国国立特殊教育院（3名）、中国広東省第二師範学院教員研修（5名）、中国教育国際交流協会（25名）、フィンランド教育委員会（1名）、JICA 日系社会研修（15名、ブラジル、アルゼンチン）

		小学校	中学校	高校	駒場中・高校	坂戸高校
取組 (令和 元年度)	幼児児童 生徒			・海外派遣生徒を対象 としたネイティブ講師 による放課後研修、郊 外から講師を招聘して 韓国講演会、シンガポ ール講演会の実施		
取組 (令和 元年度)	教師国際 貢献含	・北欧授業交流（デン マーク、ポルトガル） に4名の職員が参加参 加 ・インドネシア教育大 学視察団による授業参 観（20名） ・タイコンケン大学 研究会参加（20名） ・ロシア、カザフスタ ン、ウズベキスタン授 業参観（10名） ・マレーシア視察団参 観（22名）	・北京中国国際交流協 会より参観 ・マレーシアサラワク 州より教育大臣視察	・日中交流ホームステ ィ 10名受け入れ ・シンガポール、ホア チョン校から生徒9名 +教員2名来校、交流 ・海外からの教育見学 の受け入れ。 ・各種国内会議（高校 生国際 ESD シンポジ ウム、全国高校生合同 フォーラム、クーベル タン嘉納ユースフォー ラム、模擬国連など） 参加 ・オーストラリア教員 研修と次年度国際合同 フィールドワーク実地 踏査、教員1名参加、 オーストラリア。	・筑波大学外国人教員 研修留学生訪問研修、 12名受け入れ・校内 案内 ・さくらサイエンス・ ハイスクールプログラ ム「大隅博士特別講 演」4月23日（火） インド他的高校生と引 率者、合計112名が 来校。 ・台中一中の本校訪問 の引率教員対応 ・台中一中訪問 2019年12月10日 （火）～15（日） （引率3名） ・国際学生科学フェア 2020（ISSF）、 2020年1月15- 20日 （引率教員1名） 釜山国際高校、本校訪 問1月16日 （高校生16名） 生徒受け入れ案内 ・釜山国際高校訪問 3月24日～28日 （引率3名）	・韓国ユネスコ国内委員 会招聘事業で教員1名、 韓国へ派遣 ・中国ユネスコ国内委員 会招聘事業で教員1名、 中国へ派遣 ・「国際フィールドワー ク」インドネシアにて実 施 ・留学生3名（タイ2 名、台湾1名）1年間受 け入れ ・「高校生国際シンポジ ウム・SGH校生徒成果 発表会」実施 ・ESD推進ネットワー ク全国フォーラム 2019で教員1名登壇 ・SEA-Teacher プログ ラムでアセアン大学生の 教育実習6名受け入れ
環境整備	現状	・多目的教室「未来の 教室」の設置。	・英語が話せる者が常 駐し、生徒が自由に活 用できるイングリッシ ュルームの設置。	・イングリッシュルー ムの設置 ・ウェブ会議のシステ ム。	・高度情報化事業に伴 い、スカイプなど利用 して海外派遣先の生徒 と校内残留生徒との交 流を検討中。	・スカイプ。 ・多目的交流棟の設置。
将来構想		・英語専科教員の増員 （小学1年生からの英 語教育導入のため）。 ・継続的な財政的基盤 を得て、渡航費・通訳 費の確保をする。	・ALTとのチーム ティーチングを中心 に、少人数での授業を 展開する。	・ウェブ会議のシステ ム。 ・実習生・留学生等の 受け入れのための宿泊 施設。 ・本校生徒の海外留 学、海外からの留学生 受け入れのための奨学 金制度。	・海外派遣で交流の確 立している相手校とテ レビ会議等で交流を定 期的に行う。	・校内Wifiの整備を行 い、日常的に海外の学校 と学びあえるようにす る。 ・アセアンを中心にアジ アの高校生向けの奨学 金制度を創設し、坂戸高 校で日本語学習を実施 し、筑波大学に入学で きるようにする。

視覚特別支援学校	聴覚特別支援学校	大塚特別支援学校	桐が丘特別支援学校	久里浜特別支援学校
	<ul style="list-style-type: none"> ・韓国国立ソウル聾学校中部生訪問に向けて教員5名派遣 ・アメリカオハイオ州立大学聴覚障害教育部門、オハイオ州立聾学校等の視察、研究交流会に教員3名派遣 	<ul style="list-style-type: none"> ・インドネシアの私立学校（チバガンディ特別支援学校）との教員間Web会議の実施、研究授業における動画鑑賞、意見交換、指導案（翻訳済み）の共有 	<ul style="list-style-type: none"> ・中国廈門市日本特別支援教育使節団（12名）の受け入れ ・香港 NAAC からの視察団（教育・福祉関係者 32名）の受け入れ ・香港教育大学からの視察団（7名）の受け入れ 	<ul style="list-style-type: none"> ・受け入れ研修：中国長沙市特殊教育学校教員研修5名、中国広東省第二師範学院教員の研修6名 ・多くの見学の受け入れ（タイ教育関係者見学、中国障害児インクルーシブ教育特別研修、日系協会日系日本語学校（ブラジル、ベネズエラ、パラグアイ、アルゼンチン）、韓国国立特殊教育院、中国教育国際交流協会、フィンランド教育委員会、JICA 日系社会研修（ブラジル、アルゼンチン）
・ウェブ会議システム。	・筑波大学内のウェブ会議システム。	・Web 会議の環境構築のために必要な機材（パソコン、Wifi、ポケット翻訳機、iPad）および現地通訳者の手配	・ウェブ会議システム。	・ウェブ会議のシステム。 ・図書館に海外絵本コーナーを設置。
<ul style="list-style-type: none"> ・留学生支援の充実。 ・国際交流協定校との継続的な取り組みタイの生徒が本校で学ぶ短期留学プログラム制度を作る。 ・国際交流協定校を増やしていき、視覚特別支援学校の国際拠点校として発信を続けていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学外へも公開できる「国際コミュニケーションルーム」の開設。 ・常設展と巡回展を行う。常設展には姉妹校のバリ聾学校・フランス関係の展示や児童生徒の調べ学習成果物・海外の絵本展示を行う。また巡回展として、11 附属巡回展のようなスタイルでの海外の衣食住、教育について紹介するスペースをつくりたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・継続的な授業研究における教員同士、生徒同士の海外交流。その為の、Web 会議における環境設定、予算等の確保 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ会議システムを活用した授業交流、情報交換を一層充実させる。 ・海外への教員派遣を拡充し、研究成果等の対外発信力を強化する。 ・北欧等の特別支援学校との交流を実現させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・海外からの講師招聘型研修会を定例化すると共に、内容を録画編集し、国内外に向けた研修データライブラリーを整備する。 ・テレビ会議等のシステムを利用して、定期的に授業研究会等を行う。

4. 各附属学校の国際教育活動

附属小学校

先進的教育技術交流・児童の国際交流をめざして

1. 本校の国際教育の特徴

筑波大学附属小学校（以下「本校」）は、国内の教育研究校としての使命、責任感をもって教育研究を進めている。その成果を生かして、海外教育技術支援、海外教育技術交流を行い、相互の教育技術の高まりをめざし、国際教育を推進している。

本年度も、グローバル化を研究の一つの核として、組織的に取り組んできた。まず、本校の研究を推進する研究企画部が中心となり、①海外校との授業交流、②児童の海外交流、③児童の国際理解環境の充実の3本を柱にして、各担当役割を組織し、研究を進めてきた。グローバル化の実現のためには、全校をあげての組織的、かつ長期的な継続を視野にした研究を進めることが必要だと感じ、幅広い教員の参加をめざしている。また、国際支援の観点でのJICA 事業協力、プログラミング的思考講習も行った。

- | | |
|----------------|--------------------------------|
| ① 海外校との授業交流 | 北欧授業交流 |
| ② 児童の海外交流 | ハワイ大学附属小学校交流 |
| ③ 児童の国際理解環境の充実 | 留学生との交流 低学年からの英語活動 韓国の先生方の訪日授業 |
| ④ 国際支援 | タイ国研修受け入れ |



2. 交流について

① 海外との授業交流

1 概要デンマーク・ポルトガル授業研究会

○実施期間：2019年10月6日～14日

○交流先：①コペンハーゲン HUMMELTOFTESKOLEN 校

②リスボン ESCOLA BASICA INTEGRADA DR JOAQUIM DE BARROS 校

○参加者：算数教員 山本・大野 理科教員 鷺見・辻（4名）

2 日程

10／6 東京発・コペンハーゲン着

10／7 コペンハーゲン HUMMELTOFTESKOLEN 校

辻健教諭による理科授業・協議会 山本・鷺見・辻・大野教諭によるワークショップ
現地校教諭による算数授業・協議会

10／8 コペンハーゲン HUMMELTOFTESKOLEN 校

大野桂教諭による算数授業・協議会 山本・鷺見・辻・大野教諭によるワークショップ
日本・デンマークの教育授業に関する質疑交流会

10／9 コペンハーゲン ヒースロー経由ポルトガルリスボン移動

10／10 リスボン

ESCOLA BASICA INTEGRADA DR JOAQUIM DE BARROS 校

山本良和教諭による算数授業・協議会 鷺見・辻・大野教諭によるワークショップ

10／14 日本到着

3 コペンハーゲン

辻教諭による理科授業：5年生単元「電気と磁力」における導入授業を行う。銅線と鉄線を見分ける活動から、銅線の性質に迫る。そして、磁石に引き付けられない銅線も電気を流すことで磁力がうまれる不思議さを感じる授業になる。



協議会では、現地の先生方からも活発な意見がでて、授業展開についての協議が活発に行われた。デンマークの先生方も授業協議に慣れてきていて、お互いを高め合う協議内容になってきている。

次に、山本・鷺見・辻・大野教諭と現大学教授によるワークショップを開いた。正方形を作ることから立体模型ができるおもしろさや昆虫の体のつくりの不思議さに触れて、現地の先生方も楽しみながら教材研



究を深めることができたようである。

2日目は、大野桂教諭による算数授業が行われた。5年生単元「差と倍の比べ方」の授業である。筈の成長を比べることで、差でみる見方と倍で見る見方があることに気づく授業になった。



4 リスボン

コペンハーゲンの交流授業は4回目になるが、ポルトガルでの開催は初めてになる。山本教諭による算数5年単元「偶数と奇数」の授業が行われた。1部の数字を隠して当てるゲームを通して、数字の規則性に気づき、偶数と奇数の性質を学ぶことができる授業であった。

参加された先生方は、協議会の重要性を認識していないようだったので、授業の改善案を出し合って議論する重要性に気づいてもらえるように話し合いを進めた。



5 今後に向けて

3年間協定の2年目になる本年度は、算数2名、理科2名の合計4名での参加になり、一人で授業、協議会、ワークショップと多くの場をこなす毎日になった。デンマークのとりまとめをしてくれるヤコブ氏、あさみ教授も理数以外の教科での可能性を探りたいと言ってくれている。

② 児童の海外交流

1 概要

- 実施期間：2019年8月24日～30日（5泊7日）
- 交流先：①ハワイ大学附属小学校 ②ハワイ大学附属高校 ③ワイキキ小学校
- 自主活動：④ホノルル動物園
- 参加者：19名（保護者同伴） 引率教員：5名

2 日程

月 日	旅 程
8月24日（土）	東京－ハワイ ハワイアン航空 ハワイ着 プリーフィング
8月25日（日）	現地校との打ち合わせ、実地踏査
8月26日（月）	ハワイ大学附属小学校との交流
8月27日（火）	ハワイ大学附属高校との交流 ワイキキ動物園での活動
8月28日（水）	ワイキキ小学校との交流
8月29日（木）	ハワイ－東京 ハワイアン航空
8月30日（金）	東京着

3. 交流の様子

① ハワイ大学附属小学校（4～6年生）との交流【8月26日】



・4～5年生の体育授業に参加。バスケットボールの授業。指導はハワイ大学附属小学校の教師。慣れない英語の授業に当初は戸惑っているようだったが、体の動きを見て言葉と併せて理解が進み、楽しそうに活動していた。また先方の子どもとほぼ同数だったため、日米児童でペアをつくり活動する場面もあった。最後は、握手をしたり英語で挨拶するなど微笑ましい光景が見られた。

・こちらから用意していった日本の文化や遊びを紹介するワークショップを行った。6年生54名を相手にして行った。用意していったワークショップは4つ。「福笑い」「折り紙」「スイカ割り」「『あっちむいてほい』などのじゃんけんゲーム」である。相手方をも4つのグループに分けて、すべての子が4つのワークショップに参加できるよう15分でローテーションを回した。つまり日本の子どもは4回同じワークを繰り返すことになる。その中で英語に対する慣れとともに、コミュニケーションも円滑になっていった。また「こういう場合は英語でなんて言ったらいいの？」などと新しい問題場面に遭遇し、まさに英語の研修の場となっていた。



- ・こちらから用意していった「縄跳びの技」や「ソーラン節の踊り」を披露した。縄跳びの技は日本の小学生のなかでも本校はトップクラスの腕前である。現地の小学生は驚いた様子であった。たくさんの拍手をいただいた。



- ・昼休みが15分ほどあったが、自然に日米児童が入り交じっての遊びの場となった。言葉が多少通じなくても、サッカーをしたり、長縄跳びをしたり、ラグビーのキャッチボールをしたりするなど、笑顔が絶えなかった。「友達ができた!」と喜ぶ姿、別れ際にはハグをする場面も見られた。

② ハワイ大学附属高校（日本語クラスなど）との交流【8月27日】

- ・日本語のクラスを取っている高校生20名ほどと、前日に行ったワークショップを行った。相手が高校生とすることがあり、付度しながら参加してくれているようだった。日本人小学生の意図を汲んでくれて動いてくれていた。それでもさらに慣れてきて英語でのコミュニケーションに自信をもつ姿が見られた。



- ・フラダンスの授業に現地高校生に混じって参加した。講師はフラダンスのプロと見受けられる。生の演奏で、本格的なフラの体験、高校生に教えてもらいながら楽しむことができた。

③ ワイキキ小学校（4～5年生）との交流【8月28日】

- ・現地公立小学校である。かなりの研究校で「P4C」と呼ばれる哲学の授業に力を入れており、全米ブルーリボン賞なる名誉ある賞も受賞している。4～5年生100名を対象に、ハワイ大学でも行ったワークショップを実施。ただ、100名を相手にするのに2時間を要した。これは過度な活動量となってしまったように感じる。子どもたちの疲れが見て取れた。

- ・「縄跳び」「ソーラン節」の披露も行った。これも大喝采を浴びた。休み時間などは、縄跳びまねをして遊ぶ現地の子どもの姿があった。

- ・4時間目には、4年生と5年生の教室に、本校児童が分散して、算数の授業や哲学の授業に参加した。英語の授業ではあったが、多分な配慮をいただきわかりやすい活動をしていただいた。

- ・給食も日米児童が混じり合っていた。そこでも英語でコミュニケーションを図ろうとする姿が見て取れた。



④ ホノルル動物園での活動【8月27日】



- ・午後の2時間を使って、動物園内のグループオリエンテーリングを行った。米国は子どもたちだけの屋外活動は禁止されているので、引率教員や保護者の協力を仰いでグループに付き添った。オリエンテーリングでは、絶滅危惧種の動物を英語の表示を見ながら探し、写真を撮ってくる、グループ全員の記念写真を外国人に撮ってもらえるよう英語で依頼するなどのミッションを与えた。動物説明ボランティアの説明を熱心に聞いたり、その人に写真を撮ってもらったりしていた。

4. 全体を通して、来年に向けて

ハワイでの交流は2回目であった。日本との時差が19時間。裏を返せば5時間ということになる。従前に行っていたサンフランシスコより時差による疲れが少なかったようだ。

交流に関しては小学校2つ、高校1つとの交流だった。用意していたワークショップを3回実施することで、次第に英語を使つてのコミュニケーションに慣れが生じ、自信をもてるようになっていった。効果的であった。またそのなかで新たな問題場面に遭遇したため、教師に「どう言ったらいいのかな？」と質問してきた。このように、子ども自らが問題意識をもって英語の知識を獲得しようとするのは非常に効果的であった。

次年度からの交流では、意図的に児童が問題意識をもてるようなワークショップを展開できないか模索する必要も感じたところである。

ワイキキ小学校では、来年以降来日してホームステイを含む交流を希望しているので、受け入れ体制の検討に入ろうとしている。

日常の活動の延長線上にある国際教育

1. 本校の国際教育の特徴

本校における国際教育は、国際化した社会において、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成するために、自己を確立し、他者を受容し共生しながら、発信し行動できる力を育成することを目標としている。

具体的な活動としては、生徒全員に門戸を開いているイングリッシュルームの活用、さらに海外における経験を積み重ねたい生徒のための短期留学、また、海外からの訪問校との交流を生徒自ら企画運営することである。

2. 短期留学

(1) アメリカ短期留学

春休み期間中にアメリカ ペンシルベニア州 Pottstown への短期留学が行われた。毎年多くの希望者がいる中、選抜された2・3年生計36名（3年男子5、女子10、2年男子11、女子10）が参加した。今年度より短期留学先が West-Mont Christian Academy に変わったが、アンバサダーとともに授業に参加したり、ホームステイをするといったこれまでと変わらない活動を行うことができた。教員の引率は、全日程を2名が引率した。

① 事前研修

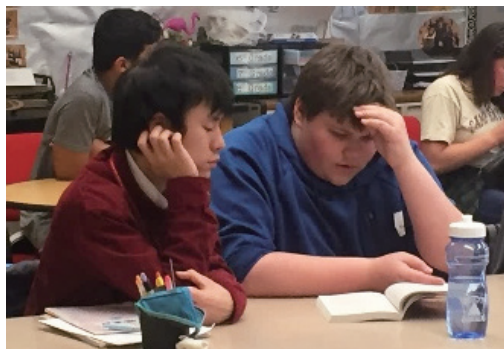
本校の短期留学では、現地に行つての活動だけが目的とならないよう事前研修にも力を入れている。今回は以下の日程で事前演習を行った。

第1回	・コミュニケーション活動 ・留学の心構え、トラブル事例	・フェアウェル出し物方針決め ・冬休みの課題レポートについて
第2回	・コミュニケーション活動	・課題レポートの内容についての発表活動、感想の共有
第3回	・昨年参加者からのアドバイス ・キリスト教について ・フェアウェルでの出し物練習	・コミュニケーション活動 ・バーンズコレクションについて ・日本文化交流のグループ分け
第4回	・日本文化交流会について	・アメリカ建国の歴史について ・フェアウェル出し物練習
第5回	・参加者及び保護者に対する最終オリエンテーション ・集合場所、持ち物、服装などの注意、事後研修と課題について ・フェアウェル出し物練習	



② 実施内容

- 3月20日（水） 14：45（日本時間）集合 17：55 成田出発
16：45 ニューワーク空港到着 バスでペンシルバニアへ
23：00 各家庭へ
- 3月21日（木） チャペル集合。校内ツアー、体育館にてアンバサダーとマッチング
チャペルに戻り、挨拶スピーチ
マッチングされた各アンバサダーと授業へ
日本文化交流（折り紙を紹介）
- 3月22日（金） アンバサダーと授業に出席
日本文化交流（書道を紹介）
- 3月23日（土）～24日（日） ファミリーと過ごす
- 3月25日（月） アンバサダーと授業に出席
日本文化交流（日本の遊びを紹介）
体育館で全校生徒とバレーボール
- 3月26日（火） アンバサダーと授業に出席
体育館でお別れ集会（出し物披露）
ここまでの経験のシェアリング
体育館でピザパーティ
フェアウェルプログラム
- 3月27日（水） フィラデルフィア観光
自由の鐘・独立記念館→ショッピングセンターで昼食→バーンズコレクション（美術館）→バスでニューワーク空港近くのホテルへ
夕食後シェアリング、アンケート記入、留学の感想ホストファミリーへ葉書
- 3月28日（木） 7：00 集合 11：55 ニューワーク空港出発
- 3月29日（金） 14：15 成田到着 15：00 過ぎ解散



【学校生活】

学校では、生徒1人1人にアンバサダーと呼ばれるお世話係の生徒が終日付き添い、アンバサダーの出る授業に本校生徒が参加させてもらった。生徒たちの多くは積極的にアンバサダーとコミュニケーションをとり、仲良くなっていた。先生方が積極的に日本人生徒を授業に巻き込んでくれていたこともあり、質問に答えたり、アメリカ人生徒と一緒に課題に取り組んだり、さらには先生に質問したりする生徒もみられた。



【日本文化交流の実施】

1日目～3日目の8時限目（3日目は7時限目）に日本文化交流の時間が特別に設けられ、折り紙、書道、日本の遊びを紹介した。授業だとどうしても受け身になってしまうが、この日本文化交流の時間は、日本人生徒が主体となることができた。アメリカ人学生や先生方も非常に喜んでくださり、今後も続けていきたいとのことであった。

【ホームステイ】

各々がホストファミリーとも忘れがたい特別な時間を過ごせたようだ。ホストファミリー宅でも、それぞれの家庭でさまざまな経験をさせていただき、大変だったことも含め、全てがよい経験となったようである。生徒側からもホストファミリー側からも不満はなく、問題なくホームステイが行われた。言語や文化の違いを越えた人の温かさに触れ、多くの生徒とファミリーが別れ際に涙する姿が印象的だった。



③ 事後学習など

4月1日（月） 事後まとめの会 各自が体験したこと、学んだことを共有する。レポートを提出する。

9月 次年度のアメリカ短期留学説明会にて、体験者として説明をする。

10月 学芸発表会にて、アメリカ留学の様子を学内外の参観者に紹介する。

（2）シンガポール短期交換留学

春休み期間中に、シンガポール Hwa Chong Institution への短期交換留学が行われた。このプログラムは附属高校と共同で行われており、附属中学からは男子生徒1名、附属高校からは生徒8名（男子3、女子5）の計9名が参加した。



① 事前研修

2月21日（木）附属高校で行われた SGH 講演会 “Towards an Intercultural Society” に参加

2月23日（土）留学説明会

② 実施内容

3月24日（日） 8：50（日本時間）羽田空港集合 17：10（現地時間）Changi 空港到着
ホストファミリーが空港まで迎えに来ており、各家庭へ。

3月25日（月） 学校が創立記念日のため、ホストファミリーと過ごす。

3月26日（火） 全校集会で紹介され、代表生徒がスピーチ。その後、学校案内。

3月27日（水） バディと授業に出席。

4校交流会：HCI、本校、関西大学高等部、台湾第一中学
シンガポール国立大学見学

3月28日（木） バディと授業に出席。シンガポールディスカバリーセンター見学

3月29日（金） バディと授業に出席。陸上インターハイ観戦。

3月30日（土） バディたちとセントーサ島へ観光。お別れパーティー。

3月31日（日） バディたちとユニバーサルスタジオへ観光。

4月1日（月） 1：50（現地時間）Changi 空港発 9：15（日本時間）羽田空港着

③ 生徒の様子

シンガポールの空港に降り立つとホストファミリーの方々が迎えに来てくれていた。初めてバディと顔を合わせた生徒たちは、慣れない英語でも一生懸命に会話をする姿が見られた。始めは附属生もホアチョン校の生徒も表情が少し硬かったが、すぐに和らぎ、ホストファミリーのもとに向かっていた。

翌日以降は、ホスト生徒と共に授業を受け、英語で行われる授業に参加したり、食堂で初めて見る食べ物を楽しんだりしており、生徒はシンガポールでの生活を満喫していた。プログラムには、NUS（シンガポール国立大学）訪問、Discovery Center、Army Museum 見学、National Garden 見学も含まれ、貸し切りバスでの案内や引率もしていただいた。さらに、同時期に短期留学していた関西大学高等部の皆さんと三校合同の学校紹介プレゼンテーションを行うなど、様々な活動を行った。生徒達は慣れない環境とシングリッシュ（シンガポール独特の英語）に苦戦しながらも、意欲的に学ぶ HWACHONG 校の生徒の姿勢に刺激を受け、多民族国家のシンガポールを様々な角度から体感する機会に恵まれた。

（４）本活動による生徒の変容（アメリカ短期留學生徒の感想より）

- ・自分は世界がこんなにも広く、日本という国がどれほど狭いかをすごく感じました。アメリカ留学最高！と言いたいです。本当に見るもの全てが新しく、今までにない刺激をいっぱいもらいました。自分が学んだことをいろいろな人にフィードバックし、ここで得た力や経験を日常生活に活かして生活したいと思います。
- ・今自分は、このアメリカ短期留学に参加して良かったと思っています。最初、僕は英語に対する苦手意識があり、また人と会話するということもあまり得意ではないので、参加したいという気はありませんでした。親にすすめられて参加するということになりましたが、出国の前日までホストファミリーとちゃんと話せるだろうか？困ったことがあったらどうしよう？と不安な気持ちでいっぱいでした。ところが、その不安は１日目で消えました。僕は英単語や文法があまりできないような状態で来たが、全く困ることなく過ごすことができた。もしも、今後アメリカ留学に興味があり、僕のように英語に自信がない人がいたら恐れずにぜひアメリカ留学に参加してほしいと思う。
- ・私はアメリカ留学に行くまで、ずっとアメリカ留学には前向きではなく、どちらかと言うと行きたくなかった。そもそも英語ができないので、アメリカでの生活が不安でしかたなかったのだ。しかし、その不安は全く必要のないものだった。ファミリーやバディを含め現地の人は皆優しく親切で、会話のときにできるだけ優しい単語を選んで話してくれて、とてもありがたかった。その優しさに助けられ、何とか会話ができるようになった。徐々に文で話せるようになり、自分から会話が広げられるようになった。私はそのことがとても嬉しく、また、一番成長できた部分だと思っている。はじめは自分の英語力や慣れない環境に不安だったが、今回の留学でとても自信をつけることができた。挑戦してみて、本当に良かったと思う。



3. 海外からの学校訪問受け入れと交流

(1) 生徒を伴う学校訪問

今年度は、7月12日に中国の深圳中学、龍崗初級中学の学校訪問があり、生徒41名（中学生19名、小学生22名）、引率教員3名が来校し、授業見学や生徒同士の交流会を開催した。

【生徒同士の交流会の様子】

事前に訪問日時や人数等が分かった時点で、生徒会団体である交流会準備小委員会の生徒に生徒同士の交流会を企画、運営を打診した。場所や人数のバランスの関係から、交流会に参加する生徒は募集によって決定した。

今年度来校した深圳中学、龍崗初級中学の児童生徒は小学校高学年～中学1年であったため、お互いに語学力が未熟な中で交流であった。しかし、そのような中で、一緒に楽しむにはどうしたらよいかを中学生なりに考え、企画をした。始めのあいさつは、中国語ができる生徒にお願いし、普段は見られない同級生の姿にも触れる機会となった。

交流会の内容は、椅子取りゲームやジェンガ（フォークダンス）で、最初に見本を見せて言葉に頼らない説明を行い、上手に進めることができた。会が進むと、中国の生徒からも積極的に発表をしたいと手が上がり、ダンスや歌の発表をしあったりして、お互いに楽しい時間を過ごすことができた。交流会の中ではジェスチャーや簡単な英単語を手掛かりとして、みるみるうちにコミュニケーションを深めていく姿が見られた。語学も未熟な中学生だからこそ、言葉だけに頼らない相手のことを考えた国際交流ができることを垣間見られた。



(2) 教員視察としての学校訪問

2019年度は、次の国から学校視察を受け入れた。

- ・北京中国国際交流協会
- ・マレーシアサラワク州教育大臣視察

学校視察の際には、生徒にも案内をするため、学級によっては黒板に訪問国の言葉であいさつが書かれていたり、いつ、どの国の方がいつ訪問しても受け入れる気持ちができている。



グローバル人材の育成を目指して

1. 本校の国際教育の特徴

昨年度でスーパーグローバルハイスクール（SGH）の事業が終了した。今年度はSGH 指定期間から行ってきた取り組みを失うことなく、その成果を引き継ぎ発展させていった。引き続き、専門性と教養、問題解決能力、コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力、主体性と協調性、異文化理解の柔軟性と日本人としてのアイデンティティを備える「グローバル・シチズン」の育成と、それらに加えて高い語学力、議論する力、地球規模の視点を有する「グローバル・リーダー」の育成を目指している。

しかしながら、SGH 事業が終了したことで、特に財政面には影響が出ている。引率教員数を減らしたり、生徒の自己負担金を増額したりしてしのいでいる。国際交流事業への参加を志願する生徒は昨年度より増えており、今年度については国際交流のペースが落ちることはなかったものの、財源の確保は今後の重要な課題である。

2. 活動報告

（1）第13回アジア太平洋青少年リーダーズサミット（APYLS）

7月20日から28日まで、シンガポールのHWA CHONG INSTITUTION（HCI）で第13回アジア太平洋青少年リーダーズサミット（APYLS）が開催された。本校からは2年生の広佐子華帆、安田百花、山本聖花の3名が参加した。

14カ国27校から集まった73名の高校生はHCIの寄宿学校で共同生活を行う。テーマごとのグループに分かれ、政府機関や研究機関などを訪問し、討議を重ねて意見をまとめ発表することが主たる活動である。また大統領府の訪問や各国の文化紹介などの恒例行事に加え、今年は主催校が創立100周年ということで、政府高官が来校して参加者と交流の機会を持つなど、例年以上に内容の濃いサミットであった。次世代を担う高校生は互いに大きな刺激を受け、よき仲間としてこれからのグローバル社会を築き上げていこう。



(2) 第10回国際学術シンポジウム (HAS)

7月22日から26日までの5日間、韓国ソウルの中高で第10回国際学術シンポジウムが開催された。本校からは2年生の小笠原崇文、テブス恵、森薫子が参加した。

このシンポジウムは毎年ハナ高校が主催しているもので、ハナ高校の学生約200人とアジア数カ国（日本、中国、香港、タイ）そして今年度からブルガリアからの高校生が加わって、計91人が参加した。

プログラムのメインイベントは3人1チームで行うプレゼンテーションである。参加者は、今年度の共通テーマ（“The Ethical Use of Artificial Intelligence”）に関する研究論文を提出し、その内容を英語で発表する。プレゼンテーション後は、パネリストや聴衆からの質問にもすべて英語で答え、議論を深めていった。

本校チームは、“Is it ethical to apply AI Scoring system into education and employment field?”というタイトルで、AIスコアリングがもたらす危険性を整理したうえで解決策を提示するプレゼンテーションを行いました。

プレゼンテーションのほかにも、ミニ・オリンピックやソウル探検、各国の文化的パフォーマンス等のイベントを通じて、参加した他国の高校生と親睦を深めた。また、5日間のうち4日間はハナ高校の学生寮に滞在し、最後の1日はハナ高校生の自宅にホームステイをした。英語での国際交流に加え、韓国の文化に実際に触れる、という貴重な経験をすることができ、多くの刺激を受けた5日間であった。



(3) UPEI 研修 (プリンスエドワード島大学英語研修)

カナダ東部のプリンスエドワード島大学で、Summer English Program 研修が行われた。期間は8月10日（土）から25日（日）までの約2週間であり、このプログラムには本校1年生15名と2年生1名が参加した。



すべての参加生徒がホームステイをしながら、午前中は大学の講義や講演、各自の研究のプレゼンテーションの準備を行った。午前中の授業では、2グループに分かれ、2人の英語の先生から「プリンスエドワード島の海岸浸食」と「カナダ及びプリンスエドワード島への移民」について、8名ずつの少人数形式の講義で詳しく学んだ。午後は、午前中の授業に関係しているアクティビティーが行われ、「赤毛のアン」のミュージカルや「赤毛のアン」の家であるグリーンゲイブルズ見学にも参加した。

授業最終日の個人研究プレゼンテーションでは、渡航前から準備していたカナダ（またはプリンスエドワード島）に関する研究発表が行われ、主に日本とカナダ（またはプリンスエドワード島）との比較研究の内容を中心とした発表を行った。



（４）日本中国ティーンエイジアンバサダー

中国北京市の景山高校との相互交流を行なった。イオンワンパーセントクラブ主催の小大使活動として、経済的援助を受けて行われ、今回で11回目となる。7月に中国から日本へ、10月に日本から中国へという相互交流である。7月12日（金）～14日（日）に、景山高校の生徒たちが来日、10月14日（月）から21日（月）まで本校生徒9名（男子4名、女子5名）が中国北京市を訪問した。その際、表敬活動、交流活動、環境視察活動を行った。

【来日プログラム】

中国北京市の景山学校の男子5人、女子5人の生徒が7月12日（金）～14日（日）にかけて本校を訪れ、ホスト役の生徒宅にホームステイし、本校の通常授業に参加した。

12日昼休みの歓迎会では、本校生徒会長と景山学校の代表生徒がスピーチ交換をした。また、午後は本校卒業生の案内で東京大学本郷キャンパスを見学し、その後、部活動体験、和菓子作り体験などを、ホスト役の生徒とともに楽しんだ。日本の高校生の日常生活は、景山学校の生徒たちにとって、驚きに満ちたものだったようだ。本校生徒たちにとっても、日本を見つめなおすよい機会となった。



【訪中プログラム】

2019 年は、河野前外務大臣と王毅外相が結んだ日中青少年交流推進年の初年度にあたる。表敬活動では、北京市人民政府と中華人民共和国外交部（日本の外務省に相当）を訪問し、日中両国の青少年の活発な交流を通じて、新しい時代の日中関係が切り開かれることを期待するとの言葉をいただいた。日本大使館では、日中両国の高校生が堤公使との質問会に参加し、互いの国への理解を深めた。その後の歓迎会では、横井大使をはじめ来賓の方々から日中友好に向けての励ましの言葉をいただいた。

日中の高校生によるパフォーマンスでは、横井大使が本校生徒とともに「里の秋」の合唱に参加してくださり、生徒にとって忘れがたい思い出となったようだ。「里の秋」は中国語の歌詞にもチャレンジし、交流相手である北京市景山学校の生徒も一緒に歌ってくれた。



交流活動では、景山学校での通常授業に参加するなど、生徒同士の交流を行いました。中国の学校生活は何もかもが新鮮な経験で、生徒たちはペアの生徒と楽しい時間をすごしたようだ。ホームステイでは、家族と一緒に料理をしたり、生徒同士で北京の街を歩いたり、とても温かい歓迎を受けた。

環境視察活動では、北京の下水処理場や都市計画博物館を見学し、経済発展と環境をどのように調和させているのかについて学んだ。そのほか故宫博物院や万里の長城を訪れるなど、たくさんの貴重な体験をした8日間であった。



（５）シンガポールの HWA CHONG 校との交換留学

6月3日（月）から6月9日（日）まで、シンガポールの HWA CHONG 高校の生徒と教員が来校し、ホームステイをしながら授業に参加した。これは、交換留学プログラムの一部で、3月には本校生徒がシンガポールを訪問するが、報告書執筆時点では未完了なので、来日部分を中心に報告する。本年度は、HWA CHONG 校の 100 周年記念行事のため、来日が例年よりも早い時期となった。

6月3日の昼休みに全校で歓迎会を行い、3日から8日まで本校での授業に参加した。6月6日には筑波大学の体育芸術学群から第三エリアまでを見学し、大学の学内食堂で昼食をとった後、午後からはジャガイモ掘りの農業体験を行った。シンガポールでは、水や食料はほぼ100%が輸入されたものなので、あまり土を触ったことのないHWA CHONG校の生徒は、収穫の楽しさや、他の野菜、果物が実っている様子を見て大変喜んでいった。

6月9日（日）の夕方、ホテルメトロポリタンのロビーから高速バスに乗り、ホームステイを受け入れた本校の生徒全員とその保護者に見送られてシンガポールに帰国した。

今年度のシンガポール訪問は、3月23～28日の予定である。本校1年生7名と、附属中学校3年生の2名が参加する。また、そのための事前学習として、3月12日に昭和女子大学からシム・キャット氏を迎えて講演会を開催する予定である。



筑波大学見学
(第二エリア前)

農業体験
(つくば市)



両校生徒の集合写真
(帰国前)

(6) 第12回国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム

8月24日～31日、フランスのマコン市でユースフォーラムが開催された。近代オリンピックの創始者クーベルタンの思想－オリンピズム－を教育理念に掲げる「クーベルタン・スクール」が2年に一度集まる国際フォーラムである。日本ピエール・ド・クーベルタン委員会（CJPC）が派遣する6名の日本代表に、本校からは2年生の祓川典子と高橋りくが選出された。

5大陸23ヵ国から集まった約120名の高校生は、スポーツやアート活動、オリンピズムについての討議や知識テストなどの課題に取り組み「クーベルタン賞」を目指す。日本代表6名全員がクーベルタン賞を獲得した。各国の文化紹介での日本のブースは大盛況で、マコン市民の前で披露したソーラン節のパフォーマンスも好評であった。さまざまな国の人たちとの共同生活も、異文化理解に役立つ。



来年度、2020 年は東京でオリンピック・パラリンピックが開催される。今回の学びや絆を、2020 年とその先につなげていってもらいたい。次回は 2021 年にキプロスで開催される。

(7) 韓国に関する講演会

5 月 9 日（木）、筑波大学大学生 Hyun Sanghyug 氏による講演会が行われた。『韓国について（韓国の文化や生活習慣、学校生活など）』という演題で、韓国の生活・文化・歴史、日本との関わりについて講演をいただいた。参加者は今年の 7 月にアジア太平洋ヤングリーダーズサミット（シンガポール）、国際学術シンポジウム（韓国）への派遣が決定している代表生徒と今年度日中高校生交流に参加する生徒が中心であったが、韓国の文化や、国際交流に興味のある生徒も自主的に数名参加した。

講演・質疑応答とも英語で行われた。



2019 年度国際交流プログラムにおける生徒の海外・相互交流での活躍

1. 本校の国際教育の特徴

本校における国際交流プログラムの目標は、中高6年間を通じて「トップリーダー形成の一助として、国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材の育成を図る」ことである。

この目標の下、本校の国際教育の特徴を上げるとすれば、以下のとおりである：本校はスーパー・サイエンス・スクール（SSH）に指定されて第4期18年目であるが、このSSH事業の支援を受けた国際交流活動が本校の中心になる。その中で最大のものは、2009年より続いている、姉妹校の台中第一高級中学（以下、台中一中；なお、日本の高校に相当する）との研究交流である。SSHプログラムなので、理数系がテーマの研究文化交流という色合いが強いが、文系の内容でもしっかりしたものであれば排除するわけではない。とはいえ、全体としては理数系テーマの生徒が発表の中心になるため、文系生徒がより参加しやすい国際交流事業として、筑波大学からの予算補助を得て2013年に開始した釜山国際高校との文化交流プログラムもあり、この台中・釜山との派遣交流が本校の国際交流活動の2つの柱となっている（両校とはこちらからの派遣ばかりでなく、本校への訪問の受け入れも行っており、相互交流ということができる）。そこに、他のSSH校との連携で行っている国際交流プログラムが加わる。2013年にはイングリッシュ・ルーム事業もスタートさせ、英語による学術発表の基礎となる英語でのコミュニケーションの機会を全生徒に提供するだけでなく、実際に海外などで発表をする生徒のプレゼンテーション事前準備にも大いに役立っている。



さくらサイエンス・ハイスクールプログラム～ノーベル賞受賞 大隅良典博士の特別講演（2019. 4. 23）

2. 令和元年度活動報告

本校の国際交流プログラムは前述のように、本校単独で企画・実施する、台中一中及び釜山国際高校との交流事業と、他の SSH 校の企画に、本校の生徒・引率教員が参加する 2 つの形態に分かれる。以下に、まず本校の企画を述べ、その後他の SSH 校との企画について述べる。

(1) 台中第一高級中学（台中一中）

本校の SSH 関連国際交流事業として 2009 年に始まり、今年度で 11 年目となる。当初は本校から先方への訪問のみであったが、2013 年に台中一中の日本訪問旅行に合わせた本校訪問が実現し、本校では国際交流デーとして 1 日の特別スケジュールを組んで迎えた。以降隔年で本校訪問があり、今年度は第 4 回目が行われた。

① 台中一中の本校訪問 2019 年 5 月 28 日（火）

5 月 28 日（火）、台中一中生徒 60 名、引率教員 4 名が来校、一昨年同様、午前中歓迎セレモニー、授業参加、午後は校内散策、研究発表会、部活参加などで交流した。

高 1、高 2 生徒の 130 名近くが午前・午後のバディを分担し、校内の案内、授業での通訳などを務めた。

漢文の授業では、江戸時代に漢詩に中国語の音訳をつけたものを生徒が読み上げると、かなり相手に通じたとのことで、それ自体に驚くとともに、自分たちが学んでいる漢詩が、現代の台湾人にも暗唱されるほど有名なものであることを実感する良い機会だったと感想を述べていた。

また、放課後の将棋部では、基本的な駒のルールを説明しただけで、対局できる台中生もあり、その適応力に驚いていた。

本校からも 12 月中旬に台中一中訪問が控えており、その良い動機付けにもなった。



台中市立台中第一高級中学の本校訪問における交流（国際交流デー：2019. 5. 28）

② 台中一中訪問 2019年12月10日(火)～15(日)

12/10(火) 台中市着

12/11(水) 午前中、国立自然科学博物館見学、午後、鹿港(ルーカン)訪問

12/12(木) 台中一中第1日、学校紹介、授業参加(英語・化学)、天文台見学

12/13(金) 台中一中第2日、研究交流(本校から8本、アブストラクト参照)

12/14(土) 台北移動、文化施設訪問

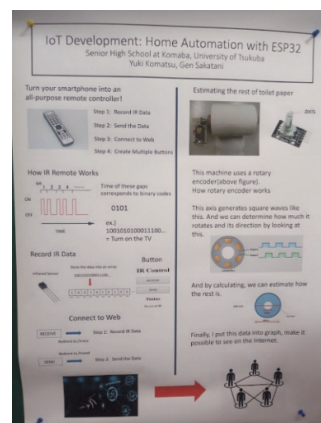
12/15(日) 帰国

本年度は交流11年目。PPTによる口頭発表以外に、高2だけでなく、高1もポスターセッションも設けた点が新機軸であった(高1はこれまで学校紹介のみ)。

2名の参加生徒の感想をあげる：

1 自分はS君と共同でIoT Development: Home Automation with ESP32と称して機械・エンジニアリング系の研究発表をした。課題研究の物理でやっている内容でありESP32というマイコンを使ってなにか身の回りの物を自動化したり制御したりしようというものである。自分は赤外線センサ/LEDを使ってスマートフォンにリモコンの役割をさせるということをした。スライドが普段の自分のスタイルと違いミニマリストティックなもので新鮮だった。オープニングスピーチのこともあって発表の練習には多くの時間を割いた。その甲斐あってかところどころ小さなミスはしたものの全体的には成功し、質問も2つ出て割と好評だった。(日本勢、台湾勢合わせて質問が来たのは自分と米田君の発表の2つだけ)そのうちの1人はその人自身もマイコンを使って似たようなことをやっている人だったらしく発表後に個人的に聞きに来てくれてこの部分が上手くいった・いかなかったといった細かい話もすることができた。ただ、分かりやすさを追求するために複雑な部分は全部削ってシンプルにしたために少し内容が薄くなってしまったとも感じており、その2つを両立できるようになりたいと思った。またポスターセッションの時間では、興味を持ってくれた人たちと話し発表では言えない裏話などもすることができた。自分達の発表が午後であり事前にここで発表内容について雑談形式で話せたことはプレッシャーの軽減につながり非常に助かった。

(高2 K君)



使用した発表ポスター

2 学校紹介は高校一年生6人で行った。綿密な計画を立て、実際それ通りに進めることはできていたのだが、内容が学校に関する事実の羅列になってしまっており、引率教員の方々から一貫性がなく、そのために時間内に収まっていないのではないかと指摘を受けた。最終的に、前日の夜に大幅に手直しをし、また先輩の方々にお付き合いいただきと夜遅くまで準備をする羽目になってしまった。今後は、発表よりかなり前の段階で、教員や先輩の方々から一人でも多く聞いてもらい、アドバイスをうけておくべきだと感じた。最終的に自分は音楽祭について話した。壇上に上がった時、多くの視線を感じたが、同時に台中一中生はしっかり聞いてくれているのだと思い、安心して話すことができた。

ポスター発表では、「二項係数の総和」というテーマで発表をした。はじめは幅広い関数について研究し、意味づけまで行う予定だったが、学校行事で忙しくなることなどをあまり考慮に入れず、ガバガバなスケジュールを立てたために、中途半端な状態での発表になってしまった。研究すればまだ進展はあると思うので、機会があればいろいろと試してみたいと思う。また、研究内容・ポスターなどについて、町田先生からアドバイスをいただいた。ありがとうございました。

(高1 K君)



発表会場の様子

(2) 韓国・釜山国際高校

本校の国際交流事業のもう一つの柱であり、主に文系向けのプログラムとして、筑波大学からの教育長裁量経費による支援を受け、2013年より続いている。基本的に、釜山国際高校から本校訪問が1月に行われ、3月末に、本校生徒が釜山国際高校を訪問する、という相互交流を行っている。今年度も1月中旬に釜山国際高生が本校を訪れ、有意義な交流を行った。詳細を以下に述べる。

① 釜山国際高校からの本校訪問 2020年1月16日(木)

釜山国際高校より生徒・高校生12名(男子6、女子6)、中学生(女子4)、引率2名(数学・日本語)が本校訪問をした。午前中は、50周年会館にて、釜山国際高生と釜山派遣予定生徒・昨年度釜山派遣生徒との歓迎交流会を行った。アトラクション(本校は歌及び書道など・釜山国際はダンス披露)。その後、駒場東大の学食にて昼食、お互いの歓談。

5、6時間目、授業参観では釜山派遣予定生徒がバディとなり、いくつかの授業に連れて行き、バディが適宜英語で説明をした。本校では、生徒ばかりでなく、教師も国際交流に協力的で、授業プリントの英語版を準備したり、ハングル訳付きで日本史授業を進めてくださった方もいた。放課後校内散策、学校紹介、お互いの文化について話し合いを行った。

釜山国際高生を迎えたのは、今年の3月釜山国際高校に派遣予定の12名の高1・高2生徒である。行くことが決まっているだけに、事前に韓国生徒と交流できるのは非常に有益であった。

交流した感想を一つ挙げよう。

「バディが初めから僕と話そうとしてくれたのはあったのですが東大の学食への行きという早い段階からお互いに話をふって交流しようとしたのが良かったです。また、生物の授業の時に難しい単語をなんとか噛み砕いて授業内容を伝えられたのは良かったです。

発音が悪くてわかってもらえない時が何度かあったので修正したいと思います。

また、学校紹介のプレゼンはもっとみんなを引き込めるように話したいです。釜山でのプレゼンまでにみんなをひきこめる話し方などを身につけたいと思います。」(高1 K君)



② 釜山国際高校訪問 2018年3月24日(火)～28日(土)

今年度の釜山国際高校訪問は3月末なので、この報告集を作成時点では準備の段階である。しかし、上でも紹介したように、釜山国際生の本校訪問の際には、意見交換やバディ役として既に交流をはじめ、メールアドレスやライン交換を通じて、お互いのやり取りをしている。また、釜山国際高校でのプレゼンテーション(3チームに分かれ、「年間行事の食事」、「福島・原発後」、「東京の観光スポット」のテーマで発表予定)の練習を、イングリッシュ・ルームの講師の下で開始するところである。

(3) その他の国際交流事業

今年度は、まず SSH を主宰する JST（科学技術振興機構）の依頼によって、ノーベル賞受賞の大隅教授による講演会が催された。また、SSH の基幹校である立命館高校との「重点枠連携プログラム」として国内の参加校および台湾の関連校と共同研究を行うことになった。最近では、ISSF（International Students Science Fair）の招きで、タイで行われた研究発表会に参加した。

① さくらサイエンス・ハイスクールプログラム

～ノーベル賞受賞 大隅良典博士の特別講演～

4月23日（火）午後、ハイスクールプログラム第2グループのインド、インドネシア、メキシコ、ブータン、ミクロネシア、マーシャル諸島の高校生と引率者、合計112名が来校。2016年に「オートファジー（細胞の自食作用）の仕組みの解明」の研究でノーベル賞を受賞された、大隅良典博士の特別講義を本校のオープン・スペースで行い、その海外生徒と本校の生徒140人余りがそれを拝聴した。質疑応答後には、本校生徒と海外生徒が小グループになり、文化交流を行った。本場のインド英語に苦労した生徒もいたが、良い刺激を受けたようであった。（P27の写真参照）

② 立命館高校との連携プログラム

～『「国際共同課題研究」を利用したグローバルマインドを持つ研究者の育成』

SSHの基幹校である立命館高校との「重点枠連携プログラム」として、本校は高雄高級中学と「アブラバチの生態」について共同研究を行った（高雄高級中学への派遣およびインターネットを通じて）。

参加生徒の感想は以下の通り：

「共同研究の研修自体はとても有意義でいくつも学んだことや楽しいことがあった。研修では、実際に台湾側の実験を手伝い、どのようにアブラマシやアブラバチを飼育、扱っているかを見学した。現状としては、こちらが全く実験できていないにも関わらず、台湾側だけで並大抵ではないデータ量を集めているという状況なので、一体台湾側がどのように効率的に飼育、実験しているのかを知った。まず、台湾側と我々の環境には小さくはない差があったことが分かった。具体的には、こちらはメンバーが2人しかいないのに対し、向こうには4人いてスムーズに仕事を分担してやっていたので、その効率性には差があると感じた。また、こちらはPM4:30が学校の最終下校だが、台湾側はPM11:00までできるので、1日あたりの効率も差があると思った。しかし、そういった環境的な効率性以上に、台湾側は洗練された技術と手筋を持ち合わせており、ここを真似することで、異種間での比較や同種での裏付けに使う程度のデータは取れると思った。また、こちら側が個体数変動について予測したいこと、そのための式や求めるべき定数と実験のプランニングについて説明することもでき、向こう側と考えを共有することもできた。総じて、コミュニケーションを直にとったことで、モチベーションが上がった研修だった。」（高1 S君）



台湾・高雄高級中学での共同研究

③ ISSF 2020（国際学生サイエンス・フェア）2020年1月15日～20日

会場：Kamnoetvidya Science Academy (KVIS) in Rayong, Thailand.

本校からは、林校長先生が引率し、2名の生徒が参加

1名は高2生で、テーマは Simulating the optimal city. もう1名は高3生でテーマは Edge-

guided Anime Characters Generation であった。高3生徒は銀賞を受賞。高2生徒も初めての海外で大いに刺激を受けたようである。

高2生徒の感想は以下の通り：

KVIS (ISSF2020 のホスト校) の学校としての姿勢や生徒の様子が印象に残りました。KVIS では高校一年から授業がすべて英語で行われるため、生徒は多少のタイ訛りがあるものの自由自在に英語を扱っていました。生徒のかかなりの割合が KAIST (韓国) や東大 (日本) などの海外の大学に進学します。また、KVIS の生徒は ISSF のために一年をかけて準備しており、プレゼンの原稿もすべて暗唱するのが当然とのことでした。学校が都市部からは離れた森の中にあり、生徒の多くが寮で生活しています。寮の部屋からは隣の部屋との間の壁が一部なくなっており、相互監視がなされるようになっていました。私と同じく競技プログラミングのコンテストに出場している KVIS の生徒がいましたが、高校に入ってからレポートなどの課題があまりに多くなり練習時間が取れなくなったと言っていました。このように、KVIS は国際的に活躍できるような生徒を育てることに力を入れており、生徒も大変な努力をしているということがわかりました。そして同時に、私の通う筑駒高校の自由闊達の校風と、それに伴う自律する責任を改めて感じました。

研究の発表は、半分失敗し半分成功したと考えています。失敗したと考えている点は、英語力全般に関するものです。オーラルプレゼンテーションでは、原稿と喋りが共に稚拙なものであったでしょうし、審査員の高度な質問に対して、それを正確に聞き取りその場で自分の意見を英語にして話すということはとても難しいものでした。普段の学習では単語を覚え論説文を読むといったことばかりをしていましたが、それに加えて自分の伝えたいことを英語で表す練習も必要だと感じました。一方で成功したと考えている点は、主にポスター発表において聞き手に自分の研究の要旨を伝えるという目的が達成できたことです。消防署を街に配置し各地点から最寄りの署までの距離の最大値を最小化すること、二つの既存の手法を組み合わせて改善したということ、その方法が従来より多様なタイプの解を導くということが伝えたいポイントでした。このことを伝えるために、グラフや図を大きくポスターに配置しておき、説明と共にそれらに沿って指を使ってジェスチャーすることをしました。例えば問題概要を説明する際には、親指で消防署を指し人差し指で街のある地点を指して距離を表現し、その後人差し指を動かすことで距離の変化を示すなどしました。日本で簡単なレクチャーをする際に使っていた方法でしたが、ISSF で役立てることができました。(中略)

私にとって今回の ISSF は初めて他国の高校生と面と向かって交流する機会でした。私は ISSF とは別に課題研究の障害科学の講座で聾・難聴や盲・弱視の高校生たちと関わる経験がありました。耳が不自由な彼らと口頭で言語を使ったコミュニケーションをすることは困難ですから、表情やジェスチャー、実際の行動による意思疎通が必要となります。目が不自由な彼らとは逆にそれらに頼らない正確かつ簡潔な言語での意思疎通が求められます。これらの二つの姿勢は ISSF で他国の生徒と交流する際にも応用できることに気がつきました。日本の気の知れた仲間となら曖昧なフレーズを曖昧な態度で発するだけでなんだか意思疎通ができてしまいます。一方で、英語に対する共通のニュアンスを持たない者同士であるなら、態度も言語もはっきりさせる必要があるということです。今回の ISSF ではいかに自分が曖昧なコミュニケーションをしてきたかを実感させられました。このことは、日本での日常的なコミュニケーションから意識をし始めました。



プレゼンしている様子

④ 筑波大学外国人教員研修留学生による本校文化祭などの参観 11月3日(土)

ここ数年にわたり、筑波大学外国人教員研修留学生を本校の音楽祭と文化祭に招待し、交流する企画を実施している。今年度は、音楽祭は都合がつかなかったが、11月3日に文化祭に来ていただいた(39期4名、40期8名。引率1名)。事後の感想文では、本校の行事に対して高い評価をいただいた。

From the Komaba Cultural festival, I saw and experienced a well-organized festival in which the students themselves played a greater role other than the teachers. The students were able to express themselves and I saw a lot of innovations on their side. / In addition, parents and different stakeholders came out in large numbers and they supported the students which is not usually the case in my country. / Also, I liked the morale which came out from the audience even when the learners seemed to have goofed. It gave them positive energy to go on. / It is worth mentioning that the waste management is really good here in Japan. The learners managed the waste so well and I could not see garbage anywhere. I am totally impressed. (マラウイ出身のBandenaさん)[本校の文化祭が生徒主体で運営している点、保護者その他多数訪れて支援している点、観衆の声援で盛り上がっている点、またごみの分別が徹底している点など、お国との比較をしながら述べられている]



本校文化祭に来校した筑波大学教員研修留学生

3. まとめ～生徒の変容などに関して

以上、本校の国際交流の実践を紹介した。本校の国際交流の特徴は、事前準備に相当時間をかけていることである。台中一中の研究発表では、高2課題研究で自分の研究テーマとしたものを半年かけてまとめ、それを英語でプレゼンする。釜山国際高校との交流では、3班に分かれた参加者がやはりテーマを決めて、プレゼンの準備をし、現地で発表する。つまり、現地での交流以前に、相当に自分を追い込んだうえで異文化生徒との交流をし、また新たな刺激を受けるわけである。当然のことながら、これらの経験を通して、参加者は学力面でも文化面でも大いに成長を遂げる。今回の例でいえば、例えば、タイのISSFに参加した生徒は、ただ海外の生徒との関係だけでなく、自分が日本で体験した特別支援学校での生徒との関係にも言及し、自分のコミュニケーション・スタイル全般についての内省を行っている。卒業後、大学で海外留学をし、本格的な研究を行う者が多いことも海外との交流の成果であるが、それまでの自分への振り返り、ということも大いに意味を持つことであろう。

今後は卒業後の生徒のアンケートを取り、今後はその後の進路への影響なども研究していきたい。

(文責：研究部・国際交流担当 八宮孝夫)

WWL 拠点校として Beyond SGH

1. 本校の国際教育の特徴

筑波大学附属坂戸高等学校（以下「本校」）では平成20年に校内の国際教育推進委員会（Committee of International Studies、以下「CIS」）を設置し、それ以来本校独自の取り組みである「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」、ブラジル、タイ、カナダ、台湾、インドネシアなど各国からの留学生の受け入れ、ユネスコスクールへの加盟、学校設定教科「国際」とその科目の設置、そして本校が主催する「高校生国際ESDシンポジウム」などを通して、総合学科高校だからこそ可能である多角的な国際教育のあり方を模索しながら実践を積み重ねてきた。そして、これまでの本校の実践の成果をベースとして、平成26年から5年間、文部科学省のスーパーグローバルハイスクール校として、語学だけではなく、「グローバル社会において、自分自身は社会とどのようにかわり、平和で持続可能な社会を実現するために何ができるか。」を生徒自身が考え、実践できることを重視したプログラムを展開してきた。

1946年に地元の農業高校として発足してから70年、1994年からは日本初発の総合学科高校のパイオニアとして20年以上歩みを重ね、平成26年度のSGH指定後は、総合学科を生かしたグローバル社会におけるキャリア教育の実践を積み重ねている。

2018年4月には、国際バカロレア日本語DPの1期生が入学した。1期生が2年生になった本年度からは、本格的にDPの授業も始まり、来年度は本校はじめてのDP最終試験を迎える。

そして本年度、あらたにWWL（ワールドワイドラーニング）コンソーシアム構築支援事業の拠点校として新たな歩みを始めることとなった。これまでの実績を踏まえつつ、さらなる国際教育の展開にむけて取り組んだ1年間であった。ここでは、WWL事業について拠点校の視点からまとめるとともに、本年度あらたに開催したThe 1st SDGs Global Engagement Conference@Tokyoについて報告する。

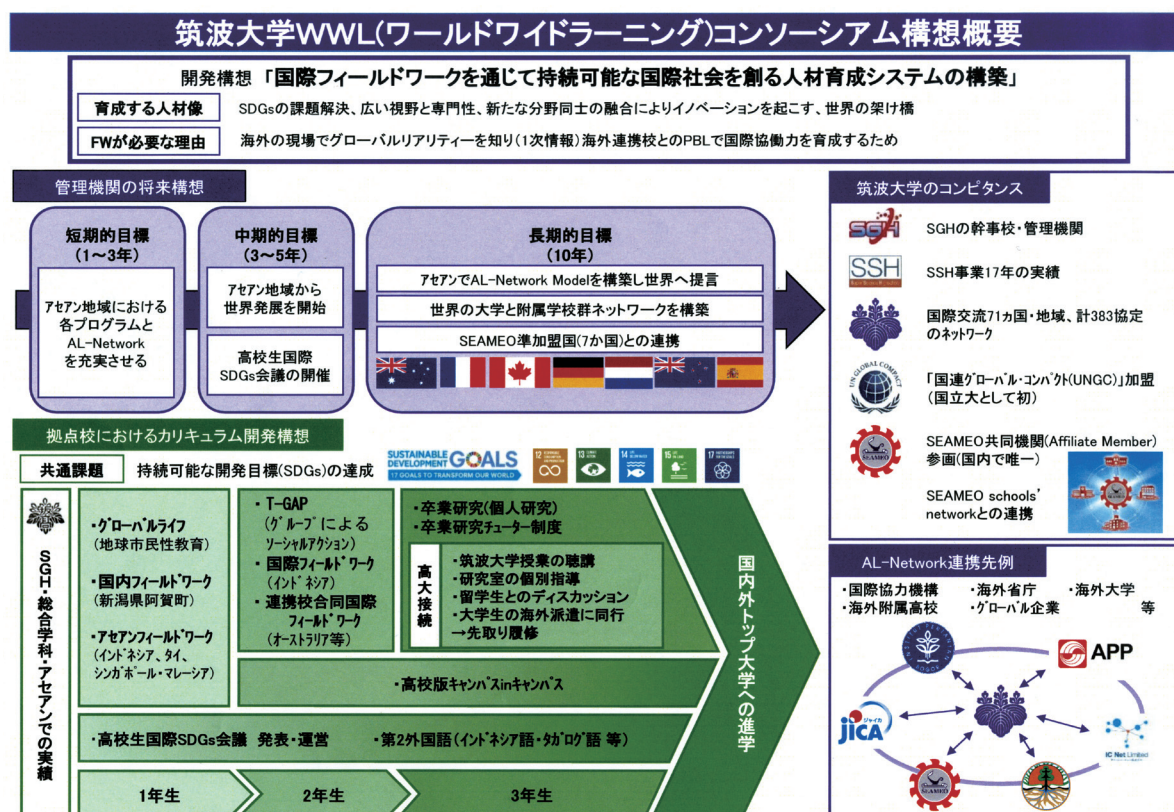


第8回高校生国際ESDシンポジウム・The 1st SDGs Global Engagement Conference@Tokyo
SDGを軸に、海外6校、国内21校が参加
(2019年11月7日、於：筑波大学東京キャンパス)

2. WWL 事業について（拠点校の視点から）

WWL 事業は、SGH 事業の後継事業に位置付けられている。これまでの SGH 事業と大きく異なる点は、学校を指定するのではなく、管理機関を指定し、そこに拠点校、そしてコンソーシアムによりさらに共同実施校、連携校を置くことである。WWL 事業で各コンソーシアムにおいて求められている主なものとして、1) グローバル人材育成のためのカリキュラム開発（社会課題を掲げた PBL）、2) 高校生が主体となった国際会議の開催、3) 高大接続による高度な学習機会の提供、4) 教師教育等があげられている。1) については、あらたに国内フィールドワーク（新潟県阿賀町）、海外フィールドワーク（アセアン3か国から選択）を開発し、グローバルライフ（SGH 開発科目）と合わせて、1 年次において入学生全員が、国内外の社会課題について現場でじかに学べる体制を整えた。2) については、後述するようにこれまで開催してきたシンポジウムの参加地域を拡大し、大学や企業との連携を深める形で実施した。3) については、大学との協議が必要なところであるが、4) の教師教育ともあわせて、SEAMEO のプログラムである、SEA-Teacher プログラムへの参画が大きな出来事であった。これは、SEAMEO（東南アジア教育大臣機構）の Affiliate member に筑波大学がなっており、その一環で、SEA-Teacher プログラムへの参加が実現した。SEA-Teacher プログラムは、ASEAN 各国の間で、教育実習（国際教育インターンシップ）を希望する学生を相互派遣するものである。本年度、筑波大学が、パイロット事業として参加し、タイ、インドネシア、フィリピンから各2名計6名が2020年2月6日から27日まで本校に滞在した（筑波大学にも、その後1週間滞在）。また、この期間、筑波大生も各国に派遣されている。

各国の学生には、各国の SDGs に関して説明してもらったり、英語の授業だけではなく、理科では各国の環境問題について、公民では現代社会について英語で授業を実施してもらった。また、本校で実施している総合学科研究大会でもプレゼンを実施してもらった。このように、実質的な高大連携を進めていければ、WWL 事業で掲げられているグローバル人材育成のためのカリキュラム開発、国際会議、教師教育そしてそのベースとなる各国とのネットワーキングなど、様々な波及効果があると思われた。



3. The 1st SDGs Global Engagement Conference@Tokyo について

2012年度から本校では、高校生国際ESDシンポジウムを開催している。昨年までは、これとあわせて全国SGH校生徒成果発表会を実施していたが、本年度からは、The 1st SDGs Global Engagement Conference@Tokyoとし、WWLで掲げているSDGsに関する国際会議として開催した。

今回のシンポジウムのあらたな取り組みとして、まず、筑波大学地球規模課題学位プログラム（略称：BPGI）の留学生に参画してもらい、これまで開催していた分科会の1グループを受け持ってもらった。分科会は英語で実施し、SDGsをベースに大学生がファシリテートする形で国内外から参加した高校生がディスカッションを行った。参加した高校生からの反応も大きく来年度以降も継続・発展させていきたい。

また、連携先であるグローバル企業との共同企画として、一般社団法人日本エシカル推進協議会（JEI）によるエシカル消費に関する分科会（分科会タイトル：「SDGs Survey：あなたはどの程度SDGsを実践できているのか？」）を開催した。JEIが開発したSDGs Survey（SDGsに関わる50問）を通じて、参加者が自分自身の日常生活に関する自己評価を行い、さらにそれを可視化し、日常生活の本質的価値や社会的価値を探索した。SDGsの学習ステップをレーダーチャートでその場で自己評価し、その後に円卓を囲んでミニワールドカフェを実施するなど、これまでにない分科会を実施することができた。

参加国も、本年度からWWL事業と連動しオーストラリア、そして附属学校群（附属高等学校、附属駒場高等学校、附属聴覚特別支援学校）からの参加もあった。

今後もSDGsをキーワードに、多くの国、地域、学校が学びあっている場を提供していきたい。



WWL・高大連携の一環でアセアンの大学生の教育実習もうけいれました。



本年度も愛媛大学附属高等学校にお世話になり、「米」を軸としたアセアン交流学习を行いました。

4. 生徒の変容について

本校では、1年次「産業社会と人間」、「グローバルライフ（地球市民性教育）」、2年次「T-GAP」、3年次「卒業研究」を3年間の大きな学びの柱としている。このなかで、複数年にわたる継続的な探求学習を行える環境を生徒に提供しており、その実績をもって大学に進学する生徒が増加している。また、海外留学経験をへて、その成果を活かした進路選択を行っている。このように、日ごろの国際教育の学びの成果を活かしたキャリア選択を行っている事例を来年度以降、詳細に内容を記録していきたいと考えている。

【資料】令和元年度 国際教育・ESD 活動一覧（抜粋）

月	内 容
4 月	2 年次 IB「ディプロマプログラム」、1 年次 SG クラス「S-TOK」スタート
4 月	姉妹校カセサート大学附属高校（タイ）から 2 名の留学生が来校（1 年間）
5 月	台湾・新竹縣立湖口高級中學 生徒 28 名、教員 2 名が来校
6 月	中国ユネスコ国内委員会招へい日本教職員韓国派遣プログラム 教員 1 名参加
6 月	JST さくらサイエンスプラン タイ・インド・ブルネイから高校生団体 55 名受け入れ
6 月	AIMS プログラム筑波大学留学生 33 名来校・1 年次生と交流
6 月	「関東甲信越北陸地区 SGH 高校課題研究発表会（北陸新幹線サミット）」へ生徒 15 名参加
6 月	インドネシアの姉妹校に 1 年間留学していた 3 名が帰国
7 月	韓国ユネスコ国内委員会招へい日本教職員韓国派遣プログラム 教員 1 名参加
7 月	3 年生 2 名が姉妹校ボゴール農科大学附属コルニタ高校（インドネシア）に 1 年留学へ
7 月	3 年生 1 名が姉妹校カセサート大学附属高校（タイ）に 1 年留学へ
7 月	3 年生 1 名が新民高級中学（台湾）に 1 年留学へ
8 月	国際フィールドワーク（インドネシア）実施 生徒 7 名教員 2 名参加
8 月	オーストラリア夏季研修プログラム 生徒 18 名、教員 3 名参加
8 月	教員 4 名が海外校外学習視察・現地打ち合わせでタイ・シンガポール・マレーシア・インドネシアに渡航
9 月	台湾から 1 名の留学生が来校（1 年間）
9 月	東京農業大学主催「第 19 回世界学生サミット（ISS）」に生徒 1 名、教員 1 名参加
10 月	姉妹校コルニタ高校から 3 名の留学生が来校（3 週間）
11 月	インドネシア・フィリピン・タイより生徒 11 名・教員 5 名ホームステイ受け入れ
11 月	第 8 回高校生国際 ESD シンポジウム・The 1st SDGs Global Engagement Conference @ Tokyo 開催 海外校・SGH 校 20 校によるポスターセッション
12 月	台湾・國立宜蘭高級中學 生徒 36 名、教員 3 名が来校
12 月	2 年生 1 名が Stanford e-Japan 2019 年春学期 最優秀生徒賞を受賞
12 月	HARUHIGAOKA SDGs GLOBAL MEETING 2019 生徒 2 名参加
12 月	3 年生 2 名がベネッセ「高校生環境小論文コンクール」で最優秀賞・優秀賞を受賞
12 月	全国高校生合同フォーラムにて 3 年生 1 名がポスター発表、留学生 2 名が参加
12 月	フィリピン大学附属ルーラル高校スタディツアー 生徒 2 名、教員 1 名を受け入れ
12 月	AIMS プログラム筑波大学留学生 22 名来校・1 年次生と交流
12 月	「国際的な視野に立った卒業研究支援 P」 生徒 1 名・教員 1 名が韓国渡航
1 月	3 年生 1 名が中央大学主催「第 19 回高校生地球環境論文賞」最優秀賞を受賞
2 月	東京学芸大学主催 SSH/SGH 課題研究成果発表会 生徒 11 名、教員 1 名参加
2 月	第 1 回 WWL 研究大会・第 23 回総合学科研究大会を開催
2 月	SEA-Teacher プログラムでアセアン大学生の教育実習 6 名受け入れ
2 月	IC-NET 株式会社 40 億人のためのビジネスアイデアコンテスト生徒 7 名参加敢闘賞
3 月	1 年次海外校外学習（ASEAN） 新型コロナウイルス蔓延のため中止

（文責：建元喜寿、今野良祐）

グローバル社会で活躍する視覚障害当事者の育成を目指して

1. 本校の国際教育の特徴

2019年度における本校の国際教育活動で特筆すべきは、タイ視覚障害者支援クリスチャン財団との国際交流協定の締結を行ったことである。これまでの交流の蓄積が一つの形になり、引き続きタイとの交流を推進するとともに、アメリカ等の視覚障害教育関連機関との新たな協定に向けても調整をしていきたいと考えている。本紙では、国際交流協定の他、小学部児童と専攻科鍼灸手技療法科留学生との交流、高等部生徒の「トビタテ！留学JAPAN」の制度を活用したタイ留学・国際交流部の活動・ブラインドサッカーでの海外遠征・イギリス研修、本校卒業生で現日本パラリンピック委員会委員長の河合純一氏を招いてのCWAJ 70周年記念行事、2019年度の海外からの訪問者一覧を掲載する。

また、本紙の執筆時にはまだ実施していないが、今後の交流の可能性を模索するため、3月末に高等部の教員が中心となり、アメリカのオハイオ州立大学・州立盲学校の訪問を予定している。この訪問については本紙の第12集等でご紹介できればと考えている。

上記の活動を継続・発展させながら、視覚特別支援学校のナショナルセンターとして、また視覚障害教育専門機関としての国際的な役割を担うセンターとして、そしてグローバル社会で活躍する視覚障害当事者の育成を目指し、国際教育活動を推進していきたい。

(文責：青松利明)

2. タイ視覚障害者支援クリスチャン財団との国際交流協定締結について



2020年1月13日（月）、筑波大学附属視覚特別支援学校とタイ視覚障害者支援クリスチャン財団及び以下の財団管理下の盲学校、視覚障害関連教育・福祉施設は国際交流協定を締結した。

盲学校 10 校

Khon Kaen School for the Blind, Khon Kaen Vocational College for the Blind, Roi-et School for the Blind, Nakorn Ratchasima School for the Blind, Dhammika Wittaya School for the Blind, Thammasakol Hat Yai School for the Blind, Mae Sai School for the Blind, Ban Dek Ramintra School for the Blind with Multiple Disabilities, School for the Blind and Multiple Handicapped Blind Lopburi, Cha-am School for the Blind with Multiple Disabilities

視覚障害関連教育・福祉 9 施設

Nakorn Nayok Development Center for Blind with Multiple Disabilities, Disability Service Center for the Blind, Disability Support Services, Job Placement for the Blind, Community-Based Rehabilitation Center for the Blind, Institute for the Promotion and Development of the Quality of Life of the Blind in the Northeast, Educational Technology Service Center for the Blind, Benyalai Library, Information Technology Service Center for the Blind

タイ視覚障害者支援クリスチャン財団管理下の盲学校では、トビタテ！留学 JAPAN の制度を活用して、既に昨年度より高等部生徒が留学を果たしてきた。今後は、両組織間の教育活動において交流活動をより積極的に行い、生徒の国際感覚及び学力の向上を推進していく。また特別支援教育、とりわけ視覚障害教育に関わる教職員及び生徒同士の交流等の活動を通して、両国の文化について深く学び合うとともに視覚障害教育関連の活動を推進し、両国ならびに両組織の発展に寄与することを目的とした連携を図っていく。

(文責：佐藤北斗)

3. トビタテ！留学 JAPAN タイ留学を通して、世界で活躍できる視覚障害者のリーダーへ

(1) トビタテ！留学 JAPAN の制度でタイ王国へ

トビタテ！留学 JAPAN (以下、トビタテ) 高校生コースは将来世界で活躍したい、日本から世界に貢献したいと熱望する、意欲高い高校生の留学を高等学校段階から文部科学省が支援する制度である。

本校では本制度を利用した留学を積極的に行っており、本年度は高等部2年の生徒1名がアカデミック・ショートコースに合格し、3週間タイに留学する機会を得た。

(2) 研修生

高等部2年普通科 坂本奈々美

(3) 留学先

受入校 The Christian Foundation for the Blind in Thailand

(タイ視覚障害者支援クリスチャン財団、以下 CFBT とする)

・2020年1月5日(日)～1月24日(金) コンケン(タイ・北東部)及びバンコク

Khon Kaen School for the Blind: コンケン盲学校(CFBTが運営する盲学校)

Khon Kaen Wittayayon School: インクルーシブ教育校(コンケン盲学校が連携している通常校)

(4) 留学の主なテーマ

○CFBT コンケン盲学校での取り組み

- ・タイの盲学校で視覚障害教育を学び、日本の教育との違いを考える
- ・文化交流(着物や茶道の体験と料理を紹介し合うなど)や視覚障害教育について発信する活動
- ・ホームステイでタイの家庭で過ごす体験と寄宿舎での集団生活を体験

○インクルーシブ校での活動

- ・CFBTが連携している通常校で学習・生活する機会
- ・視覚障害生徒(バディー)と共に英語、理科、数学、体育、日本語(第3外国語)の授業に参加
- ・障害生徒を支援するセンターでの取り組みを学ぶ

○アンバサダー活動(日本の大使としての活動: トビタテ留学のミッション)

- ・生徒自身が設定するテーマに基づいて発表
 - ①日本の文化や学校紹介の映像を事前に作って持っていき、現地で発表
 - ②日本の視覚障害スポーツを紹介し、交流試合(フロアバレーボール)
 - ③日本の盲学校の理科実験で使う感光器の紹介と実践

(5) 留学を通して学んだこと(生徒の感想)

高等部普通科2年 坂本奈々美

日本の視覚障害者スポーツである「フロアバレーボール」を紹介し、タイに広げることが私の留学の大きな目的の1つでした。日本からは、ボール・アイシェード・フロアバレーボール部の協力を得て作成した英語の紹介動画を持っていき、タイの先生方や生徒に動画を見てもらいながら説明しました。ノートにルールを熱心にまとめている生徒や先生がいたり、議論を交わしながら質問をしてくだ

さったり、真剣に新しいスポーツを取り込もうとしている気持ちが伝わってきて嬉しかったです。

実際に学校にフロアバレーボールのコートを作り、試合をしました。試合が始まると、想像以上に一人一人がスポーツそのものを楽しみながらルールを知ろうとしている様子が伝わってきました。相手コートボールが見えづらくなるほど暗くなるまで試合をし、たくさんの人と共にこの紹介ができました。

フロアバレーボールは、選手として晴眼者も参加できることから、障害を越えたインクルーシブスポーツであるというところは私が伝えたかったことであり、タイの方々にも十分に伝わったと思います。

「次は、タイチームと日本チームで交流試合をしましょう。」そのようにタイの皆さんから言ってもらいました。近い将来、試合が実現できるよう、引き続き交流を続けていきたいです。



(文責：佐藤北斗)

4. 小学部児童と鍼灸手技療法科留学生との国際交流活動について

12月2日(月)に、小学部の5・6年生12名と、鍼灸手技療法科留学生2名による交流会を実施した。留学生はそれぞれ台湾とミャンマーの出身である。現地の地理や食べ物などについての二人の話は児童にとってたいへん興味深い内容だったようである。ミャンマーの衣装を実際に着てみたり、音楽を聴いたり、台湾のお菓子をもらったりして両国の文化を肌で感じることができ、充実した時間となった。以下は児童の感想である。

- ・もらった台湾のお菓子がとてもおいしかったです。
- ・台湾でもお米を食べるんだと、びっくりしました。
- ・ミャンマーの服は、ぶ厚かったです。汗をかきました。
- ・「ミャンマーに複数の民族がいる」という話を聞いてびっくりしました。
- ・台湾やミャンマーに行きたくくなりました。



(文責：森嶋政晴・中村里津子)

5. 国際交流部の活動について

高等部には国際交流部があり、9名の生徒が所属している。今年度の主な活動は以下の通りである。

(1) 文化祭に向けた取り組み

高1と高2の3名の生徒がそれぞれ関心のある国について調べ、文化祭で発表した。その過程の中でブルガリア大使館や南アフリカ観光局の方に話を聞いたり、ブルガリア料理やスペイン料理を食べ

に行ったり、JICA 横浜で開催されたアフリカ開発会議のサブイベントに参加したりした。また、それぞれの生徒が各国の基本情報、歴史、料理、服装について調査した。当日は視覚に障害のあるお客様にも楽しんでもらえるよう拡大文字、点字、音声、更には具体的に触れる物などを用意し、展示した。

(2) ハンズオン東京との交流

世界規模のボランティアグループであるハンズオンの東京支部であるハンズオン東京から2か月に1回程度、外国人を派遣してもらい、様々な交流を行った。先進国もあれば発展途上国もあったため、幅広い国際感覚を身につけるのに有意義だった。

また、9月にはハンズオン東京が主催するLIVES東京に、10月にはデイオブサービスに参加した。特にデイオブサービスには聖心女子学院の生徒とともに点字を教えたり、弱視状態を疑似体験してもらうためのシミュレーション眼鏡を用意し、視覚障害の啓発活動にも取り組んだ。



(3) 海外からの訪問客との交流

7月にはスウェーデン王国視覚障害者協会青年部の学校訪問があった。この機会をとらえ、お互いの国の福祉制度に関する情報交換など、交流活動を行った。

また、2月にはマクジルトン氏が主催するセカンドハーベストジャパンというフードバンク活動に聖心女子学院の生徒と参加し、当日参加していたクリスチャンアカデミーという国際ショナルスクールの生徒と交流した。生徒にとっては余剰食品とホームレスの人をつなぐという作業と国際交流という両面で刺激になったようである。

同月に学習院大学のモハメド・オマル・アブディン氏という全盲のスーダン人を招き、アフリカや外国から見た日本についてお話を聞いた。
(文責：宇野和博)

6. 高等部普通科1年園部優月がIBSA ブラインドサッカーアジア選手権 2019 に出場

2019年9月末から10月上旬にかけて、タイ王国のパタヤにて開催されたブラインドサッカーアジア選手権に日本代表選手として高等部普通科1年の園部優月が出場した。

園部は日本代表の初戦となったオマーン戦で前半途中からピッチに入り、公式戦初出場を果たした。この試合ではシュートを数本打つなど、初めての国際試合で普段通りの実力を発揮することができた。決勝進出をかけた準決勝の中国戦ではPK戦にもつれ込み、園部は4人目のキッカーを任された。結果はポストを弾き得点とはならなかったものの、初の国際試合の舞台で大きな経験を持ち帰ることができた。



(写真提供：NPO 法人日本ブラインドサッカー協会／鰐部春雄)

今回初めて代表の公式戦のメンバーに帯同し、今までに感じたことのない大会ならではの緊張感など様々なことを感じる事ができ、とても良い経験になりました。

準決勝の中国戦は2対2の同点でPK戦になりました。点をとられた時も点を取った時も全員で喜び、励ましあっていたので、周りの選手の方やスタッフの方と年齢は離れていますが、一つになれたと思えました。

今回感じた悔しさや緊張感を忘れず、これから大事な場面で決められるような選手になれるよう日々練習していきたいと思います。
(文責：山本夏幹)

7. 障害者リーダー研修でイギリスへ

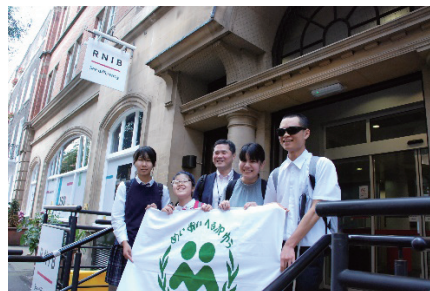
2019年8月1日から8月10日まで、公益財団法人ダスキン愛の輪基金主催で、視覚障害のある高校生を対象に10日間のイギリス研修が行われた。全国募集された中から選抜された4名の視覚障害のある高校生のうち2名は本校の高等部2年の坂本奈々美と近藤悠斗であった。また、研修全体の企画およびアドバイザーを本校教諭の青松利明が担当した。

研修の前半は、元オールダム教育局特別なニーズ支援部視覚・運動障害児チーム代表の Kay Wrench (ケイ・レンチ) 先生のコーディネートで、スコーン作り、炭鉱博物館見学、インクルーシブ教育で学ぶ高校生とのクライミングなどの野外活動、地域の人々に対する日本文化の紹介、ホームステイ等の活動を行った。



後半は、RNIB (英国盲人協会) や在英国日本国大使館にコーディネートのご協力をいただき、視覚障害のある人々に関わる雇用状況・テクノロジーの開発・社会的課題を解決するための政府に対する働きかけの方法に関する講義、日本大使館での大使との懇談、大英博物館・ケンブリッジ大学の障害学生支援センターの見学、元パラリンピック金メダリストとの交流などを行った。

研修全体を通して、様々な体験をし、多くのことを学ぶことができた。その中でも、研修生はイギリスのインクルーシブ教育について学ぶ中で、様々な教育システムのメリットやデメリットをよく考えながら、教育制度を工夫していくことが大切だと感じたようである。また、元パラリンピック金メダリストとの交流からは、どんなことでも地道に続けることで実現に近づけるのだと勇気づけられたようである。



(文責：青松利明)

8. CWAJ 70 周年記念行事を開催 ～河合純一氏による講演とスポーツ活動で交流～

一般社団法人 CWAJ*（以下、CWAJ）主催で 11 月、本校を会場に 70 周年記念行事を実施した。当イベントは English Conversation Gathering（ECG）という活動の一環で、英語を通して学習・体験することを目的として開催された。

当日は講師に元競泳日本代表で 6 度のパラリンピック出場を果たし、通算で 21 個のメダルを獲得、現日本パラリンピック委員会委員長の河合純一氏をお招きし、「パラリンピックへの道」という題で講演をしていただいた。本校からは高等部普通科の 6 名の生徒が参加。講演の最後には河合氏に対し、「競技者として水泳と向き合ってきた心構え」に関する質問をするなど、精力的に参加する様子が見受けられた。

また、行事の後半ではアメリカンスクールの生徒 20 名、CWAJ 会員 50 名と一緒にサウンドテーブルテニス（以下、STT）の体験を行った。体験会では本校の生徒とアメリカンスクールの生徒でペアを作り、本校の生徒が STT のルールを説明したり、プレーの方法を教えるなどして交流を図った。

* カレッジ・ウィメンズ・アソシエーション・オブ・ジャパン（CWAJ）は、1949 年に設立されたボランティア団体で、様々な国の女性が教育・文化活動を通じて社会貢献を目指している。主な活動の一つに奨学金制度があり、日本国内外で学ぶ女子大学院生、視覚障害学生（男女）、福島看護学生（男女）に対してさらに学問を続けられるよう奨学金で支援し、将来社会のリーダーとなるべき人材の育成を目指している。



（文責：山本夏幹）

9. 海外からの訪問者（2019 年度）

- 6 月 24 日 フィリピン人眼科医 Dr. Carlo
- 6 月 25 日 国立ソウル盲学校と江原明震学校教員（各 1 名）
- 6 月 27 日 JICA マレーシア 教育省行政官・教員 10 名
- 7 月 10 日 台北教育大学 大学院生 25 名
- 9 月 25 日 KONG Sarvon プノンペン大学教育学部大学院生（カンボジア）
- 11 月 21 日 台湾 盲人福利共進会 20 名
- 11 月 27 日 マレーシア SK Putrajaya Presint 18（1）High Performance School 教員 8 名
理事 1 名

聴覚特別支援学校における国際教育推進事業

1. 本校の国際教育の特徴

筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下、本校）における国際教育推進事業の目的は、海外の聾学校（フランス・韓国・台湾）との生徒相互訪問交流、オンライン交流、海外企業との連携、海外からの来校者を積極的に受け入れることを通し、国際的資質を育て、これからの国際社会に通用するグローバル人材の育成を目指している。さらに、本校生徒が国際教育推進事業の経験により、聴覚障害者のコミュニティや地域社会、職場等で広い視野に立ち、活躍していくことを目指している。

2. 令和元年度パリ聾学校相互訪問交流教育の推進事業報告

フランス国立パリ聾学校（Institut National de Jeunes Sourds de Paris：以下、パリ聾学校）との交流は、平成 15 年の姉妹校協定の締結から始まり、相互訪問交流を平成 25 年度より行っている。平成 26 年度は高等部生徒 10 名と教員 4 名が、平成 29 年度は高等部生徒 10 名と教員 5 名が渡仏し、パリ聾学校やパリ市内で生徒間交流を行い異文化理解・交流を深めることで、国際的視野を広げることができた。また、オンライン交流も年に数回行っており、単発の交流にとどまらず、継続的に交流を行うことができています。本年度は、令和元年 12 月 8 日から 13 日にかけて、高等部生徒 9 名と教員 5 名が、合計 8 回目を迎える相互訪問交流を行った。以下、本校高等部普通科生徒がパリ聾学校やパリ市内の文化施設を訪問し、交流した様子や成果を報告する。



本校プレゼン終了後の集合写真

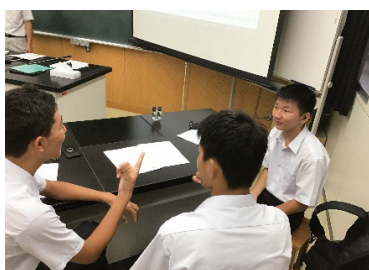
(1) 事前学習

パリ訪問交流の抽選会は、保護者も参観しやすいことから、9 月 25 日の体育祭の昼休みに実施した。パリ訪問交流の対象者は本校高等部普通科 1、2 年生で、募集人数 10 名のところ、24 名の申し込みがあり、生徒のパリ訪問交流に対する興味関心の高さが伺えた。抽選実施後、参加者に対してパリ訪問の行程や今後の流れを説明し、準備の心構えや見通しをもてるようにした。その後、パリ訪問までに、グループ別学習やフランス手話の練習、オンライン交流などの事前学習を行った。

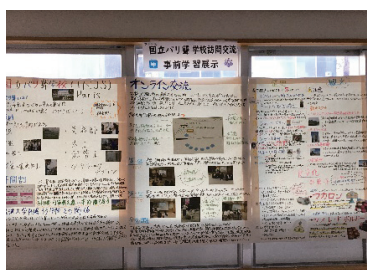
グループ別学習は、生徒に実施したアンケートを基に、「フランスの食文化」、「フランスの歴史」、

「フランスの観光」、「パリ聾学校」の四つのテーマを設定した。学習内容は文化祭において展示発表を行い、他の生徒や文化祭の来場者にも国際交流の取組や事前学習の内容を発信することができた。フランス手話の練習は、2週間に一回程度、朝のH R前の時間を利用して行った。内容は自己紹介や簡単な挨拶で、フランス手話の動画や指文字表などを利用した。また、外国では氏名を一つの手話で簡略的に表すサインネームがよく用いられることから、生徒自身のサインネームを考える活動を行い、自己紹介に取り入れた。前回のパリ聾学校訪問の際は、自己紹介においても通訳を介していたが、練習したフランス手話やスライド資料を活用することで、今回の訪問時は通訳を介することなく自己紹介を行うことができた。

オンライン交流は、パリを訪問する生徒を中心に11月22日に行った。本校生徒は日本の伝統的な遊びや食べ物を紹介し、パリ聾学校からは寄宿舎などの学校施設の紹介を受けた。その後、英語による筆談や手話、身振りをを用いながら自由に質疑応答を行った。事前にオンライン交流を行うことで、パリ聾学校の生徒とのコミュニケーションに慣れたり、訪問時に行うプレゼンテーションの工夫の参考になったりした。



自己紹介の練習



文化祭展示発表



オンライン交流

(2) パリ聾学校・パリ市内訪問

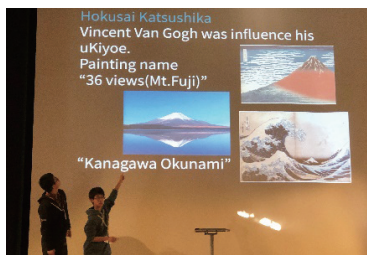
12月9日

パリ聾学校訪問一日目は10時から本校生徒が自己紹介やプレゼンテーションを1時間程度行った。内容は、本校の紹介、日本文化紹介、昔話の劇、サインネームを取り入れたダンスの披露であった。スライド資料のデータを入れたタブレット端末を日本から持参し、プロジェクターで投影してプレゼンテーションを行った。説明の内容は英語や写真で作成し、英語、手話、身振りで説明した。本校から、けん玉、箸、お手玉、両校の学校名を入れただるまを贈呈した。両校の発展と、今後の交流の継続を願い、両校の代表生徒がそれぞれだるまに目入れを行った。箸は壇上で体験してもらい、けん玉やお手玉は交流時に両校の生徒で利用できるようにし、その後の交流のきっかけになるようにした。

昼食時は教員と生徒は分かれて、生徒のみで交流を行えるようにした。パリ聾学校の食堂でパリ聾学校の生徒が配膳指示をして、一緒に準備をした。昼食後は両校生徒でグループをつくり、バスケットボールやサッカーを行い交流した。「スポーツ交流や昼食交流を通して、パリ聾学校の生徒と仲良くなれた」との感想も多く、昼食を取ったり、スポーツをしたりしながら、活発なコミュニケーションをとることができていたようである。教員は他の部屋で昼食を取り、お互いの国の教育制度や今後の交流について情報交換を行うことができ、有意義な時間となった。



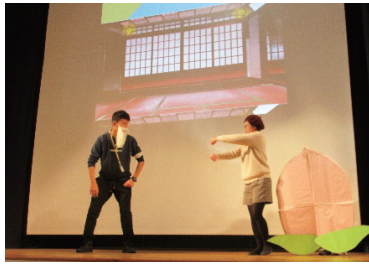
贈呈したお土産



日本文化の紹介



だるまの目入れ



昔話の劇



昼食交流



体育館でのスポーツ交流

12月10日

パリ聾学校訪問二日目の午前中は、パリ聾学校教員による歓迎式典を行っていただいた後、三つのグループに分かれてディスカッションを行った。ディスカッションのテーマは「ストライキについてどう考えるか」で、訪問時にパリで実施されていたストライキについて、パリ聾学校生徒と本校生徒で様々な意見交換をすることができた。意見交換は、筆談や手話や身振り、スマートフォンの翻訳機能など、様々な手段を用いて行われた。パリ聾学校の生徒からは、「今日は地下鉄もバスも運休しているため、両親は歩いて出勤している」、「ストライキの考え方は賛成だが、ストライキになると不便になる」など、実生活に即した意見を聞くことができ、日本の社会や自分たちの考えと比較することができた。ディスカッション終了後は、それぞれのグループから二名ずつ代表を選び、ディスカッションの内容や自分の考えを発表し、グループの意見を全員で共有することができた。帰国後の生徒の感想では、「ストライキについてパリ聾学校の生徒の意見を聞いて良かった」、「フランスの社会と日本の社会を比較するきっかけとなった」と答える生徒が多く、異文化体験、異文化理解につながったようである。

午後は庭園や音楽室、発音発語指導室などの校内見学を行い、寄宿舎で手作りのケーキを食べながら交流をした。発音発語指導室では、生徒が触りながら音や画像を感じられる機械や背中から振動を感じる機器など、日本ではあまり見られない設備があり、本校生徒は自分たちの経験との違いに興味をもったようであった。寄宿舎は学校内に併設されており、個人の部屋にシャワールームや洗面台がついていた。各部屋の入口には各生徒の起床時刻、登校時刻、下校時刻が記載されており、個人の生活を大切にする環境が伺えた。見学後は、前日から用意していた手作りのケーキを頂きながら交流を行った。



ディスカッションの様子



背中で振動を感じる機器



寄宿舎での交流

12月11日

午前中はパリ聾学校の教員、生徒と共にルーヴル美術館を訪れ、様々な芸術作品を鑑賞した。パリ聾学校の美術担当教員からの解説があり、それぞれの芸術作品について文化的、歴史的、宗教的背景から深く理解することができた。また、聴覚障害者が描いた絵画の説明もあり、展示されている芸術作品に対して、興味関心を高めることができた。午後はサント・シャペルやクリスマスマーケットを観光し、フランスの歴史や文化を感じることができた。

夕食後、平成31年3月からパリ市内のOECD代表部に勤務しており、学習到達度調査(PISA)に関する仕事を行っている日本人の方から30分程度講話をいただいた。講話の内容は、現在のパリの状況やその背景、パリでの生活や仕事内容についてであった。ストライキの状況の中、生徒たちが

パリに訪問できたことについて、不便ではあるが大変貴重な経験になっており、この経験をきっかけにして様々な見方ができるようになってほしいとのことであった。また、普段仕事で感じていることや、学習到達度調査結果を基にして、生徒に身に付けてほしい資質能力を国際的な観点からお話を伺うことができ、生徒の国際的な視野を広めたり、キャリア教育につなげたりすることができた。



芸術作品の鑑賞



クリスマスマーケットの散策



OECD 代表部職員からの講話

12月12日

最終日の午前中は本校教員、生徒のみでエッフェル塔を観光した。エッフェル塔の窓口には障害者割引について表示されており、持参した障害者手帳と身振りや筆談を用いて、生徒自身がスタッフとやり取りをして適切な入場券を購入することができた。観光の時間が限られていたため、階段で昇り降りする際の所要時間や人数なども生徒自身でやり取りして確認することができた。パリ訪問初日と比べ、コミュニケーションへの不安がなくなり、パリ聾学校の生徒だけではなく、外国人の聴者に対しても積極的にコミュニケーションをとることができるようになった。



エッフェル塔の障害者割引表示



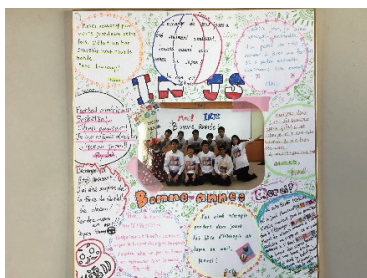
エッフェル塔の展望台



凱旋門

(3) 事後学習

帰国後、生徒が記述した感想を基に反省会を行い、パリ訪問交流を振り返るとともに、パリ聾学校に対して礼状を送付した。また、高等部普通科生徒に対して事後報告会を行った。パリ聾学校や文化施設で体験したこと、パリ訪問交流を通して学んだことや今後の生活に生かしたいことを発表し、パリでの体験を全員で共有することができた。令和2年5月にはパリ聾学校から教師や生徒が来校する予定であり、パリへ訪問した生徒を中心に、学校全体でパリ聾学校との国際交流を継続していきたい。



送付した礼状



事後報告会の様子



交流一日目

報告会のスライドの例

(文責：久川浩太郎、澤口真弓、荒川郁朗、福地陽、石井清一)

附属大塚特別支援学校の国際教育の取り組み

1. 本校の国際教育の特徴

筑波大学附属大塚特別支援学校における教育拠点構想の1つである「国際教育拠点」の目的は、諸外国と連携して共に学び合い、互いの教育力を高めることである。これをふまえ、本年度は、公益財団法人東京観光財団を通じた台湾国立屏東（ピンドン）特別支援学校との授業交流、2020年に開催されるオリンピック・パラリンピックに向けた全校による国際教育イベント「大塚オリパラデー2019」の開催、児童生徒の個別の教育的ニーズに応じたALT（外国語指導助手）による集団での英語学習、インドネシア共和国チパガンディ特別支援学校との国際教育研究交流など幅広く教育活動を行い、国際教育を推進した。

2. 台湾国立屏東（ピンドン）特別支援学校との交流

今年6月に訪日した台湾国立屏東特別支援学校高等部の生徒8名と本校高等部の生徒23名が、ライフキャリア学習（作業学習）での授業交流を行った。製菓を行う1班、布製品への印刷で製品作りを行う2班、アップサイクルによる製品作りを行う3班の3つに分かれて、本校高等部の生徒が作業内容を説明したり、一緒に作業を行ったりした。体験を通して互いに感想を発表し合い、交流を深めることができた。



3. 全校による国際教育イベント「大塚オリパラデー2019」の開催

本校では2016年度より、オリンピック・パラリンピックを学校の重点プロジェクトとして位置づけ、幼稚部から高等部までの全校を挙げて取り組んでいる。オリパラ教育の目標は①生涯スポーツを通じたスポーツ活動、②多様な価値観、③他者への敬意、の3つを柱に据えている。これらを実現するために、今年度は、「大塚オリパラデー2019」を全5回（6月2回、10月、11月、1月）開催した。

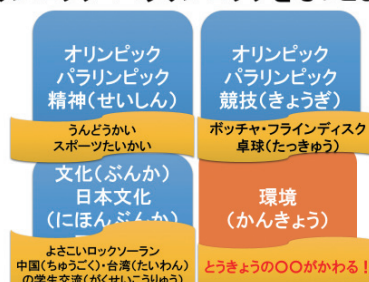


第1回は、前半にオリンピック・パラリンピックについての学習、後半はボッチャの体験活動を行った。オリンピック・パラリンピックの学習では競技の様子を写真で紹介したり、2020年は東京が舞台となって大会が開催されたりすることを日付やどこの会場で行われるのかも含めて紹介をした。ボッチャの体験活動では、各部対抗でボッチャのゲームを行い、児童生徒の実態に応じた環境設定、教具の工夫をすることで全校が一丸となって盛り上がる事ができた。

第2回は、国際オリンピック委員会（IOC）が定める623日のオリンピックデーと関連して、大塚オリパラデーを開催した。2020年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催するため、日本の文化や歴史的な背景を学ぶ機会として、ソーラン節とドジョウすくいの踊り体験を行った。ソーラン節は、ロック調の曲を使用して、リズムカルに踊れるように工夫した。ドジョウすくいでは、ドジョウの絵とザルを紐で結び、すくって捕らえるようにした。児童生徒の感想から「ドジョウがすくえて嬉しかった」、「もう一度やってみたい」等が挙げられた。



オリンピック・パラリンピックをもっとしよう！



第3回は、東京都オリンピック・パラリンピック教育の4つのテーマ「精神」「競技」「文化」「環境」への理解推進から「環境」について取り挙げた。開催地である東京がどのようにしてオリンピック・パラリンピックを支えていくのかについて、児童・生徒にとって身近で興味・関心の高い東京の駅や鉄道を題材にして東京メトロ、JR東日本、都営交通局の取り組みについて「オリパラ東京鉄道クイズ」を行った。クイズでは、都内各路線に導入された新型車両11事例のユニバーサルデザインを紹介し、児童生徒は日常的に利用している駅や鉄道について自分の体験や知識をもとに積極的に挙手し、発言する姿がみられた。

第4回は、楽しみながらスポーツに取り組むことをねらい、運動の様々な要素（投げる、打つ、転がすなど）を取り入れた5種目のアダプテッドスポーツ体験を行った。高等部3年の生徒が見本を見せるなど、一部生徒による運営も行った。子どもの実態によって、フライングディスクをカラーボールに代えて取り組むなど、幼児児童生徒いずれも取り組みやすいもので行うことができ、楽しむ姿が見られた。



第5回は、今年度、取り組んできたオリンピック・パラリンピックの学習を振り返る取り組みを行った。内容は、競技に関すること、マスコットキャラ、世界各国の料理等のクイズである。また、本校は、保健給食とも連携し、第2回の大塚オリパラデーと合わせて世界各国の料理を味わう取り組みを行っており、どこの国の料理を食べたのか振り返る機会を設定した。年間5回を通して、幼児児童生徒達が集まり、全員がオリンピック・パラリンピックに関する学習を深めていくことができたと考えられる。今後も、オリンピック・パラリンピックの学習活動に取り組んでいきたいと考える。

4. インドネシア共和国チパガンディ特別支援学校との国際教育研究交流

本校は、2017年よりインドネシア共和国のチパガンディ特別支援学校（以下＝SPLB-C）と国際教育研究交流協定を締結し、授業研究会を通して教員の授業力および特別支援教育の専門性の向上を図るとともに、個別の指導計画および教育支援計画の作成と評価に関する情報交換を行うことを目的に教員間交流を行っている。日本とインドネシアは障害者権利条約を批准しており、交流対象校であるSPLB-Cは、日本の教育モデルを援用していることから、条約批准後の課題についても共有していける関係にある。

交流初年度は、本校教員2名が現地視察にSPLB-Cを訪れ、授業を参観して授業研究会を行い、環境設定や教材教具などを含む手立てについて、意見交換した。また、インドネシア教育大学を訪れ、本校の特徴や先導的研究実践について映像や写真、スライドを用いて紹介し、特別支援教育専攻の大学教員との交流を深めた。交流2年目は、SPLB-Cの教員2名が来日し、本校の授業研究会および障害児基礎研究会（本校の根本副校長が幹事を務める）が主催する教材制作のワークショップに参加し、環境設定や教材教具などを含む手立ての工夫、授業研究会での協議の持ち方について意見交換を行った。

これら2年間の交流を踏まえ、今年度は、さらなる研究交流を推進するため学校同士をインターネット回線で結んだWeb会議での教育研究交流を12月に計画した。SPLB-Cではインターネット環境が整っていないため、本校から2名の教員を派遣してWeb会議のための環境構築を行った。Web会議の環境構築のために必要な機材（図1-2を参照）および通訳者は全て本校が手配した。また、Web会議における当日の本校の会場図や当日の流れについては図1-1及び表1を参照。

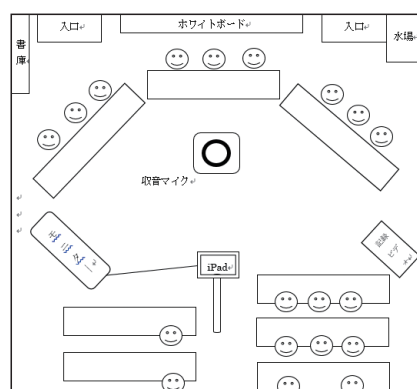


図1-1 当日の会場図



図1-2 Web会議に必要な機器

時程	行程
8:30	チパガンディ特別支援学校到着
9:00~11:00	各クラスと研究対象の授業を参観 ※研究対象の授業を録画する
11:00~12:00 (日本時間 13:00~14:00)	研究対象の授業の動画データをネットで送信 テレビ会議の準備(PCをネットワークに接続)
12:00~13:00 (日本時間 14:00~15:00)	ランチミーティング(テレビ会議の持ち方) ※日本の本校教員はこの時間帯に研究対象の授業動画を見る
13:00~14:00 (日本時間 15:00~16:00)	日本の本校とチパガンディ特別支援学校の教員のテレビで意見交換を行う ※同時通訳をお願いする
14:00~15:00	今後の研究交流について話し合う

表1 当日のインドネシアスケジュール

当日のWeb会議までに、本校教員は指導案（日本語翻訳済み）と対象授業の動画を確認し、授業内容や指導、支援方法、また協議の観点等について共通理解を行うようにした。研究授業は、「お花の育て方」という学習テーマであった。導入の部分では、花の歌をみんなで歌いながら学習テーマに親しみをもたせながら始まった。展開では、花の種類や花の部位について写真カードを利用しながら学習が進められた、展開の後半は校庭に出て枯れた葉と枯れていない葉の違いや、雑草などを抜いて花を育てることの大切さについて学んでいた。実際のWeb会議では、SPLB-Cの教員約15名、本校

教員がおよそ 20 名、そこにインドネシア教育大学の学生が 20 名程参加しての会議が行われた（写真を参照）。



写真【本校での Web 会議の様子】

授業者からは学習集団の中でもより支援が必要になる生徒への関わり方や本時の振り返り活動に位置づけられた配慮の仕方や自己評価に関する質問が投げかけられた。また、重度知的障害児の集団活動への参加について、双方の教員間で、同様の課題を有していることが共有され、その手立てについて多くの意見が交わされ大変有意義な機会となった。およそ 1 時間半にわたり活発な意見交換が行われ、SPLB-C の先生方からは「具体的なアドバイスを受けることができて大変嬉しかった」との感想がきかれた。国や文化の違いはあるが、障害のある生徒を思う気持ちや一人ひとりを尊重した指導が大切であることが改めて会議を通して共通理解することができた。

（担当：紅林、原田、飯島、若井、佐藤義、仲野）

国際的視野で物事を捉え、積極的に自己発信する桐が丘

1. 本校の国際教育の特徴

附属桐が丘特別支援学校では、国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲のある児童・生徒の育成を目標に掲げ、国際教育の実践を全校で行っている。

本校の国際教育活動としては国際交流協定を締結している韓国・社会福祉法人 SRC 附属広州セロム学校（以下、セロム）や台湾・国立南投特殊教育学校（以下、南投）及び国立和美実験学校（以下、和美）との交流事業（写真1、2）が挙げられる。この事業では、両国に児童・生徒の代表が赴き、交流活動や公共交通機関の利用体験、食文化を含む異文化体験を通じ、社会の様子やバリアフリー環境などの知見を広めている。また、事前指導を代表生徒だけでなく全体で行い、帰国後に中高合同国際交流報告会を設けることにより、代表生徒の国際交流体験が広く校内で共有される構図がある。

また、筑波大学の外国人研修生や留学生との交流（写真3）は14回を数え、昼休み・放課後を利用したイングリッシュルーム（写真4）の定着と相まって、児童・生徒の国際交流に対する前向きな姿勢を育む好機となっている。



写真1



写真2



写真3



写真4

2. 活動報告

(1) 韓国 広州セロム学校訪問

期日：令和元年11月20日～22日（21日セロム訪問）

参加者：小学部第6学年女子、中学部第2学年女子、引率者2名（施設併設学級主事、教諭）

本校の児童生徒が訪韓するのは、今年度をもって10回目となった。小・中学部の代表児童生徒2名と引率者2名という、昨年度に引き続きコンパクトな一団での訪問であった。

① 事前指導

期日：令和元年 11 月 7 日（木）

事前指導として、英語を使った自己紹介動画を送りあい、代表児童・生徒の学級で視聴した。お互いのスポーツや食べ物、趣味などについて紹介した。代表児童・生徒のクラスメイトも、セロムの児童生徒や教室の様子を見ることができ、その違いをうかがい知ることができた（写真 1・写真 2）。



写真 1



写真 2

② 空港での出来事

渡航にあたっては車椅子を使用した。飛行機での移動に関しては、搭乗前にいったん自分の車椅子を荷物として預け、空港の車椅子を借りて使用し、着陸後に自分の車椅子を受け取る。この点に関しては、航空会社のサポートのおかげで、滞りなく行うことができた。

金浦空港に着くと、見慣れないハングル文字が目に入る。ここが異国であるということを実感せずにはいられない風景である。早速お小遣いを両替することになったが、1 円＝およそ 10 ウォンということから、小学部児童は自分のお金が増えたような感覚におちいったことを印象に残ったこととして挙げていた（写真 3・写真 4）。



写真 3



写真 4

今回の訪韓にあたっては、日韓情勢を考慮し、公共交通機関は利用せず、旅行会社の手配した車で移動となった。移動中に現地の人々と会話することはあまりなかったが、夕食で外出した際にエレベーターの順番をゆずってくれたり、車椅子で通行しやすいようにと気遣ってもらったりした。代表児童生徒はその場面を帰国後に振り返り、「韓国の人々は親切だった」と感じたようである。

③ 広州セロム学校訪問

11月21日、セロムを訪問し、歓迎を受けた（写真5）。小学部の代表児童は、ガイドに通訳してもらいながら日本文化である「茶道」を紹介し、和菓子と一緒にふるまい、喜ばれた（写真6）。中学部の代表生徒は韓国語で自己紹介をし、リコーダーでふるさとを演奏した（写真7）。自己紹介については、予め韓国語でどのように言うのか調べ、練習を重ねたそう。セレモニーに参加したセロムの児童生徒が、それぞれの紹介をよく聞き、見つめていたことが印象的であった。当初は緊張していた二名であったが、セロムの人々の好反応に緊張が徐々にほぐれていったようであった。



写真5



写真6



写真7

その後、校内を見学した。音楽の授業に参加させてもらったり、学級活動やブランコを使った感覚統合の授業、スライムで手の感覚を高める授業（写真8）や給食の様子などを参観したりした。桐が丘では給食は各教室に配膳され、クラスに分かれて食べるが、セロムでは皆が食堂に集まり、各自が食べる分量の給食をとって食べる。二名の代表児童生徒は、自分の学校とは全く異なるスタイルの給食に興味津々の様子であった。

見学中には、セロムの児童生徒や先生が日本語であいさつをしてくれ、こちらも韓国語であいさつをするという場面がたびたびあった（写真9）。事前にビデオで交流した児童生徒の顔も見られた。



写真8



写真9

④ 訪韓中の出来事

セロム訪問後は、韓国民俗村を訪れた（写真10）。そこでは、朝鮮王朝時代の生活文化や民具などを見学したり、昔の衣装を着た一行のパレードを楽しんだりすることができた。同行した通訳ガイドが薦めていた伝統的な韓国のお菓子を見つけ、試食することができた。その後、セロムの先生が薦めていた韓国の若者の間で人気のあるスナックを見つけることもでき、伝統的な文化だけでなく、最近の若者文化についても触れることができた。

代表児童・生徒は、行く先々で気になったものや景色の写真・動画を撮影していた。二名が共通して着目していたのは、自分たちにとって身近な車椅子マークの違い（写真11）や、食事に関するもの（量が多い、おかずの種類が多い、辛い、食器が違う等）であった（写真12）。その他、小学部代表児童は街の様子や交通事情の違いなどに興味をもったこと、中学部代表生徒は行く先々で韓国の人々の優しさに触れたことについて、それぞれ報告会で述べていた。



写真 10



写真 11



写真 12

⑤ 代表児童・生徒の感想

韓国へは行ったことがなかったので、行くまでは、韓国のことは何も分からなかったけど、少し違うところがあるのではないかなと思っていました。実際に韓国へ行ってみて、韓国は日本と違うところもあるし、同じところもあるなと思いました。(中略)そして、韓国の人はとても親切でした。ホテルへ移動するときにスロープで、押してくれる人がいました。1日目にレストランでお夕食を食べた後、写真を撮るときに、「撮りましょうか？」と声を掛けてくれる人がいたりしました。

韓国は、日本と違うけれど、韓国は韓国でいいところがあるなと思いました。そして、反省点は、最初緊張して声あまり出せませんでした。だんだん大きな声が出るようになったけど、最初から積極的に出来たらよかったなと思いました。韓国語は、「アニョハセヨ」と「カムサハムニダ」しか使えなかったの、もっと韓国語を覚えられたらいいなと思いました。(以下略)

[中学部代表生徒感想]

セロム学校の生徒さんや先生方はやさしかったです。一緒に授業を受けましたが、桐が丘とあまり変わらない印象を受けました。(中略)

空港では客室乗務員の方が日本語を話していたので、韓国語も日本語も英語ももっと勉強して話せるようになりたいと思いました。(中略)街で通りかかった人は、エレベーターを探しているときに、私たちが聞いたわけではないのに、「こっちにあるよ」と教えてくれました。日本にもそういう人が増えればいいなと思いました。韓国の人々は思いやりが素晴らしいと思いました。

⑥ 事後指導（報告会）

[小学部] 令和2年1月31日（金）4校時

[中・高等部] 令和2年1月21日（火）6校時

代表児童・生徒はそれぞれの学部の児童生徒を対象に、報告会で自身の経験やそれに基づき考えたことなどを報告した。その後、報告を聞いた児童・生徒が質問をしたり、感想を述べてたりした。また代表児童・生徒は、訪問後に、セロム宛にお礼の手紙を書いた。

(2) 台湾 国立南投特殊教育学校・国立和美実験学校訪問

期 日：令和元年11月5日～8日（6日に和美、7日に南投）

参加者：代表生徒2名（高等部第1学年女子、2学年女子）、引率者2名（副校長、教諭）

平成28年度に両校と国際交流協定を締結し、昨年度に引き続き2度目の生徒同士の交流をした。今年度は、韓国訪問同様、代表生徒2名、引率者2名での訪問となった。

① 事前指導

期 日：令和元年10月23日（水）4校時（11：50～12：25）

昨年度に引き続き、和美とSkypeのビデオ通話を行った（写真13）。代表生徒のみを対象に事前指導を行うのではなく、代表に選ばれなかった生徒にも国際交流協定校を身近に感じてもらう狙いがあった。

両校教員による打ち合わせや通信確認を経て、本校高等部第1学年10名及び2学年6名と和美の第10学年（高1相当）33名が4校時35分間交流した。こちらは簡単な自己紹介と事前に考えていた台湾への簡単な質問をし、先方は数名の自己紹介ののち台湾についての質問に答えてくれた。昨年度と違いスライドや台本を事前に準備せず、どちらかという簡単な会話に近い形となり、生徒は緊張しつつも和やかな雰囲気の中で交流が行われた（写真14）。代表生徒たちが最後に挨拶をすると、和美の生徒達や先生の“*I'm looking forward to seeing you.*”と返してくれ、お互いの存在を身近に感じることができた。

今回は、スライド等の大掛かりな事前準備をせず、相手との「交流」を主体にした。なかなか台本がない分、不安な面もあったようだが、これが即興的な英会話へとつながっていくことを期待したい。



写真 13



写真 14

② 移動

訪台も車いすを荷物として預け搭乗した。今回は両名とも簡易電動車いすであったため、やや梱包に時間がかかった。現地では、都市部だったためバリアフリーが整い、新幹線には車いす専用車両があり（写真15）、路線電車もバスも車いす対応だった（写真16、17）。しかし、韓国と同様に初日は現地ガイドの帯同がなかったため、ホテルやレストランへの移動に苦戦した。



写真 15

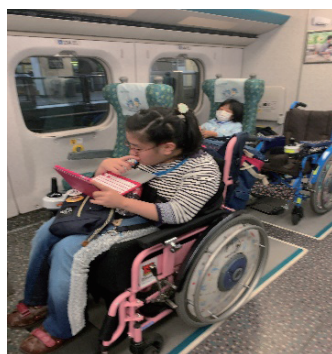


写真 16



写真 17

③ 国立南投特殊教育学校訪問

南投には主として知的障害のある児童生徒が在籍しているが、肢体不自由を併せ有する児童生徒も在籍している。重度・重複障害者を対象に校内で理学療法や作業療法が行われている。小学部3学級、中学部3学級、高等部学6学級の計10学級という規模だが、校舎は大きく設備も充実している。高等部は職業訓練が中心で、清掃、園芸、ケータリング、軽作業等の授業がある。

バリアフリーの徹底された新しい校舎で生徒と昼食をとり（写真18、19）、芝生の校庭に設置されたトランポリンを体験したり（写真20）、リラクゼーションルーム（写真21）や学校に併設された購買で生徒たちが職業実習を行っている姿を見学したり、話を聞いたりすることができた。



写真 18



写真 19

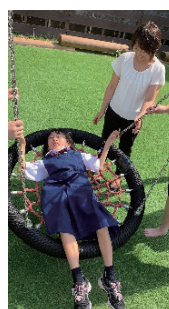


写真 20

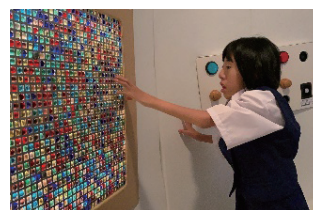


写真 21

④ 国立和美実験学校訪問

和美は小・中・高合わせて 500 人超の児童生徒が在籍する肢体不自由特別支援学校である。事前交流をした普通級の授業に肢体不自由を有する生徒が加わる形で交流した。代表生徒が書道を披露したり、日本で現在有名な曲の歌詞を配布し一緒に歌ったりした。和美の生徒からは自己紹介、台湾の名所紹介、タピオカミルクティーのプレゼントをもらった（写真 22）。また、部活動を行っている時間に見学をし、一緒にレゴで作品を作るほか、プログラミングと連動して動くレゴ作品を通して交流した（写真 23、24）。



写真 22



写真 23



写真 24

⑤ 代表生徒の感想

以下に代表生徒の感想を抜粋する。

・学校には併設されている小さなドーム型の場所もありました。そこには実際に企業が経営している売店があり、まるでオシャレなカフェのような内装で写真スポットもありました。ここでは、企業と連携しながら、学生が実際に働いています。企業の方から話を聞いたところ、学生は皆が真面目に仕事に取り組んでいて、その姿を見ていると自分の励みにもなると言っておられました。その一方で、作業を覚えるのには、人一倍時間がかかったり、仕事へのモチベーションを上げるのにも時間がかかるそうです。何回も同じ間違いを繰り返してしまいましたが、1・2年くらい経つと、普通の人と見分けがつかないぐらい仕事のスピードが速くなったり、仕事への関心が高まるそうです。

・学校見学の後、クラスに入ってミルクの石鹸づくりを体験させてもらいました。クラスの生徒と協力して、型に流し込んだり、混ぜる作業を行いました。言葉が通じなくても、「こんにちは」と挨拶してくれる生徒もいたので嬉しかったです。

・クラブ活動にも参加させて頂きました。レゴブロックで遊ぶ活動では、中国語を話されていたので私には言葉が分かりませんでしたが、身振りや手ぶりを使って作り方について優しく教えてもらいました。言葉は異なりますが、言葉以外にも伝える方法、手段を学びました。また、タブレットを使い、プログラミングを駆使して様々なロボット機器と連動させていることに驚きを感じました。

・初海外を経験したことで緊張してがんじがらめになっている性格を少しだけ改善することが出来たと思います。

⑥ 事後指導

(2) 韓国⑥事後指導の項目に同じ。

(3) 高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流

令和元年12月10日、高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流を、総合的な学習の時間において実施した。留学生との交流は今年度で14年目となる。

国際交流実行委員の生徒を中心に、9月24日から12月3日まで事前準備の時間を9回持ち、交流を計画した。10月29日にはポリコムをつないだ打ち合わせを設け、先方に企画の内容を伝えた。第1学年は11月19日に附属坂戸との交流を終えて、29日の事前準備に加わった。

今年度はシンガポール、ブラジル、ナイジェリア、中国、ペルー、フィリピン（2名）、ガーナ、マラウイ、パキスタンから10名を迎えた。教科書や本でしか知らない国が、その国の方と実際に話すことで、生徒たちにとって身近な国の一つになったように感じられた。

その後、5・6校時では体育館と調理室を使い交流した。交流のテーマは「料理（日本茶）」、「工芸（折り紙）」（写真25）、「遊び（福笑い）」（写真26）、「盆踊り」（写真27）とした。前半は3グループを留学生がローテーションで回る形で行い、最後の時間で留学生を含む全員が体育館に集合して2種類の盆踊りを一緒に踊った。いずれも生徒達は日本文化として知っているが、その文化そのものを体験したことがないという生徒も少なくなかった。例えば、「料理（お茶）」では自分でお茶を入れたことがなかったり、相手を「もてなす」という意識の大切さを改めて感じる生徒もいたりした。そのため、何度も練習を重ね、あらかじめ調べておいた情報をクイズ形式にしてプレゼンテーションに組み込み、会話を盛り上げる工夫を行った。更に、ゆっくり話すことを意識したり、和の「おもてなし」を感じてもらえるように、音楽をバックミュージックに流したりする創意工夫も見られた。

台本を作らず、即興性の高いプレゼンテーションという形はなかなか難しかったようではあるが、一緒に雰囲気を楽しみ、言葉を介さなくても心が一つになる体験ができたようである。



写真 25



写真 26



写真 27

3. 児童・生徒の変容

今年度の国際教育活動を振り返ると、国際交流充実事業も留学生との交流も、生徒が実際のコミュニケーションを通して国際的な視野を得ることができ、成功したといえる。

韓国及び台湾の特別支援学校との国際交流充実事業の代表生徒に選ばれた生徒はいずれも真面目で努力家ではあるが、こと英語でのコミュニケーションとなると一歩引いてしまうところがあった。しかし、海外で実際に英語を用いて人と触れ合ったことで、積極的にコミュニケーションを図ることの大切さを改めて感じる機会となった。また、初めて海外に車いすで海外渡航し、通訳ガイドに頼らず公共交通機関を利用してホテルやレストランへたどり着いた経験も自信につながったようである。帰国後の報告会では4人とも堂々とプレゼンテーションを行い、他生徒からの質問に答えており、その姿はよき手本、よき刺激となった。

高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流においては、韓国及び台湾交流事業の過去の参加者も積極的に計画に加わり、当日も怯まずコミュニケーションを図っていた。しかし、全体での反省では当日までに準備したことを振り返りつつも「おもてなし」の観点や心をついに

する体験が「お互いに」できたかという点まで見据えて振り返りを行うことができた。これは「英語でプレゼンテーションを事前に準備」「それを発表していた」時には前面に出てきづらかった観点であるが、「英語を活かす」形で国際交流経験が積み上がったことが見えてきた。

同じ観点で韓国及び台湾との交流を評価するなら、来年度以降はさらに質の高い事前交流、事後指導を生徒と共に模索したい。実際に海外渡航できるのは代表生徒の数名であることを鑑みると、生徒全体へ効果を及ぼす機会は事前、事後指導しかないためである。

附属久里浜特別支援学校の国際交流

1. 本校の国際教育の特徴

本校は、毎年、海外から多数の視察を受け入れている。本年度は、アジアを中心に9つの機関、団体から約120名の方々が来校され、授業や子供たちの活動の様子を実際に見てもらい、時には子供たちと一緒に遊びや活動を通して触れ合う機会となっている。

こうした海外からの視察は、本校の子供たちや学校、そして自閉症教育の実践について紹介する貴重な機会となり、感想や意見をいただくことで私たちの教育実践を進めていく上で参考になる。また、授業等の見学のみならず、依頼に応じて、本校の実践研究について講義を行ったり、授業研究会を実施したりするなどの受け入れ型の研修を行っている。教員が海外の人と交流し、文化や教育の理解を深めたり、グローバルなコミュニケーション力を高めたりしている。

2. 活動報告

(1) 受け入れ型研修

令和元年7月5日(金)：中国長沙市特殊教育学校教員研修

中国長沙市より5名の特殊教育学校教員が研修に来られた。本校の概要説明、学校見学、授業参観、質疑応答の内容で研修を行った。

学校見学・授業参観では、幼稚部の幼児が設定遊びをしている様子や、小学部の児童がことば・かず・自立活動の学習をしている様子、プールで水遊びをしている様子などを見学していただいた。また、昼食は、本校の給食を小学部の児童と一緒にランチルームで食べていただいた。研修に来られた先生方は、日本語はほとんど話すことはできなかったが、通訳の方に聞きながら同じテーブルの児童に、簡単な日本語で話し掛けたり、表情や身振りで簡単なやり取りをしたりしながら、本校の子供たちと関わり、楽しそうに一緒に給食を食べられていた。また、本校の子供たちも、教師を介して、中国の先生方に好きな食べ物を尋ねるなどして、関わっていた。

質疑応答では、日本の教育の制度や、教育課程などについて、いくつも質問が上がった。我々も中国の現場の教員と情報交換をすることを通して、日本と中国の教育制度の違いを知ったり、その中でも家庭との協力や保護者への支援など障害のある子供たちを指導する上で大切にされていることの共通事項などを知ったりすることができた。



本校の教育についての説明



小学部見学の様子

令和元年9月30日（月）：中国広東省第二師範学院教員の研修

筑波大学の裴虹教授の案内で、中国広東省第二師範学院より、6名の教員が来校し、授業見学と授業研究会、本校の自閉症教育の実践についての講義等の研修を行った。

授業見学では、小学部3年生の体育の授業を取り上げた。授業研究会では、授業者によるこれまでの授業づくりの経過や本時の授業評価を聞きながら熱心にメモを取り、積極的に詳細について質問をされていた。また、本校の自閉症教育の実践についての講義では、本校の教育課程や指導方法、指導体制についての質問や、特別支援教育の教師の資格や経験、研修制度などについて、さらに中国と日本の教育実践の類似点や相違点など、活発な意見交換を行うことができた。



授業研究会の様子



（3）海外からのお客様との交流

令和元年7月4日（木） 日系人協会見学

JICE（日本国際協力センター）より、日系人協会の研修の一環で、日系日本語学校（ブラジル、ベネズエラ、パラグアイ、アルゼンチン）の教員7名が本校を見学された。見学では特に、各教室の環境や本校で活用している教材・教具、それらを用いた指導方法について、熱心にご覧になり、質問されていた。また、小学部の児童と一緒に給食も食べ、子供たちと関わったり話をしたりして交流を深めていた。



小学部の教室の見学



教材・教具の使い方



幼稚園の教室の見学



一緒に給食

令和元年7月10日（水）韓国国立特殊教育院（KNISE）

隣接する国立特別支援教育総合研究所へ来所された、韓国国立特殊教育院の方が2名、本校を見学された。本校の教育や施設等について、幼児児童の遊ぶ様子や授業を見て頂きながら説明を行った。

幼稚部へご案内すると、プレイスペースで遊んでいたある幼児が、自ら見学者へ近付いてきて、嬉しそうに見学者の手を握り、自分の教室へと連れて行った。その幼児は教室まで見学者を連れて来ると、手を放して自分の好きなおもちゃを取りに行った。しばらく教室で子供たちの様子を見学した後、見学者が教室を出て行くと、先ほどの幼児がそれに気付いて追い掛け、再び自分から手をつないで、自分も付いて行こうとしていた。こうした様子に、見学者の方も笑顔で、韓国語で話し掛けると、その幼児も、話し掛けられている言葉の意味は分からないが、嬉しそうに声を出したり、顔を見たりして応じていた。こうしたこの幼児の姿は、初めてのことで、学級の担任も驚いていた。



自分の教師へ案内する幼児



令和元年10月2日（水）中国 教育国際交流協会

中国国際交流協会より22名の大学教授、療育機関のセンター長、幼稚園の園長、教員が来校し、学校見学を行った。校内の施設や幼児児童が活動している様子、教師と子供たち、子供同士が関わったり、やり取りしたりしている様子を大変熱心に見学されていた。見学途中には、案内をしている本校教師を見て、児童が「どうぞ。」と言って自ら見学者を自分たちの教室の方へ誘導するなどの場面もあった。また、学校紹介VTR（英語版）等をご覧になり、本校の教育や家庭との連携、地域との連携についても興味をもたれ、質問があった。



どうぞと手を引いて案内する児童



令和2年1月24日（金）

隣接する国立特別支援教育総合研究所の国際シンポジウムの開催に当たり、来日された、フィンランド教育委員会、教育カウンセラーの方が本校を訪問された。当日は、幼稚部で親子餅つき大会を行っていた。本校では日本で古くから行われている杵と臼を使って、子供たちが保護者と一緒に楽しく取り組んでいる。その場で、子供たちに海外から来たお客さんとして紹介し、子供たちの前で杵と臼を使ったお餅つきを体験していただいた。見学後には、幼稚部の子供たちや保護者がとても楽しそうにお餅つきに取り組んでいたことや、実際にお餅つきを体験したことがとても印象に残ったと話されていた。



餅つき大会の様子

5. 各附属学校のイングリッシュルーム活動

附属小学校

留学生との交流会

各学年テーマを決めて留学生交流会にのぞんだ。

- ・ 3年生 10月 11月 他国の言語・文化に触れる
- ・ 4年生 5月 7月 ハワイ交流会に向けて
- ・ 5年生 2月 3月 主体的に交流会を企画する

☆3年生

他国の文化・言語に触れるというテーマで臨んだが、子供達は期待以上に積極的な取り組みができていた。体を動かしたゲームや自分たちで考えた日本の紹介をする中で、覚えてたの英語で一生懸命話す姿があちこちで見られた。



留学生の方々も、前年度の方々は何を準備すればよいか伝えてくださるようである。そのため、より前向きに参加しようとする姿が見られた。



☆4年生

海外へ行く準備の意味も兼ねているので、積極的に話しかけようとしたり、家でも準備をして交流会に参加したりする姿が多く見られた。

☆5年生

自分たちの企画で交流会を行うことができる。英語力は、低学年から格段に進歩しているというわけではないが、異文化交流に対しての壁は感じていないようである。

附属中学校 イングリッシュルームの活用報告

① 基本的には例年通り実施

- ・前期は週1回（水曜日）、後期は週2回（火・水曜日）、昼休みと放課後に開設する。
- ・開室中は通常授業の Team-teaching の時間担当の ALT 2 名が常駐する。
- ・利用時間は1 枠 15 分交代、利用人数は1 枠 2 名までを原則とする。
- ・生徒は部屋の扉にある表に名前を記入して予約する。
- ・夏休みまでは3年生を2名ずつ割りふり、全員に体験させる。来年度の継続方法を検討中。
- ・アメリカ短期留学プログラム参加希望者は年度内で2回以上利用していることを応募条件にする。
- ・来室した生徒を毎週記録しておく。
- ・1年生の利用は後期からとする。
- ・アメリカ留学短期プログラムの写真や参加者レポート、その他国際関係のチラシやポスターを部屋の外に展示している。



今年度も多くの生徒が利用した。アメリカ短期留学プログラム参加者決定後は、彼らの利用が増えたが、それ以外の生徒もよく来室した。

後期からは1年生の参加も増えた。授業での発表活動の練習やライティングの添削に訪れる生徒もあり、活用の幅が広がっている。

今年度は例年に比べ、来室予約を忘れてしまう生徒の数がやや多かった。各クラスの英語係に毎回のリマインドを依頼するなどの対策を講じ、改善が見られた。



② 生徒の感想

- ・日頃から来室していると、いざ英語を使う場面になっても、緊張せずに言いたいことを言えるようになってきた。初めてのときは英語で話すのに抵抗があったが、一度来ると楽しくてハマる！当初は言う内容をノートに書いたりしたが、今では自然な会話を楽しめるようになってきた。

（1年）

- ・授業で習ったことを実際に使ってみて、どれくらい身につけているのか確かめたくて来ている。英語で瞬時に反応するのは難しいが、知っている表現を組み合わせで話すのが上達してきたと思う。将来の夢や読んだ本から学んだことなど深い話になることもあるが、先生や友達に助けってもらいながら伝えられると、自信になる。

（1年）

- ・最初は友達に誘われたが、おもしろくてよく来るようになった。先生の経験談を聞くのも楽しいし、勉強になる。以前は TT の授業や英語での発表が辛かったが、毎週来ていると、英語を使うことが楽しくなり、今は TT の授業が苦にならない。身近に英語で話せる人がいるのはいいと思う。

（2年）

- ・習っていないことでも話しているうちに、簡単な表現や雰囲気はかなり伝わる。最初は聞き取れず難しかったが、わかる部分をつなぎ合わせれば何とか話せる。授業でわからないことも、ここでもくり返し話すうちにわかるようになってきた。話題を決めていなくても、先生がいろいろな話題をふってくれるので大丈夫。全員に来室を割りふるのは2年生でもよいのではないかなと思う。

（2年）

附属学校のイングリッシュルーム活動について

(1) 附属高等学校

① 活動内容

2013 度から始まった「イングリッシュルーム」は、今年度 7 年目を迎えた。前期は毎週木曜日の放課後と金曜日の午後に、後期は金曜日の午後、マクレイ先生（附属中学校のイングリッシュルームも担当）にお越しいただいた。前期木曜日の放課後は、各国際交流プログラムに参加する生徒に対して、英語による研修を実施した。前期および後期の金曜日の午後は、昼休み、午後（授業のない 3 年生対象）、そして放課後の 3 部に分けて実施した。1 コマ 20 分に設定し、事前予約を含めた先着順で生徒が自主的に参加した。目的や学年を問わず幅広く誰でも参加できる場として設定している点が大事であると考えている。今年度「イングリッシュルーム」を活用した生徒の目的は以下のとおりである。多種多様な用途で活用されていることが理解できる。

- ✓ 国際交流プログラムへの参加者選考へ向けた準備（1 年生）
- ✓ 英語表現 I の授業で行うスピーチの原稿の添削（1 年生）
- ✓ 海外留学や国際交流プログラムへの参加が決定した生徒の準備（1 ～ 2 年生）
- ✓ 大学入試に向けた英語のエッセイの添削や英語面接の指導（3 年生）
- ✓ 英語検定試験等の資格試験対策（1 ～ 3 年生）
- ✓ 英語の運用能力を伸ばすため（1 ～ 3 年生）

② 児童生徒の感想

個別にじっくりと対応してくれるため、エッセイの添削やスピーチの準備などを必要としている生徒には非常に好評であった。国際交流プログラムに参加する生徒は、英語運用能力のみでなく幅広い話題に対応する知識や柔軟性が必要である。このため、マクレイ先生は毎回異なるトピックを提示し、楽しくも時折社会性の高い題材に鋭く切り込んでくださった。参加した生徒達からは、「授業内だけでは英語を話す時間が限られているので、英語をアウトプットする良い機会になっている」、「短期留学に行くための準備として役立っている」、「カジュアルな話題から政治、経済、文化など様々な話題について英語で伝える良い機会になった」、「入試の英語面接に向けて練習ができ、自信になった」という感想があった。



③ 今後へ向けて

「イングリッシュルーム」については、ポスターを掲示することで案内をしている。一度利用した生徒がリピーターになることも少なくなく、また年間を通してさまざまな需要を満たすために多くの生徒が利用し、特に昼休みは予約が埋まる状態も少なくなかった。（R2.2.6 現在イングリッシュルームに事前予約をして参加した延べ人数は 47 人）

昨今、英語の発信力が求められることが多い。授業内でも練習する機会はあるが、より目標とするレベルに達するためには練習量が足りない、と感じる生徒もいるはずである。その点、授業外でも生徒が個々の目的に合わせて英語を使用する場があることがとても大切であり、「イングリッシュルーム」がもたらす役割はとても大きいと言える。

English Room：日常活動および海外研究発表とその先の支援

1. 活動報告

本校のイングリッシュ・ルームは2013年にスタートした。月に2回ほど、放課後3:30～5:00に東大大学院の留学生に来てもらい、それぞれのご専門について語ってもらったり、語学部が英語イベントのコーチを受けたりしている。(もちろん、希望者が参加することも可能である)

また、台湾・釜山への生徒派遣をする前に、現地で発表する研究プレゼンテーションの原稿チェックやプレゼン・コーチもしていただいている。

中3のテーマ学習や高2の課題研究のScience Dialogue(講座の前半では科学系研究者のプレゼンを伺い質疑応答、後半では自分のテーマを決めて英語でプレゼン活動)。その際のコーチや、最後のプレゼンテーション大会のコメンテーターもしていただいている。登録されている方が6～7名おり、それぞれがプレゼン経験も豊富で、しかも英語を第2外国語としている方が多いので、学習者の英語学習の苦勞も心得ており、英語のティーム・ティーチングでネイティブの方から教わるのとは違った利点もある。

2. 生徒の感想

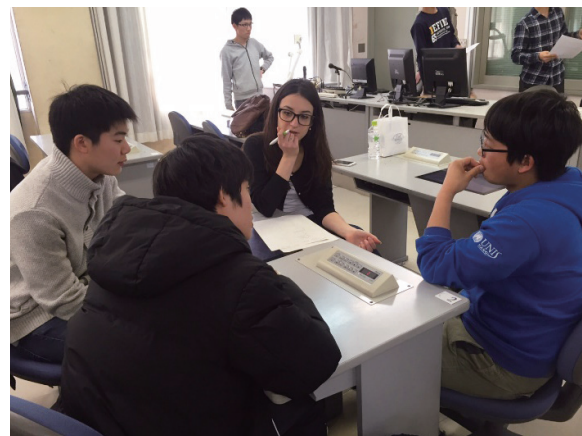
今回の釜山派遣生徒のプレゼンテーション・リハーサルでイングリッシュ・ルームの講師の方々の指導を受けた、生徒たちの感想をあげる：

- ・例えば一通り発表してみて説明が過剰な所や足りない所などを指摘してもらえたし、そのトピックに関する事前知識が全くない人が聞いても飽きない・難しくない物であるかどうかなどが確認できました。スライドをもっとこうした方がいいといったことや、発表の仕方自体(アイコンタクト、ジェスチャー、イントネーションなど)にも助言をいただきました。
- ・全体を通しては、基本的なものから応用的なものに至るまで、幅広くご指摘頂きました。

中でも特に有り難かったのは、説明が英語として分かりにくいところ(英語の文法的には正しく、また日本人が読むには違和感がないが、英語話者には不自然に感じられるところ)を丁寧に指摘して下さったことです。それから、言語学の専門用語などの慣れない単語についても、アクセントが間違っているところなどを指摘して頂くことができ、直前に完成した原稿でありながらも大きな進捗を得られました。他にも英語話者ならではの指摘をたくさん頂くことができ、有意義な時間を過ごせたと思います。



プレゼンの練習を見ていただく



テーマについてアドバイスを受ける

(文責：研究部・国際交流担当 八宮孝夫)

楽しい英語活動と WWL 校としての活動の両立を目指して 2019-2020

① 活動報告

2013 年より、本校ではイングリッシュルームの活動として、昼食時の English Lunch（イングリッシュランチ）と、放課後の English Salon（イングリッシュサロン）を実施している。

English Lunch …… 12：30 ～ 13：10 水曜日 40 分

English Salon …… 15：40 ～ 17：40 水曜日 120 分



毎年恒例のハロウィンパーティー

English Lunch では、ALT と昼食をとりながら英語に親しむ機会を設けている。生徒も教員も各自弁当を持参し、会話のテーマは特に決めずに自由に話している。放課後の English Salon では、急増する英語検定などの外部英語検定試験へ挑戦する生徒の需要に応えるべく、口頭試問に向けた練習の機会を設けているほか、ハロウィンやクリスマスなどの季節に応じた体験型の行事を開催し、楽しみながら生徒の異文化理解が進むよう努めている。

総合学科であることの強みを活かし、農業科や家庭科といった専門教科の施設を借りて海外の食文化について調理を通して学ぶ活動なども行っているのが特徴である。

SGH 事業に引き続き、WWL にも採択された本校では、本校主催の高校生国際 ESD シンポジウムや研究大会をはじめ、学校外でも生徒が英語でのプレゼンテーションに取り組む機会が多くある。そのため、English Salon では、英語での発表資料の作成や発表指導に注力している。また、本校には海外からの訪問者も多いことから、外国人生徒も交えて交流会を開くなど、異文化交流の場としても機能している。

一方で課題も見られる。特に放課後の時間帯に開催される English Salon は、7 時間目の授業や部活動、委員会活動と重なってしまうため、希望しても参加できない生徒が少なからずおり、参加者が固定化する傾向も見られる。また、先述の通り、英文報告書やプレゼンテーションなどが、多くの授業やプロジェクトで生徒に課されており、生徒にとって英語を学ぶ絶好のチャンスであるが、なかなか校内で情報共有ができておらず、せっかく英語母語話者に添削・指導をしてもらえる機会があるにも関わらず、活かしきれない場面が見られる。より効果的なイングリッシュルームの運営ができるよう、校内の国際教育推進委員会で更に検討して行きたい。



研究大会で英語を用いて卒業研究の発表をする生徒。イングリッシュルームでの指導が欠かせない

② 児童生徒の感想

- ・インターネットで話題になった英語表現について、ランチを食べながらアットホームに由来を聞くことができ、嬉しかった。(3 年男子)
 - ・英語の授業の課題のスク립トを添削してもらい、より良い表現を知り、使うことができた。(3 年男子)
 - ・校外の英語でのプログラムの課題に取り組む際、アドバイスを多くもらえたのが良かった。(2 年女子)
 - ・放課後は部活や課題もあって忙しいので、行きたいと思っても行けない時があるのが残念。(1 年女子)
- (文責：福田美紀)

附属視覚特別支援学校のイングリッシュルーム活動

【小学部】

① 活動報告

○ Blueberry Club (小学部1・2年生)：参加者は計7名で、月2回の割合で月曜日の放課後に活動した。1学期はまず英語に慣れるため、日々の生活用語や挨拶の会話、「上下左右」など基本の位置関係を「体の部位」を通して学ぶなど、英米の伝承童謡やゲームを中心に、「英語と日本語のリズムや感じの違い」に触れた。2学期以降は、月毎のテーマに沿って、「異文化体験」をしながら、英語の語彙を増やし、簡単なQ & Aができるように学んでいった。

9月：敬老の日 家族や親族の言い方や年齢を言うための大きな数の学習をして、年齢に関するQ & Aを練習する

10月：ハロウィーン 「おまじない」を学び、仮装をしてペンギン先生差し入れのアメリカの季節のお菓子を使って飴もらいと渡す体験活動

11月：感謝祭 野菜果物の名前を学習し horn of plenty に並べる。衣装を着けて Baby Turkey Chant に合わせて役毎に台詞を言う

12月：クリスマス 「キリスト誕生の馬小屋」のアドベントカレンダーに沿って、日付の言い方(序数)、クリスマスの歌や物語の学習

1月：お正月 「干支の動物」を学習し、日本語と英語の鳴き声を楽しみ、友達同士で干支を聞きあい、鳴き声で答えたりする

2月：節分 既習の「形」を使って鬼のお面作製。英語で「豆まき」

3月：思い出遊び 1年間の感想を聞きながら、楽しかった歌やゲームを復習する活動

○ Coconut Club (3～5年生)：参加者は計10名で、アルファベット文字に触れている児童とそうでない児童の同時活動となったため、指導に種々工夫が必要となった。それぞれのグループに適したプラスチック製のアルファベット文字や点字文字カードの視覚教材、Phonics Jingle、CDなど音声教材を用意し、補助教員と手分けして指導した。2学期には完成した絵辞典“My Book of ABC”を使って、全員一緒に新しい種々の「頭文字当てゲーム」を楽しんだ。

語彙増やし：ぷっくりシール、使用済みの点字カレンダーから曜日や月の名前を切り取って裏に両面テープを貼り、「頭文字当てゲーム」で相当文字のページに貼り付ける

買い物ごっこ：プラスチック製の野菜や果物を「レターマネー」で買う(例：バナナは“B yen.” キャベツは“C yen.”と口頭で早い者勝ちで買い、トレイにためる)

旅行のお仕度：Aから順に America, Brazil, Canada … と行く国を決め、その国の頭文字で始まる物をかばんに入れて旅に出る。中に入れる物は、頭文字さえ合っていれば種類も大きさも問わず、担当の児童が順に加えていくチェンゲーム。(例：S1 “I go to Brazil with a banana in my bag.” S2 “I go to Brazil with a banana and a ball in my bag.”) このゲームは本校クラブ活動初めての試みであったが、大変な人気で盛り上がった。普段はおとなしい3年生男子が“… with ビール in my bag.”と言って一同大笑い。それも勿論OKで、「蜂(bee) + r = beer ビヤー」としっかり学びもした。

このクラブのメンバーは、伝承童謡・色・数・カレンダーの言い方から天候などのQ & Aまで反応が非常に自然で、「文字と音」の学習も進み、英語の発信力と共に、時には騒がしくらいに楽しみながら「実力」がついてきたと思われる。保護者からも「毎回『今日これ習ったよ』と教えてくれる」との報告がある。



○ Kids'Club (1・2年生 児童活動の一環としての「子ども会」)：月1回の活動。10名のうち8名は Blueberry Club のメンバーのため、月毎の行事を詳しく体験させている。

(文責：股野儼子・中村里津子)

【中学部】

① 活動報告

中学部では、希望者を対象に月曜日の放課後 15：20～15：50 に実施した。普段授業でも接している ALT のジェーンさんに講師をお願いしている。英語力の差を考慮し、学年別の実施とした。できるだけ生徒が英語だけで会話することを目標にしつつ、適宜日本人英語教師が助けながら進めた。例年は、時期に応じたテーマについて話す活動が多いが、今年度は回数が少なく、そこまで幅広いテーマを扱えなかった。

② 生徒の感想

〈1年生〉

- ・ジェーン先生が一人ずつ当てて質問してくれたので、答えやすかった。
- ・ただ話すのではなく、テーマが決められていて良かった。
- ・イングリッシュルームは、楽しみながら英語の学習ができていいなと思いました。
- ・みんなが考えた単語を入れて、元の文とは違う文ができるゲームがおもしろかったです。

〈2年生〉

- ・私は、イングリッシュルームに参加して、ジェーン先生と英語でたくさん会話をするのができ、とても楽しかったです。普段の授業で習った文法や単語がどのような場面で活用できるのかが少しずつわかってきました。また、文化祭や修学旅行など、身近なテーマについて英語で会話することができて楽しかったです。英会話は、ネイティブの人と話す経験をたくさん積んでいくことで上達すると思うので、これからも積極的に参加したいと思います。

〈3年生〉

- ・私は、英語を書くことよりも話すことの方が苦手なので、フリートークができたのはとても良い経験になりました。毎回、「こういう表現の仕方があるのか」と驚いています。教科書だけではわからないことなども学ぶことができました。フリートークの中で、日本とは違う海外の伝統を知ることができておもしろかったです。3年間イングリッシュルームに出ることができて良かったです。
- ・授業とは少し違う雰囲気、コミュニケーションをたくさん取れるのが良い点だと思います。また、英語での言い方が分からないものについて、知っている語句を用いて説明し、先生に伝わったときは、とても達成感を感じます。もう少し時間を長く取ってもらえると、たくさんすることについて話せると思います。
- ・授業以外で英語の応用ができるので良い機会だと思った。会話だと発音が聞きとれなくて大変だったが、イングリッシュルームで練習することができた。
- ・短い間で質問に対する応答を考え、英語にして答えなければならないので、瞬発力がつくと思います。
- ・授業時間外で英語を使って自分たちの普段の生活や趣味などを話せて、話しやすく、ALT の先生とも交流を深められる良い機会だと思う。
- ・あまり外国の人とは話す機会がないので、すごく勉強になりました。

(文責：片山 翔)

【高等部】

① 活動報告

高等部では、今年度も5月から3月まで、イングリッシュルーム活動を実施した。具体的には1学期に合計5回、東京外国語大学に留学中のマレーシア人を講師に招き、火曜日の放課後の約2時間、生徒が英語だけでコミュニケーションする時間を設けた。各学年とも全員がそれぞれ6分ずつの個別の面談形式で行った。ところが、彼女が7月に帰国後、次の講師を探すのに大変苦勞し、12月まではイングリッシュルームが開催できないという事態に陥った。1月からはニュージーランド人に講師に来てもらうことができ、イングリッシュルーム活動を再開した。1月からは学年を2分割したクラスごとに希望者を募り、約40分のグループでの英会話の機会を設けた。

② 生徒の感想

- ・キーさんとのマンツーマンでのお話は、彼女が多趣味だったこともあり、自分の好きなことに関するお話を英語でたくさん話せた。また、アベッシュさんとのグループトークでは、軽い質問をしてから、1人ずつ1分間プレゼンをして、そこから話を広げていくという、新しい方法で行った。イングリッシュルームは、笑いあり学びあり、和気あいあい楽しく英会話ができたので、非常によかった。
- ・人と英語で話す訓練になりそうだ。もっと回数を増やしてほしい。
- ・初めは緊張しすぎていて、落ち着いて上手く話せなかったのが心残りです。会話をするときはあまり考えすぎず、自分が使える文法の範囲で、とにかく黙ってしまうことがないように、一生懸命相手に伝えようとするのが大切だと感じました。
- ・せっかく英語力が身に付く良い機会だと感じたので、できれば回数を増やしてほしい。私は、もともと英語は苦手なのだが、ジェスチャーや単語を並べて何とか伝えようすると、意外と伝わるんだなあと感じた。これは、他国との交流の際に、積極的に話をし、深め合うときに役立つと思う。
- ・自分の好きな話ができて少し楽しかった。
- ・普段あまりできない、一対一で英語で会話するという体験ができ、とても勉強になった。最初は緊張したが、話していくうちに打ち解けることができた。またやりたいと思えた。
- ・私は、英語を話さなければならないという閉鎖空間の中で、出てこない単語を頑張って説明すること、怖がらずに思ったことを言うことなどに取り組めたと思う。
- ・自然な感じで英語の練習ができて、楽しかった。
- ・好きなことを英語で話すことができ、とても勉強になりました。もっと回数を増やしてほしいです。
- ・私はこのイングリッシュルームを通して、英語を話す力を伸ばすことができたように感じます。英語を話す場はとても少なく、このような機会自体が貴重だと感じています。今後、より多くの機会を持てると良いと考えています。
- ・今年度も学校で英会話をする機会をいただき、とてもうれしかったです。特に、趣味の話題で盛り上がり、表現のミスを修正してもらいながら即興でスピーチしたりしたことによって、英語で話す力が向上したように感じました。私は、もうすぐ本校を卒業するため、イングリッシュルームに参加できなくなってしまうのですが、このプロジェクトが来年度も続いていると嬉しいです。ありがとうございました。

(文責：宇野和博)

イングリッシュルーム活動

小学部、高等部普通科、高等部専攻科はイアン先生を、中学部は英語の授業でもお世話になっているコリン先生を講師として招き、各部毎イングリッシュルームを実施した。

1. 小学部

小学部では、イングリッシュルームを、「聴覚障害児にとって重要な言語学習の機会」と捉え、以下の目標で活動を行った。

①講師と全学年の児童との交流を深める。

②3、4学年の児童を対象にゲームややり取りを通じて英語の楽しさを味あわせる。

①に関する活動は、計2回行った。講師の出身地や好きなものなどの紹介の後、色の名前を教えていただいたり、児童からの質問に答えていただいたりした。英語の発音の特徴を体の動きを使いながら示していただいたので、聴覚障害を有する児童にとっては発音の特徴が捉えやすくなると同時に、興味を持つことができ、楽しく有意義な活動となった。活動が終わっても多くの児童が講師を取り囲み、離れようとしなない姿からは、「交流を深める」という目標が十分に達成できたと考えている。

②に関する活動は、学年毎に計5回ずつ実施した。講師には、3、4年生とのゲームや体を使った表現活動に積極的に参加していただき、楽しい活動となった。また、回を重ねる度に児童の意欲も高まり、英語で通じ合えたことを喜ぶ児童の様子が多く見られた。

児童の感想としては、

「ゲームと一緒にできて楽しかった」

「先生と一緒に勉強できて楽しかった」

「また一緒に勉強したい」などが聞かれた。

講師との交流活動は、3、4年生児童の意欲を高めると同時に学習の機会を提供してくれる貴重な時間となった。活動の中で、やり取りの必要性や機会が生じることとなり、児童には工夫が求められたり、これまでの外国語活動で学んだ表現を活用する機会になったりする。実際に、児童は覚えて慣れた英語表現で積極的に答えることができたのは、外国語活動との有機的な関連性を意識した活動計画や準備を行ったためである。

2. 中学部

今年度もこれまで同様、昼食から昼休みにかけての時間に12回開設した。生徒全員に講師と話す機会を保障し、もっと話したい生徒達がさらに交流できるように、前半の昼食時間は学年を指定し、該当学年の生徒は全員参加とし、後半の昼休みの時間はどの学年の生徒でも自由に参加できるようにしている。

前半の時間は13～14名の生徒が参加しているので、よりコミュニケーションをスムーズにするために、今年度からはコリン先生にタブレットを使用していただき、タブレットに書いた英文が大型ディスプレイに表示されるようにした。生徒達が書いた答えに対しても生徒のところまで移動する必要がなくなり、瞬時に修正することができるようになった。生徒達からもタブレットの使用は大変好評だったので、文字の太さの設定等、細かい点を改善しながら視覚的な情報を有効に活用していきたい。

3. 高等部普通科

令和元年度のイングリッシュルームは延べ8回昼休みに実施した。自己紹介、学校生活、講師の自国の文化（クリスマスなど）、2020年の目標等について、その内容に関する質疑応答を英語で行う形式で進めた。トピックスについては事前に確認していたが、生徒と会話が弾むときは、自然な流れの中で自由に会話を進めることにした。生徒は聴覚に障害があるため、口頭だけでは英会話は難しい

が、できるだけ教員の通訳を介せずにコミュニケーションをとるように促した。具体的な手段として、講師の発話は音声を変換するアプリを用いてコミュニケーション内容を英語の文字でスクリーン上に大きく投影した。生徒の質問は直接、口頭で行うか、筆談アプリ等を使用して文字提示をしながら行った。講師が生徒の質問を復唱することで、音声認識され、英語の文字をスクリーン上に投影することができた。このように音声を変換するアプリを活用することで、聴覚障害を有する複数の生徒と講師との自由な会話が成立するようになった。講師が生徒の興味を引く内容を考えて発話したり、絵を描いたり、ジェスチャーを使ったりして、楽しい時間にくれた。高等部普通科の生徒は委員会活動や部活動などの特別活動も多いため、昼休みの参加が難しい生徒もいる。しかし、イングリッシュルームにはほぼ毎回参加する生徒もあり、貴重な時間になっている。生徒の感想で多かったのは、「会話することが楽しい。もっと話す機会を増やしてほしい。」であった。

4. 高等部専攻科（造形芸術科 ビジネス情報科 歯科技工科）

専攻科では今年度、講師と生徒との交流時間の確保のため、造形芸術科・ビジネス情報科と歯科技工科の2つに分けて、それぞれ5回ずつ実施した。

造形芸術科・ビジネス情報科は、第1回目と第2回目では生徒があらかじめ用意した自己紹介を通して、お互いの生活や英語表現の工夫についてのやり取りが行われた。交流を重ねながら生徒の興味・関心がある題材を抜き出し、第3回目以降は講師の出身地であるアメリカの文化などについてのお話や、生徒から英語で質問をする交流が行われた。音声を変換するアプリの使用による補助に加え、講師が積極的に日本語の手話についての質問を生徒に投げかけることで、講師と生徒の交流をより深めることができた。教えていただいたことは生徒にとって初めて見聞きすることばかりで、毎回のイングリッシュルームの時間をとても楽しんでいる様子が見られた。生徒からの外国の社会や文化についての関心を丁寧に取り上げていただけたこともあり、英語学習やコミュニケーションに対する意欲の向上が得られた。

歯科技工科は、第1回目と第2回目では自己紹介や興味・関心について英語で情報交換を行い、第3回目以降は、英語の授業で学んだ歯科に関する英語を使った会話にチャレンジした。具体的には、入れ歯や金属の詰め物の作り方を紹介したり、講師の指の模型や指輪を作ったりした。一連のやり取りに使用された表現は、あらかじめ生徒自身が考え、英作文を行ったものである。とっさのやり取りの際も、自身の英語の知識を駆使して講師に言いたい内容を伝えることができたときは、とても満足そうな表情を浮かべており、その喜びは周りにも伝わってきた。学んだ英語を実際に使う機会は、生徒にとって非常に実りの多い経験だったようで、終了後「先生と英語でおしゃべりができて良かった。特に、英語で好きな食べ物について話したりする時間はとても楽しかった。元々は英語が苦手だったけど、もっと話したいと思った。高校生の時に、もっと英語を頑張っておけばよかった。」という感想が得られた。

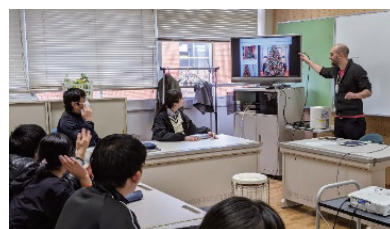
昨年度のイングリッシュルームでは補助教員によるPCを使った英語の文字による情報保障を実施したところ、講師と生徒の会話の内容が深まったことから、今年度も文字による情報保障を行った。手法としては、音声認識専用無線マイクと音声を変換するアプリを用いて、講師の英語による音声を直接文字化して表示した。近年の音声認識技術の向上により、また、講師がネイティブスピーカーであったこともあり、高い精度で音声通りの英語の文字が表示できた。生徒たちにとっても、英語でのやりとりを楽しめる非常に有意義な時間になったのではないかと感じた。



小学部の様子



高等部普通科の様子



高等部専攻科の様子

知的障害特別支援学校におけるイングリッシュルーム活動

① 中学部の ALT を活用した英語学習

大塚特別支援学校では、ALT（Assistant Language Teacher：外国語指導助手）と共同して英語の授業を年間で10回行っている。中学部の生徒を対象とした授業では、英語での挨拶から始まり、体調の確認や今日の天気、日付や曜日など生徒たちとのやりとりがリズムミカルに進んでいく。天気の学習活動では、生徒たちは天気のイラストを頼りに、情報の視覚化（イメージ）、身振りによる動作、発声、の3つを同時に捉えながら学習をしている。学習には達成感があり、生徒たちはいつも導入時を期待し、楽しみにしている場面である。今年度はハロウィンやクリスマス、干支などの行事を取り入れた学習も展開された。9回目の授業では、新しい友達に出会ったときの場面で、「Hello, my name is ○○.」、「How are you?」、「I'm fine thank you. And you?」、「I'm fine, too.」、「Bye, Bye!」等、英語での会話を生徒同士で発表することができた。周りの生徒や教員からは大きな拍手が送られ「すご〜い」「次は僕が発表する」など生徒から積極的に授業に参加しようとする姿が見られた。



② 小学部の ALT を活用した英語学習

今年度、新たな試みとして、小学部の児童を対象に、ALTによる英語の体験授業を行った。授業は英語のみで行われ、挨拶、自己紹介、今日の天気、起立・着席の指示理解、色の名称、自分の好きな色、数詞、『ABCの歌』など充実した学習内容であった。ALTは、幅広い発達段階にある児童の個別の教育的ニーズに配慮し、イラストカード、名札、身振り、歌などの手立てを用いて、児童の発話や行動での表出と理解を促した。児童らは、ALTの発する言葉や身振りに注意深く視線を向け、発話や行動を模倣する様子が見られた。ALTに好きな色を尋ねられた児童が「I like pink!」などと嬉しそうに答える姿が見られた。これらの成果をふまえて、来年度も、継続していきたいと考える。



児童生徒の主体的な学習を引き出すイングリッシュルーム

① 活動報告

3名の外国人講師が、それぞれ小学部、中学部、高等部の学部ごとに設定された部屋で待機し、児童生徒のニーズに対応する形で実施している。小学部は学校行事や放課後に実施される各種検定等と重ならない限り、毎週木金の2回行い、そのうち木曜は午前授業で終わる低学年向けに1時間と放課後の1時間、計2時間で開催している。中学部は金曜、高等部は木曜、いずれも放課後の1時間で、月平均2～3回開催している。しかしながら、講師の都合や学校行事、各種検定等との重なりを回避するため、金曜開催が難しいことが多く、中高合同で開催することにより、生徒がイングリッシュルームに参加する機会の確保に努めている。今年度からは小学部から中学部、高等部は中学部にそれぞれ流動的に参加可能とすることで機会の更なる確保を図った。(写真 28、29) これらの活動内容や進め方は、各担当者がその場に集まった児童生徒の実態や英語の学習状況によって設定しているため様々である。

小学部では、歌やゲームを通じてコミュニケーションを取る際に必要な単語（曜日、月、天気、色、動物、数、食べ物、体の部位など）や表現（挨拶、自己紹介、好きなもの、できることなど）に慣れ親しんでいる。また、ハロウィーンパーティやクリスマスなど英語圏の文化に触れるイベントを行い、保護者も交えた交流を行っている。

中学部では、生徒が知っている単語や表現を実践的に用いることができるような活動内容を計画している。その際、普段の授業とは違い、ゲーム感覚も取り入れながら楽しく英会話を行っている。

高等部では、「日本語（外来語）と英語の違い」、「英語話者の中にもある地域ごとのアクセントの違いや方言」などの文化の違いを紹介することで生徒の興味・関心の幅を広げている。ICTを活用し、音と綴りの法則性を学んだり、言葉（単語）の成り立ちを聞いたりという活動も行うこともある。全体的に、話題の幅の自由度が高く、新たな表現や日常に即した英語の知識を吸収しながら英会話を楽しんでいる。

どの学部においても、児童生徒はイングリッシュルームを楽しんでおり、積極的に活動に取り組んでいる。また、ICTなどを活用し、実際に目で見、耳で聞いて身近に感じながら実践的な英語に触れることができている。そして、英語力だけでなく、コミュニケーションをとろうとする態度や表現しようとする意欲を高めている。この点において、イングリッシュルームは、本校の国際教育活動を支える大きな役割を果たしていると考えられる。



写真 28



写真 29

今回、児童生徒は流動的な参加を可能とすることで英語の関心を高めることができたようである。また児童生徒は、イングリッシュルームに参加することに関して、「楽しく英語を学べる」や「英語が身近になる」という感覚を抱いている。また、その場を楽しむだけでなく、普段の生活の中で、イングリッシュルームで吸収した知識を積極的に用いているようである。特に中高生は普段の英語の授業や海外交流、高等部内で行われる国際交流で率先して交流しようという気持ちが生まれるきっかけになっている。

昨年度は、回数の確保のために中高合同の回数を増やした結果として習熟度の差が会話に表れており、アンケートに「中高 ER は嫌いじゃない・・・ちょっと難しいです」というような中学生からの回答があった。今年度からは児童生徒の習熟度に応じた参加ができるような運営を考え、各学部を行き来できるようにした。児童にとっては中学部のイングリッシュルームで行われている活動は刺激となるようで、小学部のイングリッシュルームが開催されず中学部が開催されているときは中学部へ参加する児童も多かった。中学部の生徒にとっては、英語を「学ぶ」立場だけでなく小学部の児童へ「伝える」立場も経験できた。イングリッシュルームは、英語の得手不得手にかかわらず「もっと英語を知りたい・使いたい」と児童生徒自らが感じることができ、英語を身近に楽しむ場であることを第一に考え、そこから英語学習に取り組む姿勢を育成し、その他の国際教育活動にもつなげていきたいと考える。

6. おわりに

附属学校の国際教育の目指すものは

附属学校国際教育推進委員会副委員長 濱 本 悟 志

「報告書（第11集）」を刊行し、お届けすることができました。筑波大学は11の附属学校を有し、そこでは幼稚園の幼児から高等部専攻科の学生まで幅広い年齢の子供たちが学んでいます。この報告書を通して、学校種や対象年齢に応じた特色あるプログラムをお伝えし、少しでも今後の国際交流やグローバル人材の育成にお役に立ちたいと考えています。

筑波大学附属学校群では、第2期中期目標・中期計画（平成22～27年度）の策定に先立ち、「先導的教育」「国際教育」「教師教育」の3つの拠点構想を立ち上げ、現在まで進めてきました。第3期中期目標・中期計画（平成28～令和3年度）では、この3拠点構想を基盤に筑波型のグローバル人材育成システムとインクルーシブ教育システムの構築を目指しています。どちらも“境界を越えて”を合言葉に、環境や文化の異なる者同士の交流を通して、互いの個性を尊重し能力を高め合う教育活動を推進しています。

グローバル人材育成の観点では、平成26～30年度に附属高等学校と附属坂戸高等学校がSGH校の指定を受け、附属駒場高等学校のSSH研究開発と併せて、国際教育を推進する様々なプログラムを開発してきました。そして、平成31年度（令和元年度）より文部科学省のWWL（ワールド・ワイド、ラーニング）コンソーシアム構築支援事業として、新たな国際教育に取り組むことになりました。いままでのような学校単位での個別な取組ではなく、地方自治体の教育委員会あるいは国際展開力のある大学が組織の核となり、複数の国内外の高等学校、管理機関である大学の関係部署、国際教育機関、賛同する企業等が連携し、グローバル人材育成を推進する新たな事業です。平成31年度（令和元年度）は10団体の取組が採択され、その1つが附属坂戸高等学校を拠点校とする筑波大学の育成システムです。5つの柱として「①国内外でのフィールドワークを取り入れた探究型カリキュラムの構築」「②高大連携による高度な学習環境の整備」「③拠点校と連携校による海外合同フィールドワークの開発」「④筑波大学の特色を活かしたオリンピック・パラリンピック教育とインクルーシブ教育の推進と発信」「⑤以上の成果の発信と共有を目指した高校生国際会議の開催」を設定し、いま取り組んでいます。

現在の日本を取り巻く環境には厳しいものがあります。それは、少子高齢化とそれによる労働人口の減少であり、経済大国を標榜し推進してきた国際戦略を大きく方向転換しなければなりません。一方で、国際社会の一員として地球規模課題の解決に寄与する必要があります。Society5.0では、経済のグローバル化、国際的な競争の激化、富の集中や地域間の不平等、エネルギーや温室効果ガス等の地球規模の課題などを取り上げると共に、IoT、ロボット、人工知能（AI）、ビッグデータといった社会の在り方に影響を及ぼす新技術への積極的な対応が挙げられています。これを受け、産業界からは次世代を担うイノベティブなグローバル人材の育成が求められています。

これらの社会的なニーズに応えながら、国立大学法人の附属は次世代の人材を育成する新たな教育課程や実践プログラムを開発するミッションを背負っています。環境や文化の異なる海外の人々と協働して国際的社会問題に取り組み、問題提起から解決に至る過程でリーダーシップ及びフォロアーシップを発揮できる人材の育成が必要です。個々の附属学校が全国のセンター的な存在として先導的な教育活動を開発するとともに、黒姫高原や三浦海岸の共同生活やWWL事業での高等部による海外合同フィールドワークに代表される附属学校群としての共同開発を推進し、国内外への発信と共有を目指していきたいと考えています。

(資料) 附属学校の国際交流協定締結状況

項目 学校名	締結相手 (国名、機関名)	協定締結日	現締結期間	交流の分野	締結の目的	締結の経緯
附属小学校	光州松源初等学校	2016.10.11	2016.10.11～ 2019.10.10	教員同士の授業技術 の交流		
附属中学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属 高校	2006.12.1	2011.4.28～ 2016.4.27	中等教育全般	中学校のレベルで、生徒 の相互交流の意義とその 可能性を考慮したため	北京師範大学と筑波大学との交流を目的と して結ばれた協定のなかで、北京師範大学 第二附属高校と筑波大学附属中・高等学校 及び附属駒場中・高等学校も付随して結ば れたもの。
附属高等学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属 高校	2006.12.1	2011.4.28～ 2016.4.27	教育に関する分野	相互の学校交流と生徒間 交流	筑波大学が北京師範大学と交流協定を結ん だ際、附属高等学校も交流組織の一つとし て参加した。
附属駒場中・ 高等学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属 高校	2006.12.1	2011.4.28～ 2016.4.27	北京師範大学附属実 験中学との中等教育 分野での交流	生徒の国際交流の促進	筑波大学と中華人民共和国北京師範大学と の交流協定締結に協力した。
	中華民国（台湾） 国立台中第一高級中学	2015.12.11	2015.12.11～ 2020.12.10	研究発表（主に理系分 野）、文化交流など	両校は、学術交流と学校 間の提携を促進し、生徒 達の国際的な視野の拡大 を促進することを目的と する。	2015年4月、相手校から姉妹校協定締 結の申し出あり、5月1日に本校校長他 が訪問した際に詳細な打合せを行った。 5月27日、相手校校長が来校し、詳細 事項を詰めた。
附属坂戸高等 学校	インドネシア共和国 ボゴール農科大学附属 コルニタ高等学校	2010.12.1	2015.12.1～ 2020.11.30	国際教育・ESD（教 員間の教育研究、生 徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流お よび生徒同士の協働的 教育活動の実施	交流は筑波大学農林技術センターが 2008年に採択を受けた文部科学省「国 際協力イニシアティブ」教育協力拠点形成 事業に端を発する。その後トヨタ財団「ア ジア隣人プログラム」の助成を受けた活動 や「アジア高校生聞き書きプログラム」な どで協働。
	インドネシア共和国 林業省附属林業教育セ ンター	2013.3.19	2013.3.19～ 2018.3.18	国際教育・ESD（教 員間の教育研究、生 徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流お よび生徒同士の協働的 教育活動の実施	以前からの「アジア隣人プログラム」や 「アジア高校生聞き書きプログラム」等 でのインドネシアでの活動の際に協力を 得たことから交流が始まった。林業教育 センター・インドネシア林業省・在日 インドネシア大使館の強い要望を受け協 定締結に至った。
	インドネシア共和国 国立パダン第6高等 学校	2015.9.1	2015.9.1～ 2020.8.31	国際協働学習、ESD、 ユネスコスクール間の 国際ネットワーク構築	生徒及び教師の異文化理 解及び国際的研究活動の ため	2012年5月のインドネシアユネスコ 国内委員会との交流を契機として、毎年 本校と同委員会との交流を深めていった。 2014年ユネスコスクール関係者他が来 校し、パダン校から強い関心を示され、 2015年本校教諭が訪問し準備を本格的 に進めることで合意した。
	フィリピン大学附属ル ーラル高等学校	2015.9.1	2016.11.1～ 2021.10.31	国際教育・ESD（教 員間の教育研究、生 徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流お よび生徒同士の協働的 教育活動の実施	2010年に農林技術センターが開催した 「国際農学ESDシンポジウム」において 附属高校フォーラムが開催された際に、 国際教育担当教員間で連携に向けた協議 を開始。その後、卒業研究に関する相互 受入・支援、高校生国際ESDシンポジ ウムにおける協働活動を重ね、2016年 に交流協定に関する合意にいたり締結し た。
	タイ カセサート大学附属高 等学校	2017.11.9	2017.11.1～ 2022.10.31	国際教育・ESD（教 員間の教育研究、生 徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流お よび生徒同士の協働的 教育活動の実施	2010年に農林技術センターが開催した 「国際農学ESDシンポジウム」におい て附属高校フォーラムが開催された際 に、国際教育担当教員間で連携に向けた 協議を開始。その後、卒業研究に関する 相互受入・支援、高校生国際ESDシン ポジウムにおける協働活動を重ね、20 17年に交流協定に関する合意にいたり 締結した。
	タイ視覚障害者支援ク リスチャン財団及び財 団管理下の盲学校、視 覚障害関連教育・福祉 施設（タイ）	2020.1.13	2020.1.1～ 2024.12.31	短期留学を含めた生 徒間の学習活動の交 流 視覚障害教育及び関 連分野に関する情報 交換	両組織の生徒の交流活動 を通して、生徒の国際感 覚及び学力の向上を推進 する 両国の文化について深く 学び合うとともに、視 覚障害教育関連の活動を 推進し、両国ならびに両 組織の発展に寄与する	2015年から2017年にかけて、教育 長裁量経費によりタイプログラムを実施 。高等部生徒が毎年タイに渡航し、タイ の視覚障害生徒との交流が行われた。 2018年度からは、文部科学省トビタ テ1留学JAPANの制度を活用し、高 等部生徒の短期留学が始まる。今後短 期留学を定期的に実施する計画がある ことから、2019年に協定について打診 し、2020年1月に締結に至った。
附属聴覚 特別支援学校	フランス共和国 国立パリ聾学校	2003.9.22	2015.12.1～ 2020.11.30	初等中等教育（特別 支援教育）における 生徒間交流	フランスと日本両国の友 好と親善を促進すると ともに、両国の聴覚障害 教育の発展に寄与する	1999年頃、本校高等部専攻科生徒と パリ聾学校高等部職業科生徒の間で文 通を開始した。 2002年、パリ聾学校長から姉妹提携 の申し出があり、2003年9月、パリ聾 学校にて、交流協定書を交わした。

(2019 年 4 月～ 2020 年 3 月)

締結のメリット	協定締結後の構想			その他参考になること
	教員の交流方法	児童・生徒等の交流	その他	
現在、本校は実交流をしていないので、現状ではなし。		現在は特になし	現在は特になし	現在、中学校（中等教育）レベルでの実交流はされていないが、今後将来に向け本協定が両者間（中等教育）にとって有益となる事例を検討していきたい。
相互の文化交流と人的ネットワーク作り及び情報交換	意見交換・情報交換	相互の一体体験入学及び文化交流		2009 年 10 年に相互交流を実施
この協定をきっかけに、2007 年、2008 年に SSH(スーパーサイエンスハイスクール) 事業で訪問することができた。	SSH 事業として北京を訪問	SSH 事業として北京を訪問		
国立台中第一高級中学は理数系に優れ、大学からの指導・サポートを受けていることなど、本学が取り組む高大連携にとって非常に参考になる。				
・本校の生徒に交換留学生としてインドネシアに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・インドネシアから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	・交換留学（現地校で他の生徒とともに授業等に参加、期間は 1 ヶ月程度～ 1 年の間で状況に応じて実施） ・プロジェクト活動（SGH 事業における日本およびインドネシアでの合同フィールドワーク、環境問題等についてのネット会議、など）		
異文化理解の促進および協働学習活動を通じての国際教育の実現。センターに附属する 5 つの学校がインドネシア各地にあり、本校としても活動フィールドを飛躍的に広げられる。付加的要素として将来的にインドネシアから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できるかもしれない。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		現在、協定延長に関する協議を継続中
・附属坂戸高等学校のスーパーグローバルハイスクール事業に関する支援 ・スーパーグローバル大学事業、大学の世界展開力事業に対する支援 ・ESD およびその後継事業である GAP 活動に関する国際協力 ・生物多様性保全に関する学術交流の促進支援	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		インドネシアユネスコ国内委員会との連携
・本校の生徒に交換留学生とフィリピンに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・フィリピンから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		
・本校の生徒に交換留学生としてタイに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・タイから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的交流活動（交換留学含む）		
生徒の国際的素養や国際感覚を身につけ、将来世界で活躍する視覚障害者を育成することができる。 国際教育拠点の視覚特別支援学校として、日本の視覚障害教育をタイに発信及び展開させていく。またタイのインクルーシブ教育にも貢献できる。	学校訪問、視覚障害教育に関する情報交換等	短期留学プログラムの実施 skype を含む web 会議システムを活用した授業交流		
日本の聴覚特別支援学校（聾学校）を代表する本校が、世界最初の聾学校である国立バリ聾学校と交流関係を持つことは、グローバル化を目指す筑波大学に寄与できる。	教科指導や聴覚障害教育におけるグローバル人材育成についての情報交換および意見交換。	交流会や授業交流（英語・体育等）の実施		

項目 学校名	締結相手 (国名、機関名)	協定締結日	現締結期間	交流の分野	締結の目的	締結の経緯
附属聴覚 特別支援学校	大韓民国 国立ソウル聾学校	2015.6.1	2018.6.1～ 2023.5.31	生徒間の学習活動の 交流、聴覚障害教育 および関連分野に関 する情報交換	両校は、特別支援教育と りわけ聴覚障害教育に関 わる教員交流・生徒交 流・情報交換を通して、 両国の文化について深く 学び合うとともに聴覚 障害教育関連の活動を推 進し、両国並びに両校の 発展に寄与する。	2008年、筑波大学教員と本校校長他が 美術教育におけるICT教材の共同研究を すすめるために訪問、その後、本校中学部 生徒とのE-mailでの交流活動を行うなど 交流協定の基盤を築き締結に至った。
附属大塚 特別支援学校	大韓民国 大邱大学校大邱保明学 校	2009.12.29	2009.12.29～ 2014.12.28	知的障害教育の実 践・研究（指導法・ 教育課程・教材教具 等）	教員の交流、生徒の交 流、共同研究・研究交 流の推進、研究成果・研究 資料の交換等	筑波大学の障害科学系と大邱大学障害児教 育が既に交流協定を締結しており、本学と 同様の特別支援学校を有することから、学 校間交流にまで協定を広げ、現場での教育 実践・研究の国際教育協力を推進する必要 があった。
	インドネシア共和国 チバガンティ特別支援 学校	2018.2.	2018.2～ 2020.2	知的障害特別支援学 校における授業研究 会とおとした情報交 換・交流	・授業研究会による交流 において教師の授業力の 向上を図る	2017年11月に、本校の教諭2名がチ バガンティ特別支援学校を訪問した。授業 研究会に参加し、インドネシア教育大学に て日本の知的障害特別支援学校の教育につ いて講演をした。講演には、インドネシア 国内から特別支援教育に携わる500人以 上の教員が集まり、日本の特別支援教育へ の関心の高さが窺えた。授業研究交流を通 じて互いに意見交換を行うことで、双校の 教師の授業力の向上を期待できると考え た。
附属桐が丘 特別支援学校	大韓民国 セロム学校 (旧三育再活学校)	2010.2.3	2015.2.13～ 2018.2.12	・児童生徒間の学習 活動の交流 ・肢体不自由教育及 び関連分野に関する 情報交換	・日韓両国の肢体不自由 教育の充実と発展に寄与 するため。 ・国際教育の視点の一つ である日韓の相互理解と 親善を図るため。 ・附属学校の中期目標に 挙げている“国際教育拠 点事業”の一層の充実を 図るため。	2007年・2008年、両校の研究部長が 双方で開催された研究会に出席し、それぞ れ取組を発表。2008年度末、本校の代 表生徒1名を含む訪問団を同校に派遣。 2009年、校長ほか2名が同校を訪問 し、国際交流協定締結に向けた事前調整を 実施。同時にスカイプを使った交流授業を 開始。2010年2月、再び同校の校長、 研究部長等を本校の研究協議会に招聘し、 開催前日に国際交流協定を締結。
	台湾 国立南投特殊教育学校	2016.11.24	2016.11.24～ 2021.11.23	・児童生徒間の学習 活動の交流 ・特別支援教育及び 関連分野に関する情 報交換	・両校の交流活動（相互 訪問等）や教員間の情報 交換を実施しやすくす るため。 ・児童生徒の異文化体験 の機会を確保し、児童生 徒の気付きや学びを複眼 的・多角的に深めていく ため。 ・日台双方の肢体不自由 教育及び特別支援教育の 発展に寄与するため。	2014年5月、台湾国立南投特殊教育学 校の校務顧問が来校し、国際交流協定締結 の可否について打診。これを受け、同年 11月に本校校長ほか3名が同校を視察 し、国際交流協定の締結の可否について検 討。2015年10月、同校校長を含む訪 問団が来校し、その際に2016年の国際 交流協定締結を約束するに至った。
	台湾 国立和美実験学校	2016.11.25	2016.11.25～ 2021.11.24	・児童生徒間の学習 活動の交流 ・特別支援教育及び 関連分野に関する情 報交換	・両校の交流活動（相互 訪問等）や教員間の情報 交換を実施しやすくす るため。 ・児童生徒の異文化体験 の機会を確保し、児童生 徒の気付きや学びを複眼 的・多角的に深めていく ため。 ・日台双方の肢体不自由 教育及び特別支援教育の 発展に寄与するため。	2014年11月、本校校長ほか3名が、 台湾唯一の肢体不自由者を教育する特殊 教育学校である同校を視察。2015年11 月、本校副校長ほか2名と代表生徒2名 で同校を訪問し、国際交流協定締結の可否 について打診。その際、2016年の国際 交流協定締結について内諾を得た。
	中華人民共和国 浙江省寧波市 達敏学校	2016.8～ 2021.8	2011.8.29～ 2016.8.28	・教員間の教育実践 研究 ・児童生徒間の教育 活動	・日中両国の自閉症児教 育の充実と発展に寄与 するため。 ・日中の相互理解と親善 を図る。	2009年5月、中国寧波市達敏学校校長 が本校を訪問し教育実践を視察の結果、本 校への教員派遣・研修の実施の希望があり、 3回にわたって教員研修の受け入れを 実施。2011年度、達敏学校が全中国の 特別支援学校の研究指定校となり、国際的 な研究会議や研究発表等の実施を予定して いたため、それに向けて本校との姉妹校協 定締結について申し出があり、同年8月 29日に協定書を交わした。2016年8 月に締結期間を5年延長。
附属久里浜 特別支援学校	中華人民共和国 江蘇省蘇州工業園区 仁愛学校	2014.9.28	2014.9.28～ 2019.9.27	・教員間の教育実践 研究	・日中間の文化交流を深 め、両国の特別支援教育 領域の促進を図るため。	2014年1月、副校長と小学部主事およ び幼稚部教諭の3名で中国江蘇省蘇州工 業園区仁愛学校の求めに応じ視察を行っ た。その後、立命館大学に留学予定のある 教員が本校の実践研究協議会に参加した。 同校の校長や教員から、本校への教員派 遣・研修の実施の要望があり、2014年 9月の2度目の視察の際に日中自閉児教 育研究会を同校にて実施するとともに、本 校との姉妹校協定締結を行った。

締結のメリット	協定締結後の構想			その他参考になること
	教員の交流方法	児童・生徒等の交流	その他	
スーパーグローバル大学である本学の附属学校として、聴覚障害教育の専門性の向上に貢献でき、韓国の特別支援教育に関する最新情報（障害者の権利に関する条約批准の状況、教育課程、教科書等）を得ることができる。	学校訪問、情報交換	ネットワーク回線を利用した遠隔地間授業交流	研究会等での発表	
両国が同じような教育条件・教育環境にあることから、特別支援教育に関してアジアからの情報発信ができる。特別支援学校が５校（視覚障害・聴覚障害・肢体不自由・情緒障害・知的障害）あることの共通性を生かして、他４校の交流に発展できる。	両校とも校費による海外出張で相互に交流する。	メールやHPなどを通じて幼児児童生徒間の交流を進め、将来は高等部修学旅行を韓国として、大邱保明学校への交流訪問を実現させたい。		大邱保明学校には、日本語に比較的堪能な教諭がおり、大邱大学教員（洪先生 本学障害科学系DC修了）が通訳しなくても交流が可能であることが分かった。
・授業研究交流を通して互いに意見交換を行うことで、双校の教師の授業力の向上を期待できる。 ・交流を通して得られた知見の発表し、知的障害教育の実践分野における国際教育拠点として貢献できる。	互いの学校の授業研究会に教諭をそれぞれ派遣し、情報交換、意見交換を行う。 授業研究におけるWeb会議を通して、教員間の相互の専門性の向上を図る。事前に授業研究の動画と指導計画（翻訳済み）を確認してから研究会議に臨む。	Web環境を整え、今後生徒間の交流をインターネット回線やビデオレター等を使って交流を実施させたい。		交流時期と両国を結ぶ通訳者の安定的な供給が必要である。その為の予算確保。
・お互いの学校の研究テーマに沿って意見交換、情報交換ができる。また、研究発表の場を相互に設けることができる。 ・児童生徒の異文化理解を広げ、海外の児童生徒とコミュニケーションする機会を確保することができる。（外国語学習への意欲を高める。） ・筑波大学と桐が丘特別支援学校の存在を韓国でより広く知ってもらえる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換、研究会参加、研究成果共同出版。	学校訪問、ビデオレター等の交換、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介、スカイプを使った交流授業。		2010年、高等部3年が韓国に修学旅行で渡航し、三育再活学校（現セロム学校）を表敬訪問。当初、高等部生徒による交流活動だけであったが、2012年より小学部児童・中学部生徒も交流活動に加わるようになった。
・韓国セロム学校との国際交流に加え、新たに台湾交流を始めることにより、児童生徒の異文化理解の場を広げることができる。 ・国際教育拠点事業の拡充につながる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換。	学校訪問、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介、スカイプを使った交流授業。		現時点では、高等部生徒による交流活動のみ。
・韓国セロム学校との国際交流に加え、新たに台湾交流を始めることにより、児童生徒の異文化理解の場を広げることができる。 ・国際教育拠点事業の拡充につながる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換。	学校訪問、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介。スカイプを使った交流授業。		現時点では、高等部生徒による交流活動のみ。
特別支援学校関係での中国との交流は、まだ十分とは言えず、この交流が実現すれば、今後のこの分野における教育の充実の基礎となることが期待される。	・自閉症児への指導方法、指導内容等にかかわって、研修交流及び研究にかかわる指導助言。	予定なし	達敏学校の教育実践の様子を視察するとともに、実践研究について交流し、必要に応じて指導助言する予定。また2012年度の達敏学校を会場として行われた研究会に参加した。	2012年度は訪中して達敏学校の授業参観や研究会の具体化を計画したが、日中関係の悪化によって見合わせた。ただし、日常的にカンファレンスなどの実績ができるよう、通信環境や機材の整備を行った。訪日した校長や副校長と今後の交流の在り方に関する意見交換を行った。2017、2018年度と2回に分け、達敏学校の全教員の研修を受け入れた。
中国は近年自閉児教育の充実に力点を置いていて、日本の教育的支援を強く希望している。両国の自閉症を中心とした特別支援教育の発展に向けて本校が貢献できるよい機会となる。	・自閉症児への指導方法、指導内容等にかかわって、研修交流及び研究にかかわる指導助言。2015年以降は、本校の公開授業の動画データなどを用いて、skypeによるケースカンファレンスや授業研究会などを定期的に行っている。	本校のきらきらコンサート、運動会などの催しをskypeにて配信し、児童間の交流も行う予定である。	定期的に同校から教員の派遣を受け入れ、本校において研修を行う予定である。	

締結・更新の記録

年 度	学 校 名	新規／更新	相手校・機関
平成 21（2009）年度以前	附属中学校	新規	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高等学校	新規	//
	附属駒場中・高等学校	新規	//
	附属聴覚特別支援学校	新規	国立バリ聾学校（フランス共和国）
	附属大塚特別支援学校	新規	大邱大学校大邱保明学校（大韓民国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	三育再活学校（大韓民国）
平成 22（2010）年度	附属坂戸高等学校	新規	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
平成 23（2011）年度	附属中学校	更新	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高校	更新	//
	附属駒場中・高等学校	更新	//
	附属久里浜特別支援学校	新規	浙江省寧波市達敏学校（中華人民共和国）
平成 24（2012）年度	附属坂戸高等学校	新規	林業省附属林業教育センター（インドネシア共和国）
平成 26（2014）年度	附属桐が丘特別支援学校	更新	セロム学校（旧三育再活学校）（大韓民国）
	附属久里浜特別支援学校	新規	江蘇省蘇州工業園区仁愛学校（中華人民共和国）
平成 27（2015）年度	附属駒場中・高等学校	新規	国立台中第一高級中学（中華民国（台湾））
	附属坂戸高等学校	更新	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
	//	新規	国立バダン第 6 高等学校（インドネシア共和国）
	附属聴覚特別支援学校	更新	国立バリ聾学校（フランス共和国）
	//	新規	国立ソウル聾学校（大韓民国）
平成 28（2016）年度	附属小学校	新規	光州松源書等学校（大韓民国）
	附属坂戸高等学校	新規	フィリピン大学附属ルーラル高等学校（フィリピン共和国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	国立和美実験学校（台湾）
	//	新規	国立南投特殊教育学校（台湾）
平成 29（2017）年度	附属坂戸高等学校	新規	カセサート大学附属高等学校（タイ）
	附属大塚特別支援学校	新規	チバガンティ特別支援学校（インドネシア共和国）
	附属桐が丘特別支援学校	更新	社会福祉法人 SRC 附属広州セロム学校（旧セロム学校）（大韓民国）
平成 30（2018）年度	附属聴覚特別支援学校	更新	国立ソウル聾学校（大韓民国）
令和元（2019）年度	附属視覚特別支援学校	新規	タイ視覚障害者支援クリスチャン財団及び財団管理下の盲学校、視覚障害関連教育・福祉施設（タイ）

(資料) 報告書発行の記録

第1集 (2007～2008年度) 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想に関わって～	2009年2月発行
第2集 (2009～2010年度) 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2011年7月発行
第3集 (2011年度) 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2012年3月発行
第4集 (2012年度) 新たな国際教育の展開 ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2013年3月発行
第5集 (2013年度) 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材の育成を目指して～	2014年3月発行
第6集 (2014年度) 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材育成の充実を目指して～	2015年3月発行
第7集 (2015年度) 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～ダイバーシティ共生社会を創る人材育成の発展を目指して～	2016年3月発行
第8集 (2016年度) 附属学校群の国際教育の推進	2017年3月発行
第9集 (2017年度) 附属学校群の国際教育の推進	2018年3月発行
第10集 (2018年度) 附属学校群の国際教育の推進	2019年3月発行
第11集 (2019年度) 附属学校群の国際教育の推進	2020年3月発行

令和元年度附属学校国際教育推進委員会名簿

委員長	茂呂 雄二	筑波大学副学長・附属学校教育局教育長
副委員長	濱本 悟志	附属学校教育局教授・教育局次長
副委員長	飯田 順子	附属学校教育局准教授
	雷坂 浩之	附属学校教育局教授・教育長補佐
	小林 美智子	附属学校教育局・教育長特命補佐
	下山 直人	附属学校教育局教授、附属桐が丘特別支援学校長
	木村 範子	附属学校教育局講師
	鷺見 辰美	附属小学校
	和田 亜矢子	附属中学校
	勝田 仁之	附属高等学校
	八宮 孝夫	附属駒場中・高等学校
	建元 喜寿	附属坂戸高等学校
	青松 利明	附属視覚特別支援学校
	眞田 進夫	附属聴覚特別支援学校
	仲野 みこ	附属大塚特別支援学校
	小藺 慶子	附属桐が丘特別支援学校
	加藤 敦	附属久里浜特別支援学校

